
ガーディアン ~もう一人の戦士~

崎浜秀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガーディアン ～もう一人の戦士～

【Nコード】

N4366H

【作者名】

崎浜秀

【あらすじ】

鬼獣を封じる力を持つ封術師と、封術師を守るガーディアン。『ガーディアン』本編では語られないもう一人の戦士、桜嵐晃の視線から描いたもう一つの戦い。

プロローグ

小鳥の囁ささやりと共に、ベッドで眼を覚ました。

携帯のアラームが鳴る前にそれを解除し、小さく欠伸をして体を起す。荷物の整理が終わり、殺風景な部屋を一通り見回し、もう一度欠伸をする。

眠過ぎる。結局、一時間チョットしか、眠る事が出来なかった。

ベッドから立ち上がり、水色のカーテンを開く。眩しい朝の日差しは無く、淀んだ灰色の雲が暗いグラデーションを広げていた。

「雨……降りそうだな」

ため息の後にそう言葉を続けた。

とりあえず、出掛ける支度をしていると、ドアの向うから激しい足音と声が二つ。

「今日は僕が起こすんだよ！」

朝から元気いっぱいの明るい声。一方、

「駄目だよ。お兄様はお疲れなんだから」

ゆったりとした落ち着いた口調に、優しく暖かな印象を与える声。どちらも僕がよく知る声だった。

「はあ〜っ」

小さなため息。と、同時に部屋のドアが開かれ、妹二人が部屋に乱入してきた。

「あきら〜!」

「美空ちゃん。駄目だよ」

「なら、優海ゆづみは下で待ってるよ。僕は晃を」

美空の言葉が途切れ、眼が合う。暫しの沈黙の後、笑顔を見せ、

「おはよう」

「て、起きてるし! 優海がうるさいから!」

黒のショートボブの美空がそう叫ぶ。やや吊り目がちの目を、更に吊り上げそう怒鳴ると、その後ろに居た茶色みを帯びた黒髪のショートボブの優海が、申し訳無さそうに謝る。

「ごめんなさい。お兄様」

「別に優海の所為じゃないよ。既に起きてたし」

笑顔でそう答えると、優海の顔も笑顔に変わる。

美空と優海は僕の双子の妹だ。黒のショートボブに、やや吊り目の目、幼さが残る顔立ちの方が美空。体型は子供っぽい。運動神経はよく、学校でも人気者らしい。

一方、茶色みを帯びた黒のショートボブに、オツトリとした穏やかな目に眼鏡を掛けている方が優海だ。美空と違い、前髪をハート型のピンで留め、右目の目尻に小さなホクロがある。スタイルは良い方だと、思う。何故か、僕の事を「お兄様」と、呼んでいる。二人とも可愛い妹だと思う。

支度をしている間中、文句を口にする美空に対し、優海は「うん、うん」と頷く。一応、優海の方が妹なので、文句も言わず話を聞いているのだろう。

支度を終えると、それを待ってましたと言わんばかりに、美空が

笑顔に向けた。

「晃、晃、ご飯どうする？」

「あのな……。一応、注意して置くけど、僕の方が年上だからな」

「いいじゃん！ 一つしか変わらないんだし、それより、ご飯どうする？」

やはり、言っても無駄だった。もはや、恒例行事のやり取りに、優海が楽しそうに微笑む。半ば諦めたため息を漏らすと、不満そうに美空が頬を膨らす。

「何？ 僕にもお兄様って、呼んで欲しいわけ？」

背筋がゾツとする。美空にお兄様……。ありえない。

「悪い。もう言わないから」

すぐさま謝った。

「それで、ご飯は？」

しつこくそれだけを聞くと言う事は、今日の朝食は美空が作った様だ。だが、待ち合わせまで時間が無い為、残念だが今回は。

「悪い。今から、待ち合わせなんだ」

「エーッ！ 今日のは力作なんだよ！」

「また、今度食べさせてくれな」

「何だよ、何だよ！ もういいよ！」

乱暴に扉を開き美空は部屋を出て行った。

小さくため息を漏らすと、今まで黙っていた優海が、

「お兄様、帰って来てからでも、食べてくれませんか？」

「残してくれれば、食べるけど……どうして？」

「美空ちゃん、朝早く起きて頑張ってたから」

「そっか……。悪い事しちゃったな」

「大丈夫です。美空ちゃんはお兄様の事が好きですから」

何のためらいもなくそんな事を口にする優海。聞いているコツチが恥ずかしい。それを口にした優海も恥ずかしかったのか、少し頬を赤らめている。考えてみれば分かる。恥かしがり屋の優海が、姉の為にどれ程勇気を出してあんな言葉を口にしたのか。本当に出来た妹だ。

そんな事を思い、優しく頭を撫で「ありがとうな」と、口にして部屋を後にした。

待ち合わせ五分前。

隣町の神盛町ウツミシロに在る駅前ウツミシロの一本桜の前に居た。ここは、目立つし待ち合わせには最適だと、聞いていたが……先客が多く存在していた。これじゃあ、待ち合わせ相手が居ても見つけれないんじゃないかなどと思うが、そこは誰もが持つ現代機器、携帯電話と言う便利なものがある。待ち合わせ時間になれば、メールでも電話でもすればいいじゃないか。

ボンヤリと八分咲き程の桜を見上げる。満開の時に来たかったな。何と無く頷き、視線を落とすと、人混みの向うから黒のフードを被った男が、大きなケータイ型のカバンを持って飛び出してきた。

突然、目の前に現れたその人物をかわす事が出来ず衝突した。その衝撃に視線が一変し、後ろの人を巻き込んで倒れていた。

「イタタタツ……」
「す、すいません」

すぐさま後ろの人に謝る。すると、寝癖頭を右手で摩りながら、僕の方へと顔を向けた。

「俺は大丈夫です。それより」

彼の言葉が詰まり、周囲を見回す。僕もそれに釣られて周囲を見回すと、足元に見た事の無いアクセサリーが散乱していた。そして、スーツ型のカバンが開かれ、フードを被った男がそれを集める。

どうやら、その男の持ち物がぶつかつた衝撃で散ばってしまった様だ。ぶつかつて来たのは向うだが、避け切れなかつたこっちにも非はある。そう思い、散ばつたアクセサリーを集めるのを手伝う。すると、僕が巻き込んで倒れた少年も一緒になつて集め始める。

「すまん。すまん。急いでてね」

アクセサリーを全て集め終わると、穏やかな口調で男がそう言う。この人も待ち合わせなのだろう。しかし、もう暖かくなつて来たと言うのに、何故この人はそんなに厚着をしているのか、疑問に思う。赤黒い髪がフードの下から見え隠れするが、その顔立ちをよく分らない。顔をジツと見ていたのに気付いたのか、男が僕の方に目を向けた。だが、すぐに僕の隣りに居た少年の方に顔を向け、スーツ型のカバンから一つのネックレスを取り出し、

「これは、お前にピツタリのサポートアームズだ。拾うのを手伝つてくれたお礼にくれてやる」

「あつ、イヤ……。そんなつもりじゃ……」

「嫌々。遠慮する事は無い。貰つておけ」

半ば強引にネックレスを手に握らせる。迷惑そうな少年。そりゃそうだろう。あんな高価そうなアクセサリーをただでくれるなんて、怪し過ぎる。忘れた頃に高額料金を要求されるんじゃないだろうか。そんな心配を他所に、男の体がちちらに向く。咄嗟に身の危険を感じ、一歩左足を後退させると、そこで携帯電話が鳴った。

これを逃すわけには行かないと、すぐに会釈し、

「すみません。僕、待ち合わせしてるんで」

と、言葉を残し、その場を切り抜けた。

この時、僕は気付いていない。僕が彼の運命を戦いの中へと巻き込んでしまったと言う事を。

プロローグ（後書き）

本編のガーディアンでは語られない、もう一つの戦士のお話ですが、楽しんでもらえる様に頑張っていきたいです。

今回は完全に桜嵐晃の視線から送る一人称の物語となっていますが、本編同様よろしくお願いします。

第一話 入学式

入学式。

朝早くから真新しい制服に身を包み、森楼学園しんろうがくえんの校門前に佇む。ここで、楽しい高校生活が始まる。そんな事を思いながら、校門を潜ると。

「おはよう!」

の声と同時に、首にリアットが飛んできた。

瞬間的にその腕を掴むと、そのまま背負い投げを見舞う。綺麗に宙を舞い、地面に叩き付けると、苦しそうな男の声が耳に届いた。

「あうううっ……。お前」

地面に倒れる奴の顔をよくよく見ると、ソイツは良く知る人物だった。

「博人。何してるんだ?」

「お前に投げられたんだよ」

不服そうな顔のコイツが、加賀博人かがひろと。ボサボサの黒髪に、目付きが悪い。顔付きもゴツゴツしてるし、印象は最悪だ。じと目で彼を見つめる。一応、同じ中学の出身者。親しい間柄か、と聞かれれば「違う」と即答するだろう。

とりあえず、無視する事にした。相手にすると疲れるし、博人の目的は僕じゃなく。

「おはよう、桜嵐」

可愛らしい声色と共に登場したこの一人の女子生徒だからだ。

肩まで伸ばした外に刎ねた黒髪が揺れ、パツチリとした目がコツチを見る。可愛いと言えば可愛い顔立ちだが、長年見慣れた僕からすれば普通だ。何処が可愛いのか不思議な程だ。

彼女は吉井加奈と言つて、博人と同じで中学が一緒だ。一応、幼馴染だけど、僕は彼女の事を『吉井』と苗字で呼んでいる。

「おはよう！ 加奈ちゃん！」

博人が吉井に妙に馴れ馴れしい感じで挨拶をする。二人がどういう関係なのかは、全く興味が無いが、これだけは言える。

「あつ、加賀も居たんだ」

吉井の方に気は無いと言ふ事は。

しかも、面倒な事に

「同じクラスだとね。桜嵐」

僕に対して眩しいまでの笑顔を向ける。これは、博人に対する当て付けなのか？ だが、それは僕には迷惑でしかない。ただでさえうるさいのに、そう言う態度を取られるとあらぬ火の粉が。

「テメエ！ 加奈ちゃんのなんなんだよ！」

降り掛かった。胸倉をつかまれ、興奮する博人が顔を寄せる。鼻息が顔に掛かる程の距離。視線を逸らし、引き攣った笑いを見せた。

「さ、さあ？ 僕に言われても」

「じゃあ、何でんなに親しげなんだよ！俺にも向けないあんな眩しい笑顔を」

「僕が知る訳ないだろ」

「ただ単に、お前が嫌われているだけだろ」

別の声が背後からそう言うと、博人の手が襟首を絞め、何故かそのまま僕に怒鳴り声を響かせる。

「何だと！誰が嫌われてるだ！」

「ぼ、僕が言つて無いだろ！」

博人の手を振り払い間合いを取ると、その間を眼鏡を掛けた男子生徒が当然の様に通り過ぎる。コイツがさっきの声の主、小野山信二。コイツも同じ中学の出身者で、剣道部の主将をしていた。冷静と言うべきなのか、冷たいと言うべきなのかは定かじゃないが、とりあえず物静かな奴だけど、何故か博人に対しては暴言を吐く。

僕は結構仲の良い方だと思っているけど、当の本人がどう思っているのかは不明だ。

彼の顔を見ていると、不意に足を止め体をこちらに向ける。眼鏡越しに藍色の瞳が顔を見据え、静かに口が開かれた。

「昨日……皆川さんに会ったんだってな。どうだった？」

「ど、どうって？」

突然の事にその言葉を返すと、信二の額にシワが寄る。

「元気そうだったか？」

「えっ、ま、まあ。そりゃ元気だろ」

「そうか……」

それだけを確認すると、静かにその場を去っていった。彼の目的がなんだったのかはさて置き、何故昨日皆川に会っていた事を、彼が知っているのかを僕は知りたい。別に秘密にしてたわけじゃないけど……何だか怖いな。

ため息を吐くと、冷やかな視線が背中を刺す。な、何だろう。凄く嫌な汗が出てくるし、殺気のようなモノを背後から感じる。

恐る恐る振り返れば、そこに鬼の様な形相をした吉井の姿が。つて、何で怒っているんだ。何か悪い事したのか？ 記憶を辿るが吉井が怒る様な事をした覚えは無い。つてか、挨拶位しか交わした覚えが無いんだけど……。

引き攣った笑みを浮かべていると、吉井の足が一步前に出る。

「フフフフツ」

含み笑いが、更に恐怖を増す。

ここは、無難に逃げよう。そう思い踵を返すと、右肩を強い力で掴まれた。

「何処に……行くのかな？」

「いや……初日から遅刻はまずいだろ？」

「そんな事より、詳しく話しが聞きたいなあ」

「よし。博人。ここは」

博人の居た方へと顔を向けるが、そこには誰も居なかった。逃げた……か。何とまあ危機回避能力に長けた奴だ。あの一瞬で自分に掛かってくる火の粉に気付くとは……流石と言うべきなのだろう。

小さくため息を漏らし振り返る。ここは覚悟を決めなければならぬ場面。きつと、ここが人生の分岐点なのだ。選択肢は二つ。ここに残るか、すぐに逃げるか。どちらかがバッドエンドに違いない。いや、両方共バッドエンドの可能性も。

様々な考えが頭の中を巡る中、初めに口を開いたのは吉井の方だった。

「それで、奈菜ちゃんとは何の密会？」

「み、密会って……そんなんじゃないって。ただ、相談をさ」

「何の相談かしら？」

笑顔の問い詰めに一步後退する。眼が怖いんだけど、何て言えず笑顔を返す。

「で、何の相談だったの？」

「何のって……そりゃ……」

口籠る。幾らなんでも言えないだろ。一応、内緒の相談なわけだし。誰にも言わないと皆川と約束もした。その為、言う事はたった一言。

「そりゃ、秘密だ」

「な、何よ！ いかかわしい相談なわけ！」

「いや……。絶対に言わないって約束だから」

「何よ！ この」

吉井に押され後退すると、背中に何かがぶつかった。それが、人であるとすぐに気付き、振り返り頭を下げた。

「すみません」

「……」

返答は無く、冷やかな視線に気付く。それが、吉井の放つ視線と違い、間違いなく殺意のこもったモノだと、直感的に理解し顔を上

げた。ショートボブの髪。黒　いや、黒みがかった紺色だろうか。そんな感じの髪の色に、鋭く冷たい目。僅かに青みがあった瞳が、じっと目を見据える。整った顔立ちなのに、可愛いと感じるより先に恐怖を感じた。

顔をジツと見てみると、突如目付きが穏やかに変わり、優しく微笑みながら口を開く。

「すみません。私、急いでますんで……」

「は、はあ……」

「それじゃあ」

軽く会釈し、その場を去っていく彼女の背中を見ながら、僅かに首を傾げた。あの時に感じた殺意は……一体なんだったのだろう。不思議になつて吉井の方に顔を向ける。

腕組みをし、不満そうに頬を膨らす吉井に、静かに尋ねる。

「あんな人、入試の時にいたか？」

「知らないわよ。入試って、何百人いたと思ってるのよ」

「だよな……。でも、少し変わってなかったか？」

「あんた程じゃないんじゃない」

やはりまだ怒っているのだろう。言葉が刺々しい。

その後、学園のチャイムが鳴り、僕と吉井は体育館へと移動した。もちろん、交わす言葉など無く、静かに。

第二話 遭遇

式が終わり、教室へと戻った。

今日からお世話になる教室は、意外にも綺麗だった。流石にキチンと掃除されている様だ。廊下側の三番目が僕の席だ。すぐ後ろは信二、その後ろに博人となっている。吉井は窓際の一番後ろの席になった。

凄く刺々しい視線が背中に突き刺さるが、気にせず頬杖を付いたまま黒板を見据える。澄んだチャイムが鳴り、騒がしかった教室が一気に静まり返った。何処かでヒソヒソ話が聞こえるが、興味が無いので聞き流す。

三分が過ぎる頃か、教室のドアが乱暴に開かれレディスーツに身を包んだ小柄な女性が乱入してきた。そして、第一声が

「うおおくれた！」

だった。とても元気の溢れる明るい人の様だ。黒髪にポニーテール、綺麗な顔立ちと裏腹に、額の右側に切り傷の様なモノが見えた。何と無くだが、危険な匂いを感じるのは、僕だけだろうか？ いや、多分クラスの大半は同じ匂いを感じたと思う。妙にざわついている。ざわざわする生徒達に、乱入してきた女性は、教卓の前に立つと出席簿を開き明るい笑みを生徒に向ける。思わずその笑みに見入ってしまったが、それはやはり僕だけでなく、ざわついていた生徒達もいつしか静まり返っていた。

「うんうん。流石に緊張しちゃってるよね。先生も緊張してるんだよね。だから、三分も遅刻しちゃって、ゴメンね。三分って言ったら、カップラーメンだって出来ちゃうだよね」

何が言いたいのかわからないが、先生がこの場を盛り上げようと努力していると言う事は分かる。でも、僕の見限り、スベッている。間違いない。その異様な空気を悟ったのか、引き攣った様な笑みを浮かべている。

「うーん。もしかして、スベッてる？　って、聞かなくてもスベッてるんだよね。ハハハハ……」

弱々しく笑う。流石に可哀想になってきた。そろそろ、何らかの助け舟を出した方がいいのだろう。しかし、ここで共倒れになると言う可能性もあるわけで……。

悩んでいると、吉井の声が聞こえた。

「先生。とりあえず、自己紹介しましょう。早く先生の名前も聞きたいし」

「だよね、だよね」

吉井の言葉で、先生の表情がパツと明るくなり、調子のいい口振りでそう言う。何とも分かりやすい人だ。でも、こんな先生だと、きつと楽しい高校生活が送れそうだ。

頬杖を付き、廊下側の窓の外を見据える。別に何が見えるわけでも無いが、空を見ていると心が落ち着く。ジジ臭いと自分でも思う。親にも良くそう言われた。別に気にはしてないけど、人前ではなるべくしない様に努力している。

小さく息を吐き、視線を戻す。黒板をチョークがリズム良く叩く音に耳を傾けながら、小さな先生の背に目を向ける。ポニーテールの髪が尻尾の様に揺れ、可愛い鼻歌まで聞こえた。先生と言うより同級生か年下に見えてくるのは、その行動が子供っぽいからだろう。

そうこうしている内に、チョークの動きが止まり、振り返った先

生が明るく可愛らしい笑みを見せる。

「私の名前は水守^{みすもり}琴音^{ことね}。呼ぶ時は琴音ちゃんか、琴音先生って呼んでね。」

語尾に音符のマークが付くんじやないかと思うほどの笑みを向ける先生に、生徒達の反応は薄い。いや、薄いつて問題じゃない。明らかに引いてる。全ての生徒が、今の先生の発言に。

「水守先生」

「あや？ エツと、キミは桜嵐晃君だね。先生の事は。」

「いや。流石に慣れなく琴音ちゃんなんて呼ぶのは、まずいと思うんですけど。」

「エーッ！ 何でだよ！ 先生が良いって言ってるんだよ？」

まるで子供の様な口振り。本当に先生なんだろうかと、疑いたくなる。思わずため息を吐くと、水守先生は子供の様に頬を膨らす。

「コラ！ 何でため息吐くんだよ！」

「す、すいません……。水守先生」

「あーっ！ だから って、もう良い……。キミは特別に琴ちゃんと呼ぶ事を許可しよう！」

な、何故そうなる。しかも、生徒全員の視線が集まり痛々しく胸を貫く。何だ、僕は恥をかく為に発言したのか。いや違う。場の空気を戻そうとして発言したはずだ。何故、こんな状況に追いやられているんだろう。

肩を落としてもう一度小さなため息を漏らす。やつちやいけないと思っていたが、思わず出てしまったため息に、水守先生が更に言葉を荒げる。

「うおおおい！ だから、何でため息吐くんだよ！」

「水守先生……もうやめ」

「だ・か・ら、琴ちゃん！ 聞いてた？ さっきの私の話聞いてた？」

「しっこい……」

思わずそう口にしてしまったが、すぐに後悔する。水守先生が涙目でコツチをジツと見ていたからだ。その表情に教室内の空気が一変し、ざわざわと生徒がザワメク。所々で「先生、泣かしてるぞ」何て言う声も聞こえ、完全に僕が悪者になっている。呆れて言葉の出ない僕に、更に追い討ちを掛ける様に、水守先生が涙声で、

「琴ちゃんって……呼んで……グスン」

と、言った。その言葉で生徒達のヒソヒソ声が広がり、冷たい視線が更に集中する。胸が苦しい。恋じゃない。この息の詰まる空気に耐え切れず、胸が苦しいのだ。この空気から逃れる為に、窓の外へと目を向けた。なんだか空が滲んで見える。

またため息が出そうになるが、そこを我慢して水守先生へと視線を戻すと、潤んだ瞳がジツとコツチを見ていた。その目を真っ直ぐに見据えていると、周りの空気が『琴ちゃんって言え』と訴えているのが分かる。その為、僕も渋々「琴ちゃん」と呼んだ。

すると、泣き出しそうだった顔が、満面の笑みに変わり「エへ」と可愛らしく笑う。子供か、と言いたかったが、もう僕の心が折れていたのだからそれ以上何も言わなかった。

その後は何事もなく過ぎ、無事に入学初日を終えた。

教室での水守先生とのやり取りで疲れ切っていた為、足早に帰路

に着く。重い足取りで帰路を進んでいると、不意に足が止まった。いつの間にか静まり返った周囲の空気が告げる。これ以上近付くなくと。

ヒシヒシと肌を刺す感覚が強まり、物陰から静かな足音と共に何かが姿を見せた。それは、異様な空気を纏った不気味な存在だった。四足歩行の獣。姿は狼に似ている。青白い光を身に纏い、美しい毛並みを逆立てる。威嚇している様で、これ以上足を進める事が出来なくなった。

一瞬、頭の中に色々な事を思い出す。走馬灯……と、言うべきなのだろう。死の直前に色々な思い出が蘇ってくるって、良く言うから。そんな感じで色々な記憶が一瞬で蘇り、ハッと我に返った時、青白い光を放つ獣がコツチに向って駆け出した。

「ガウツ！ ガウウウツ！」

「うわあああつ！」

獣の声に思わず悲鳴を上げる。咄嗟にどう対処するか考えるが、逃げる以外の考えが浮かばず、走り出す。だが、すぐに回り込まれ逃げ道を塞がれた。鋭い牙をむき出しにし、その獣が飛びかかってきた。その瞬間、目の前がプツンと真っ暗になった。全ての機能を停止してしまった様に。

その後、何があったのか分からない。ただ、目を覚ました時、そこは部屋のベッドの上だった。

第三話 噂

「ヨオオオオシ！ 今日も一日頑張るぞ！ さあ、晃行くぞ」

絶好調と言つべきハイテンションの水守先生が、朝のホームルームを終えると同時にそう叫んだ。何処に行くのか、気になる所だがあえて無視する。毎朝の事だが、あのテンションにはついていけない。

小さな吐息を漏らし、窓ガラス越しに廊下を見据える。一時限目から移動教室なのか、忙しく生徒達が行き交う。新生生とは実に初々しい。自分の事を棚に上げているとはよく言つが、そこは軽くスルーしよう。

そうこうと色々考えながらぼんやりしていると、視界に突然巨大な顔が現れる。隆々とした骨格の顔と悪人の様な目が一瞬見え、凄まじい衝撃と共に消えていった。遠くの方で何かガロッカーとぶつかる音が聞こえてくるが、気にしない。逆に気になるのは、目の前でコツチを睨む見慣れない女子生徒。

髪は短めでボサボサの金髪。目付きは博人に引けを取らない程悪い。関わりとろくな事が無いと思うが、あそこまで真剣に睨まれると流石に声を掛けないわけには行かない。

「な、何？」

「お前、桜嵐晃だろ」

相変わらず目付きは悪いまま、多少乱暴な口調で聞く。否定する事もないので、そこは素直に返答する。

「ええ。まあ、そうですね、どちら様で？」

「アタシは、霧咲遊里。一応、新生生」

「はあ……それで、僕に何の用」

不本意ながらそう尋ねる。

すると、腕を組み軽く首を傾げた。そうしたいのはコツチだが、一応彼女の返答を待つ事に。

暫しの沈黙の後、タタタツと軽快な足音と共に聞き覚えのあるハイテンションの音が廊下から響いてきた。

「うあああつ！ 桜嵐 あーきーらー！」

「んっ？」

霧咲さんが振り返り、土煙を巻き上げるその影に険しい表情を浮かべる。廊下を行き交う生徒が明らかに変な目を向けるが、その人影は目も暮れずこちらに迫っていた。その事で不意に先程の言葉を思い出す。『さあ、晃行くぞ』と、言う言葉を。

小さく「あつ」と短音を漏らせば、霧咲さんが「へっ」と奇声を上げる。そして、土煙と共に現れたその小さな影が、両拳を振り上げ叫ぶ。

「コオオオラアアアツ！ 恥ずかしかつたじゃないか！」

「はい？」

思わず奇声を上げると、霧咲さんが僕の方に顔を向けた。視線がぶつかり、引き攣った笑みと共に、

「妹？」

刹那に放たれた水守先生の飛び蹴りが霧咲さんの腹を抉った。

「ぶぐっ！」

「誰が、発音が悪いだ!」

「誰もそんな事言つて無いよ。先生」

諫める様に水守先生の頭を撫でると、涙目で僕の顔を見上げ、鼻息を荒げ口を開く。

「うーっ! うーっ!」

「まあまあ」

「って、何で付いて来てないのよ! 私、ずっと一人で喋ってたんだよ! 恥ずかしかつたんだよ!」

顔を真っ赤にする水守先生。何とも可愛らしいその眼差しに、吸い込まれそうになるが、その気持ちを抑え笑みを返す。

その横で腹を押さえ蹲る霧咲さんが、「うっっ」と小さく呻き声を上げた。そこでようやく水守先生も霧咲さんに気付く。

「あれ? 七組の霧咲さんだよな?」

「七組なんだ。それは、知らなかった」

「知り合い?」

「ついさつき、衝撃と共に現れたのが、彼女です」

簡易的にことと次第を説明すると、水守先生は軽く頷き眉間にシワを寄せる。その渋い表情に小首をかしげると、水守先生の小さな手が服の裾を握った。その行動に訝しげな視線を送ると、僅かに瞳を潤ませ唇を動かす。

「浮気は……ダメだよ」

「浮気なんてしてません。って、そもそも、先生とはそう言う関係じゃないから」

「うっっ……うっっっ……。私とは遊びだったのね」

「先生……」

疲れ切ったため息を吐き、頭を掻いた。

その後、水守先生とミニコントを広げ、休み時間を終えた。一体何がしたかったのか良く分からなかったが、何と無く霧咲さんには悪い事をした気がする。と、思ったのは束の間だった。次の休み時間も、その次の休み時間も、暇さえあればやってくる。しかも、用件を言わずそのまま帰っていくから気になってしょうがない。

新手の嫌がらせだろうか。

「ふう〜っ……」

授業が始まって数分。これが五度目のため息となる。休み時間の事を考えれば、自然とため息も零れてしまふ。

そして、六度目のため息を吐いた時、背後から肩を叩かれた。叩いたのはもちろん後ろの席の信二なわけだが、振り返るべきかを一瞬考える。だが、すぐに振り返り尋ねた。

「何？」

「ため息ばかり吐いて、どうした？」

「ああ……。ちょっとな」

意味ありげにそう口にする、信二も悟った様に言葉を口にする。

「霧咲……さんだったか？ 彼女に何かしたのか？」

「いや……。別に何もして無いけど……」

「人は知らない所で怨まれている物だ。お前もきつと」

「いやいや。怨まれるも何も、会ったの初めてだから」

そう言うと信二の疑いの眼差しが向けられた。何で疑われている

のか、少々気になる所だが、それを口にするわけもなく、言葉を続ける。

「まあ、僕の方に非があるにしても、見覚えが無いからねえ……」

「どつちにしろ、早めに謝るんだな」

「んーん。話聞いてたかな？」

僕の話を完全にスルーした形で話を終わらせる信二にそう問うと、ふと思いついた様な顔で次の話を切り出す。

「最近噂になっている化物の話を知っているか？」

「化物？ 珍しいな。信二がそう言う噂を信じるのか？」

驚きのあまり、そう聞いていた。この手の噂など全く相手にしないと思っていた信二から、こんな話を聞かされるとは思っても居なかった。いつも冷静だし、こんな話を聞いたら「馬鹿馬鹿しい」何て言いそうだが、意外だ。

あまりの驚きっぷりに、信二が怪訝そうな眼をこちらに向ける。

「何だ？ 噂話をしてはいけないのか？」

「いや……。ちょっと驚いた。それで、噂になってる化物って？」

僕の言葉に不満があったのだろう。腕組みをした信二が、眉間にシワを寄せこちらを睨む。その眼を真っ直ぐに見据え、愛想笑いを浮かべると、小さく息を吐き、信二が話し出す。

「何でも、剣術に長けたウチの生徒らしい」

「はあ？」

「どれ程の剣術の持ち主なのか、是非手合わせしたい」

「……………」

無言で頭を掻き、深々と息を吐いた。何と無く、こんな気がしていた。あの信二がこんなにわかな噂をした時点でおかしいとは思っていたが、まさか手合わせしたいだなんて……。命知らずもいいところだ。

僕も信二の言う噂についてはある程度耳にしている。何でも夕刻辺りに人気の少ない路地に現れるとか。右手に細い刃物を持ち、壁や地面を切り裂いているらしい。時々獣らしき影も見掛けるらしいが、その時は決まって大量に散ばった血痕が残っているとの事。恐ろしい事この上ない。

軽く身震いし、小さく息を吐いてから正面を向き直る。生徒に背を向けたままの化学教師、大竹先生は着慣れた白衣のポケットから赤のチョークを出し、黒板に線を引いていった。

第四話 声

ようやく学校が終わった。

この気たるさと疲労感は何だろうか。一日で大分老け込んだ気がするの、気のせいだろうか。いや、気のせいだ、と自らに言い聞かせ、校門を後にする。

結局、放課後までわけの分からないストーカー行為を受けた上に、水守先生にはわけの分からない事で泣き付かれ、吉井からは何故か「最低」の一言を吐き捨てられた。一体、何をしたって言うんだ。

厄日とも言える最悪の一日に、大きなため息が自然と漏れた。両肩を落とし俯きながら歩いていると、ふと足を止める。頭の中に流れる奇妙な声によって。

(動くな。ジツとしろ。神経を集中しろ。気配を感じ取れ)

頭の中に流れる声に不意に周囲を見回した。だが、そこに居るのは自分だけ。人の気配はなく、いつの間にかあの場所に着ていた。狭く人通りの無いあの薄暗い路地。何故、ここに足を進めたのか、自分でも分からない。だが、奇妙な殺気をその身に感じ、ジリツと左足を引いた。

刹那、銃声が聞こえ足元で地面が爆ぜた。

(何が起こった？ 大体、銃声って)

そんな考えが通り身構えると、同時にもう一度脳内である声が聞こえる。

(意識を集中しろ。考えろ。死にたくないならな)

「何だよ……考えろって……それに、お前は誰なんだよ！」

頭の中に聞こえた声に叫ぶと、更に銃声が響き右頬を冷たい何か
が掠めていった。何が頬を掠めたか分からないが、遅れて感じる冷
気と針に刺された様な痛みで表情が歪む。頬が僅かに裂け、生暖か
い血が汗と混ざり首筋まで流れ出す。

自分の身に起こっている異常事態に、心臓が激しく脈を打つ。そ
の音がうるさく感じるのは僕だけだろう。早い鼓動を静める為にゆ
っくりと息を吐く。それだけでも、十分な程頭の中はすっきりとし、
鼓動も通常時へと戻った。

落ちて着いた所で瞬時に考える事が、今自分の身に起きている事。
頭の中の声は一体なんなのか、そして、何故発砲されているのか。
全てを一瞬の内に考えるが、自分を納得させられる理由は出なかつ
た。

必死に答えを出そうとしていると、また声が聞こえる。今度は頭
の中ではなく、正面から

「何で具現化しねえ！ それに、テメエは誰だ？」

突然聞こえた乱暴な声に目を丸くする。別に乱暴な口調だったか
ら、目を丸くしたのではなく、目の前に現れたその少女に目を丸く
したのだ。右手に握り締められた蒼い銃。それだけでも場違いだが、
それ以上に驚いたのは、彼女の背中から生えた大きな白翼。美しく
一本一本艶やかに輝く翼が、静かに羽ばたき彼女の体が地上へと降
り立つ。

思わず見惚れてしまったが、すぐに現実へと戻り少女の顔を見据
える。僕はその顔を知っていた。目鼻立ちの整った綺麗な顔に、黒
のショートボブの髪。そして、蒼っぱく見える綺麗な瞳を。

「雪国さん……だよな？」

見知った顔に思わず問うと、銃口を向けたまま綺麗な顔に薄らと笑みを浮かべた。だが、その笑みと裏腹に向けられた鋭い視線に、本能的に後退りするが、突如体が動かなくなり視界が揺らぐ。一瞬視界がブラックアウトしたが、すぐに元の景色が戻る。先程と変わらず、銃口をこちらに向ける雪国さんの姿に、相変わらず人通りの無い薄暗い路地。

だが、何かが違う。さつきとは明らかに。しかし、それが何かを理解するより先に、体が動き出す。それは、自分が意として行った行動では無く、何かに操られる様に勝手に動き出していた。驚き声を上げ様とするが、口が動かない。その代わりに、右腕が持ち上がりいつの間に取り出したのか分からぬ細い刀の様な刃物を雪国さんへと向けていた。

(な、何だよ！ か、体が勝手に)

「暫し、肉体を貸してもらおう。貴様は黙ってみている」

(な、何？)

頭で思った言葉に、返答を返したのは間違いなく自分の声。驚き戸惑っている、目の前に佇む雪国さんの眉間にシワが寄り、静かにその引き金を引く。乾いた発砲音が周囲に轟き、銃口から蒼い光が打ち出される。放たれた弾丸が体に到達するまでコンマ何秒のスピードだったが、何故かその弾丸が今の僕にははつきりと見えていた。青白い光が冷気を纏い、螺旋を描き直進してくる。こんな光景を目の当たりにしたのは初めてで、これから先二度と見る事は無いだろう。

その弾丸を見据えていたが、突如視界が変わり空を見上げる。そして、目と鼻の先を先程の蒼い弾丸が通過した。

(うおっ！ な、何？ 何が)

「チッ……うるせえ。少し黙ってらんねえのか？」

(なつ、それって、僕に言つて)
「 テメエ以外に誰がいる 」

自分の声に頭の中で話しかける僕。なんだろう。凄く不自然で、
気味が悪い。そんな風に思っていると、瞬きしたと同時に視界が変
わり、雪国さんの鋭い目がこちらを睨んでいた。

「 この前の借りを返させてもらう 」

(この前の借り？)

「 テメエに借りを作つた覚えは無い 」

(なあ、借りって何だよ？ この前って)

完全に僕の言葉など無視し話が進む。一体、雪国さんに何をした
つて言うんだらうか。

コツチの不安を他所に、体が前傾姿勢を取り、右手に握られた刃
物が切つ先を後方に向ける。踏み込まれた右足に体重が乗り、膝が
伸縮し力を蓄える。

その動きを見据える雪国さんが、銃口を向け直し引き金を引く。
乾いた破裂音が無数響き、弾丸が数発向つて来る。しかし、僕の体
はその弾丸の中へと突っ込んで行く様に、体重を掛けた右足で地を
蹴った。

(うおつ！ ちょ、ちよつと！)

「 ククククツ！ 我にこの程度の弾丸 」

不適な含み笑いを上げ突っ込んで行くと、向つて来る弾丸に対し、
右手の刃を素早く振るう。その動きは一瞬。瞬く間に弾丸は二つに
裂け爆ぜた。弾丸が裂け直つ白な煙が視界を遮る。やけに冷やかな
風が頬を伝い、髪を撫でた。そこでようやく動きが止まり、小さな
舌打ちが聞こえた。

視線が忙しくなく周囲を見回し、左手を右手に握る刃物の柄に添える。先程までの行動が全部オフザケだったと言わんばかりの構え。そして、意識が集中し感覚が鋭くなっているのが、僕にも伝わった。

(何……する気だよ)

「テメエは黙って見てろ」

(黙って見てろって……。一応、僕の体なんだけど)

そうぼやくが、完全に無視。それ所か瞼を閉じられ、視覚を奪われた。

(ちよ、本当に、何するつもりだよ)

「黙れ」

一喝。

何故、こんな扱いを受けなければならないのか不明だが、とりあえず黙る事にした。暗い闇の中、不思議と色々な音が伝わる。遠くで聞こえる人の声。自動車のエンジン音。風の音。足音。木の葉の舞う音。翼の羽ばたき。全ての音が伝わる。

そして、瞼が開かれ光が目にし込む。周囲に漂う白煙が薄れ、向こう側に薄らと雪国さんの姿を映し出す。その手に握られた銃の先に青白い光が圧縮され、冷気が白煙を生み出す。視線が交わり、口元に静かに笑みが浮かべられた。

「これで、最後　消えて」

銃口に集められた青白い光が、銃声と共に放たれた。弾丸が今までの以上のスピードでこちらに向う。だが、僕の体はその場を動こうとせず、口元を緩め、

「面白い。力勝負で 我に勝てると思うな！」

右足を踏み込み両手で握った刃物を振り上げる。

(ま、まさか！)

驚く僕を他所に、体は振り上げた刃物を、青白い弾丸へと振り下ろした。眩い光が視界を包み、衝撃が刃を伝い両腕に押し掛かり、肩から抜けていく。体が押され刃が震える。何とかその場に止まろうと両足に力が込められるが、圧倒的な重圧が少しずつ体を押ししていく。

第五話 キルゲル

目の前には光り輝く蒼い閃弾。

圧倒的な圧力と破壊力で、体を呑み込むかの様に押し退けていく。閃弾を受け止めるのは、一本の刃。その柄を握り締める二本の腕に、その全衝撃が襲いかかる。

ハッキリしている意識の中、目の前に起きている事が夢であればいいと、現実逃避。だが、腕に走る激痛は、間違いなく今感じている痛みだ。何でこんな事になっているのか、何でこんな目に合わなければならぬのか、考えれば考える程わけがわからなくなる。

不適な笑みを口元に浮かべたのは、僕の意味ではなく、今体を扱っている奴の意思だった。その笑みが何を意味するのか、全く理解は出来なかったが、突如として両腕から力が抜ける。直後、体が前に倒れ切っ先が地面を指す。左右へと裂けた閃弾が、地面を抉り両端の壁を破壊し、爆音が周囲を包む。

何をしたのかさっぱりだが、刃が閃弾を両断した事だけは理解できる。

白煙が立ち込める中、上半身がゆっくりと起き上がり、振り下ろした刃が、静かに持ち上がる。視線が目の前に佇む一人の少女を真っ直ぐに見据え、口元が緩む。その行動に、目の前の少女雪国愛が、僅かに険しい表情を見せ、一步後退した。

その刹那、体が前方へと傾き、足が地を蹴る。冷たい風が頬を伝い、逆風が髪を逆立て、右手に握った刃が地を削る。土煙が舞い、コンクリート片が飛び、火花が舞う。雪国さんとの距離が迫ると、雪国さんの口元に笑みが浮かび、銃口が額に向けられる。

(一)、この至近距離で ま、まずいつて！)

「黙ってる！ ガキが」

「終わりだ！」

二人の視線が交錯し、一方は刃を、一方は弾丸を、同時に放つ。蒼い閃光が、視界を遮ると、刃が風を切り上げ、何か硬い物とぶつかり合う。金属音が聞こえ、遅れて蒼い光の中に赤い火花が見えた。

そして、蒼い閃光が頬を掠めて後方へと流れ、目の前に揺れる長い髪。刃を押さえるのは漆黒のロングブーツ。液体の様な薄い膜が張られたそのブーツが、ゆっくりと刃を地面へと導き、遅れて見覚えのある顔が視界に移る。綺麗な顔立ちに、額の傷痕。間違いない。クラス担任の水守先生だった。

その人の登場に一番に声を発したのは

「し、師匠！ な、ななな、何でここ につ！」

雪国さんだったが、言い切る前に凄まじい風切り音と共に振り抜かれた水守先生の右足により、衝撃と爆音だけを残し地面へと叩きつけられた。コンクリートで舗装された地面が砕け、コンクリート片が弾ける。痛々しい血飛沫が舞い、水守先生のこちらに向けている笑みが、凄く恐ろしく見えるのは、僕だけだろうか？

妙な威圧感を感じながら、体が自然と後退する。僕の体を操る奴も、水守先生に多少なりに危険な匂いを感じ取ったのだろう。下ろされた刃をゆっくりと構え直し、摺り足で左足を引く。その行動に、笑みを向ける水守先生は、

「晃、聞こえてるかな？ ちょっつと、痛いかも知れないけど、我慢してね」

語尾に音符のマークでも付くんじゃないかと、言う程可愛らしい声でそう告げた水守先生が、その声とは似つかわしくない、破壊力十分の蹴りが右側頭部を打ち抜いた。意識が一瞬にして遠退いた。

「うつつ……」

目を覚ましたのは、柔らかなベッドの上だった。見慣れない部屋。棚やタンスの上には可愛らしいぬいぐるみが無数置かれ、女の子の部屋と言う事は何と無く分かる。これで男の部屋だったら、なんて想像すると、背筋がゾツとする。別に否定するつもりはないが、どれだけぬいぐるみが好きな男なんだ、と言いたい。

体を起き上がらせると激しい頭痛と吐き気に襲われる。あの先生のチョットつて、ハンパじゃない。右手で頭を触れば、ざらざらとした布の感触。包帯を巻かれている様だ。

「イツ……。相当強い蹴り……。だつたみたい……」

頭を押さえていると、部屋の戸が開き、私服姿の雪国さんが入ってきた。ブカブカの青い टीーシャツに、ハーフパンツ。それが、彼女の寝巻きなんだろう。手に持っているお盆には、水と氷の入ったボールとタオルが乗っていた。彼女が看ていてくれたのだろう。ついさつきまで、殺し合いをしていたとは思えない程だ。

頭を押さえていると、雪国さんが冷たい濡れタオルを差し出す。

「これで、冷やしておけ」

「ああ……ありがとう」

タオルを受け取りお礼を言うが、それ以上言葉は無く、鋭い眼差しを向け机の前に置かれたイスに腰を下ろす。もしかしなくても、監視されているのだろう。視線が凄く痛々しい。

とりあえず、受け取った濡れタオルを額にあてる。ヒンヤリとしたタオルが頭の痛みを少しだけ和らげてくれる。小さく息を吐くと、

イスに座っていた雪国さんの視線が更に鋭くなる。

(な、何だ……。この威圧感は)
「何だ？ コツチをジロジロ見るな」

見たつもりは無かったが、彼女はそう感じたらしい。とりあえず、「ごめん」と謝り、ベッドにもう一度横たわった。色々と聞きたい事もあるけど、今はもう少し休もう。そう思い瞼を閉じると、思考が自然と停止し、深い眠りへと誘われた。

どれ位の時間が過ぎたのか、話し声が聞こえる。

「で、大体は理解したけど、あんたは誰？」

相変わらず刺々しい雪国さんの声。

「愛ちやくん。ちょっと、黙ってようか？」

可愛らしくそう発したのは間違いなく水守先生。何処か、怒りの様なモノが感じられるのは、気のせいだと思う。その声に「は、はい」と大人しく返答した雪国さんの声に続き、聞き慣れた声が返答する。

「我はキルゲル。そう呼ばれていた……」

この声は、間違いなく自分の声。だが、今僕は意識を 。薄らとする意識の中で、更に話が進む。

「ふくん。あなたは“キルゲル”そう呼んでいいの？」

「ああ。構わない」

「ちよ、師匠！ こんな奴の言う事を信じるんですか！」

怒鳴り声を上げる雪国さん。水守先生を師匠と呼んでるみたいだけど、どう言う関係なんだろう。そう思っていると、キルゲルと名乗った僕の声が言葉を紡ぐ。

「貴様等は、どう言う関係だ」

「はにゃ？ 何々？ 急にどうしちゃったのさ」

子供っぽい発言をする水守先生に、キルゲルと名乗った者が静かな声で、

「後は、コイツに聞け」

と、言葉を残し体を僕に返す。朦朧としていた意識が、すぐにはつきりとする。

「あ………れ？」

「んんっ？ どうかしたのかな？」

顔を覗き込む水守先生。その背後には雪国さんが鋭い目付きを向けている。あいつ、逃げたな。小さくため息を吐くと、水守先生の表情がパツと明るくなり、突然抱き付いてきた。

「うわっっ。晃だあ〜」

「ちょ、ちよつと！ い、いきなり何だよ！」

「このまま、目が覚めないんじゃないかって、先生恐かったんだよ」

「師匠。先程、目を覚ましたと、伝えましたが……」

「打ち所が悪くて、ポツクリ逝っちゃったかと」

サラッと恐ろしい事を言う。と、言うか完全に雪国さんの事は無

視の様で、幼い子供の様なはしゃぎっぷりだ。この人は、一体何処から何処までが本当の姿なんだろう。そんな事を考えながら、ズキズキ痛む頭で考え込んでいると、雪国さんの冷やかな視線に気付く。いや、まあ、最初から気付いてたけど、気付いてないフリをした。何か怒ってるみたいだし、スルーした方がいいコトだってある。

第六話 朝から……

封術師 それは、鬼獣と呼ばれる化物を封じる事の出来る者。

ガーディアン 封術師を守り、鬼獣と戦う事の出来る者。

サポートアームズ 封術師・ガーディアン。双方の持つ意思のある武器で、鬼獣と戦う為には必要なモノ。

突然、そんな説明をされ、数日が過ぎた。

普通はそんな話をされても信じないのだろうが、自分の身に起きた事を考えれば、素直に信じられる。世の中には自分の知らない事がまだまだある、と思い知らされた。

雪国さんは封術師で、とある組織の第一東支部に所属しているらしい。水守先生もその組織の一員で、現在はこの町一帯を管理している、と本人は言っていた。組織名は現在は無いらしく、水守先生曰く、一昔前は『クロノス』と名乗っていた様だ。

「ふうーっ……」

不意に零れる吐息は、これで数十回目となる。自分の置かれた状況や、自分が踏み込んだ嘘の世界。いつそこれが夢なら良いと何度も思い床に就くが、目が覚めればあれが夢で無く現実だと突きつけられてしまう。その原因は、僕自身の体。そう、僕の中に眠る『共喰らい』と呼ばれる存在。それが、毎朝の様に問いかけて来るのだ。

（我を解放しろ）

（力を欲せ）

（貴様の望みをかなえてやる）

毎朝、そんな言葉で目を覚ませば、ため息も吐きたくなくなるものだ。

そして、もう一つの目覚ましが部屋の外からドタドタと足音を響かせてくる。

「今日は僕が」

「違うよ。今日は私が」

「へへーん。起こしたもん勝ちだもん！」

美空の勝ち誇った声が聞こえ、戸が乱暴に開かれた。その瞬間に、「ダメエエツ！」と優海の叫び声が響き渡る。朝から二人とも元気だ。でも、優海が叫ぶを久し振りに聞いた気がする。いつ以来だろうと、物思いにふけていると、

「あぁーっ！ 晃、起きてるし！」

「うっうっ……今日は私が……お兄様を……」

涙声の優海がコソツと戸の向うに顔を出す。眼鏡越しに涙を溜めた目がキラキラとこちらを見ている。その表情は愛くるしく、何故か罪悪感を感じる。

「ご、ごめんな。でも、もう高校生だから、自分で起きられるからな」

とりあえず謝ると、瞳を潤ませながら僅かに頷く。が、その言葉に反発する人物が一人。美空だ。不服そうに頬を膨らし、唇を尖らしブーブーと文句を言い出す。

「晃。こんな可愛い妹が起こしてあげるって言うのに、その言い方はないだろ」

「いやいや。こんな事してる暇あったら、学校行く準備しろよ」

「晃は分かってない！ こんな可愛い妹に毎朝起こしてもらおう。そ

の需要を分かってないよ」

妙に『可愛い妹』と、言う言葉を強調して聞こえる。まあ、可愛いのは認めるけど、自分で言うのはどうかと思う。

その後も、美空は色々と文句を言っていたが、軽く受け流しつつ部屋から追い出した。部屋を追い出しても戸の向うから聞こえてくる美空の声に、小さくため息を吐くと、頭の中にあの声聞こえてきた。

(ウルサイ連中だな)

「……はあ〜」

(朝から疲れてるようだな。我はいつでも代わってやるが)
「はいはい……。勝手にいつも出て来るだろ……。疲れてるとか関係なく」

多少、苛立っていた。突然、自分の中に現れた、キルゲルと言う存在に。この先、ずっと一緒かと思うと憂鬱になる。さっきも言った様にキルゲルは勝手に体を使う。別に体を使うのがダメと言うわけではなく、自分の知らない場所で自分の体で色々されると、言うのが嫌なのだ。

実際、キルゲルは何度も体を利用したらしく、今噂になっている夕刻の化物の正体も、彼の事らしい。いや、正確には僕の体を借りたキルゲルなわけだから、傍から見れば僕がその化物と、言う事になる。雪国さんと初めて対峙したのも、僕の知らない場所で僕の体を使ってだった。

小さくため息を漏らし、制服に着替え終わると、頭の中にもう一度キルゲルの声が聞こえた。

(悪かったな)

突然謝られた。背筋が凍り付き、体が機能を停止する。な、なんだろう。今、凄く気持ち悪かった。そう思った矢先、

（貴様には二度と謝らん）

そこで、理解した。キルゲルには、僕の思考が伝わっているのだと。深く息を吐くと、更にキルゲルが言葉を続けた。

（言っておくが、我とて好き好んで、貴様の思考を読んでるわけじゃない）

「僕は何も言つて無いですけど」

（言つて無くて、考えただろ）

「そりゃ、考えるだろ。突然、こんな状況になつたら」

（我とて、永い眠りから起こされてみれば、この状況なのだからな）

迷惑そうにキルゲルがそう言う。キルゲルの言い分だと、誰かに起こされたと言う事になる。けど、一体誰に？ そんな疑問が生まれたが、考える前に廊下から美空の声が響く。

「晃アアアアツ！ ご飯冷めちゃうだろオオオオツ！」

「……………」

（朝から、元気だな）

「全くだよ……………」

小さくため息を吐き、カバンを持ってから部屋を後にした。一階に下り顔を洗ってから、リビングへと向う。足取りは相変わらず重いが、漂う朝食の良い匂いが、自然と足を動かした。リビングでは優海が自分の指定席で朝食を食べ、キッチンでは美空が忙しく動き回っていた。

自分の指定された席に腰を据え、小さくため息を零すと、斜め前

の席に座る優海が心配そうな視線を向け、

「大丈夫？ あんまり、無理すると倒れちゃいますよ」

と、優しい言葉を掛けてくれた。相当疲れた様な顔をしていたのだろう。

心配掛けまいと、微笑んでみせる。すると、優海も微笑み、ゆっくりと箸を動かす。のんびりしていると云うか、おっとりしていると言っか、何ともマイペースな優海の動きがピタリと止まる。

優海が停止して数秒の後、キッチンから美空が足早に登場。その手には朝食の乗ったお盆とハリセンが一本。

(ハリセン？ 何に)

キルゲルが僕に問うより先に、美空の鋭い一撃が優海の頭部を叩いた。ハリセンが良い音と奏でると、優海が目には涙を溜めながら美空の方へと顔を向ける。

「い、痛いよお〜。美空ちゃん」

「食事しながら寝るからだ！」

怒鳴られシユンと縮こまる優海は、またゆっくりと箸を動かす。

優海は何処でも寝てしまう癖があるが、まさか食事中に寝るとは

恐ろしいな。そんな優海に小さくため息を零した美空は、お盆を僕の前に置き、

「これ、晃の分。味わって食べよ」

「何故、上から目線」

「僕が偉いからだよ」

どの口がそんな事を言う。そう言いたかったが、ここは美味しい朝食にありつく為に我慢する。しかし、美空も苦労してるんだな、とシミジミ感じる。もしかすると、学校でもあのハリセンで 流石に無いか。

自分にそう言い聞かせ、静かに美空の作った朝食を頂く事にした。鮭の塩焼きに大根の味噌汁、厚焼き玉子にきんぴらごぼう。朝から盛大な事で……。厚焼き玉子を一口 美味い。流石、美空と言った所だろう。料理は天下一品だ。

(ハリセン……)

ボソツとキルゲルの声が聞こえたが、無視して朝食を食べ進めると、美空が思い出した様に、

「そう言えば、晁知ってる？」

「唐突になんだ？」

「今朝、落雷あったんだって」

「へえ〜っ。気付かなかつたな。この辺か？」

「いえ。確か、お父様が言うには隣り町の青桜学園に落ちたみたいだよ」

のんびりとした口調で優海が横から口を挟み、またゆっくりと箸を動かす。無然としているのは美空。天然なのか、狙ってやったのか分からないが 恐ろしいな。味噌汁を啜り、静かに優海の方に目をやるが、本人は至って平然としていた。ワザとやったわけでは無い様だ。無然としている美空も、それを知ってるからか、特に文句を言う訳でも無く話を続ける。

「その取材に行くって」

「取材？ 落雷で？」

「何でも、スクープの匂いがするって」
「ただの落雷がねえ……」

味噌汁を啜り、静かに呟いた。

第七話 昼休み

午前の授業が終わり、教室はやけに静かだった。

半分以上の生徒が食堂、または購買所に向ったからだろう。教室に残ったのは弁当を持参している人と、寝ている人位だ。ちなみに僕は前者に当たる。もちろん、弁当を作ったのは美空なのだが……。背筋を伸ばし「んんっ」と声を上げる。流石に静かに教室にその声は響き、何人かの視線がこちらを見た。その視線を無視し、カバンから弁当を取り出す。それに遅れて、前の席に加賀博人が腰掛けた。右手に持った紙袋を乱暴に、僕の机へと置くと、周囲を窺う様に見回す。

とりあえず、一部始終を見届け弁当へと手を伸ばすと、博人がボソリと呟く。

「加奈ちゃんは何処だ？」

「知らん」

「俺の加奈ちゃんは」

「博人。ストーカーにだけはなるなよ」

「今日こそお昼を一緒に」

「いただきます」

「そう……今日こそ一緒にいただきます」

何と無く変な意味に聞こえたのは、僕だけじゃないだろう。教室に残っていた女子生徒達のコソコソ話と、視線が明らかに博人の方へと向けられている。これは関わり合っではいけないと直感で判断し、無言のまま弁当を食べ進めた。

すると、沈黙に耐え切れなかったのか、周囲の女子の冷たい視線に耐え切れなかったのか、博人が乱暴な声を上げた。

「て、何でだよ！　そこ突っ込む所じゃねえの？　てか、見んな！　このブス共が！」

「誰がブスよ！」

「あんたこそゴリラみたいな顔してるくせに！」

「そうよ！　この不細工ゴリラ！」

教室に残った女子生徒全員を敵にまわす博人だが、全く退く事無く更なる暴言を吐く。

「うつせえ！　お前等みたいに男を顔で判断する奴に、俺の魅力はわかんねえよ」

女を顔で判断する博人が、そんな言葉を並べた所で、何の説得力も無い。その為、女子生徒達からの反論は凄まじく、数分後には博人の方が屈服していた。完全に跪き両手を床に付くその姿は、情けなく見えて仕方ない。

無言で弁当を食べ進めていると、軽い足取りと共に鼻歌を交えながら吉井が教室へと現れた。

「フッフ、フッフ。桜嵐、もうお昼食べた？」

やけに上機嫌な吉井の声にいち早く反応を示したのは、

「加奈ちゃああん！　待ってたよ！」

不細工ゴリラこと博人だった。即座に席を立ちコッチに向って来る吉井の方へと駆け出す博人だが、それを無視するかの様に素通りした吉井が、僕の前の席に腰を据える。肩口まで伸ばした外ばねした髪を右手で耳の後ろへと流し、いつもよりも愛くるしい笑みがこちらに向く。一方で、石化した様に動かなくなった博人。何とも哀

れな姿だった。

「今日も、美空ちゃんの手作り？」

「まあ、台所は美空のテリトリーだから」

「美空ちゃん、大雑把そうに見えるのに……今度、教えてもらおうかな？」

そう呟く吉井に、多少苦笑しながら、

「やめた方がよいよ。美空は人に教えるのは無理だから」

美空が人に教えるのが無理、と言うのは美空が大雑把だからだ。その為、美空の作る料理は毎回味が異なる。異なると言っても、薄くなったり濃くなったりする程度で、味自体がまずくなると言う事は無い。どうも同じ味の濃さをキープするのは苦手で、とてもじゃないが人に料理を教えられるタイプではない。

だから、そう答えたのだが、吉井は二度首を振り、

「ううん。大丈夫。美空ちゃん、ああ見えて、面倒見良いから」

ニコやかな笑みを浮かべる。また、面倒見が良いのは認めるけど、それとこれとは別問題だ。だが、今の吉井に何を言っても無駄だろう。目は輝いているし、鼻歌が先程よりも上機嫌だ。

何だかんだ騒がしい中で、静かに弁当を完食すると、頭の中にキルゲルの声が聞こえた。

(騒がしい学校だな)

(そうだな。でもまあ、賑やかな方が楽しいだろ?)

(さあな。我には理解出来ぬな)

(そうかい……で、何か用があるんじゃないのか?)

そう問いかけると、キルゲルが小さく息を吐くのが聞こえた。一心同体なわけだから、その態度は筒抜けなのだが、本人はいたって気にした様子は無く、静かに答える。

(さつきから、奇妙な気配を感じる)

(奇妙な気配?)

「桜嵐さん。ちょっと良い?」

突然、背後から聞こえた声に周囲が静まり返る。先程までの騒がしさが嘘の様だ。皆の視線が僕の後ろに立つ人物へと集まっている。とても嫌な予感がするし、さつきの声には聞き覚えがあった為、聞こえないフリをして無視する事にした。

「あの、桜嵐さん?」

「……」

「聞こえてる?」

「……」

視線を廊下の向こう側へ 所謂、窓の外へと向ける。ここは、物思いにふける様な遠い目を と、思った矢先、キルゲルが問う。不思議そうな声で。

(貴様の事を呼んでいる様だが、何故無視するんだ?)

(今は……ソツとしておいてくれ……)

「桜嵐」

「桜嵐晃! もう我慢できネエ! 何で、お前みたいな不細工が!

俺は、俺は」

騒然となる教室。と、言うか、博人には悪いが、お前に不細工と

言われたく無い。色々と言いたい事があったが、僕が言うより先に周りの女子達が一斉に博人に突っ込んでいた。

「お前の方が不細工だ」

とか、

「その顔で人を悪く言うな」

とか。仕舞いには、

「冗談は顔だけにしろよ」

とも言われていた。何だか博人が可哀想だが、中学の時から変わらないこの扱いは、何だか懐かしく感じる。が、そんな事を思っている余裕は無く、博人が雄叫びを上げてこちらに向って来る。

「うおおおおっ！ 俺の魂の一撃を」

（どうするつもりだ？）

「もちろん」

「へっ？」

驚いた声を上げたのは、前の席に座る吉井。席を立つと同時に、そんな吉井と目が合う。驚き目を丸くする吉井に、笑みを見せると、

（女に笑っている暇があるのか？）

「分かってるよ。ごめん。今度、ゆっくり一緒にお昼食べよう」

それだけ告げ、右足を窓枠へと掛け、そのまま窓を越えて廊下へと出る。窓越え……行儀が悪いが、そこは緊急事態と言う事で、大

目に見てほしい所だ。

廊下に飛び出してすぐ聞こえたのは、博人の叫び声だった。奇声だった為何を言ったのかは聞き取れなかったが、その場に居るのは危険だと本能が告げ、僕はその場を足早に去った。

暫く走った後、行く当ても無い為、ブラブラと廊下を歩いていた。屋上　は、立入禁止。中庭は目立つし、校舎裏はあまり近寄りたくない。静かに吐息を吐くと、自然と足が止まった。

(ほお〜っ……貴様が、気配を探れるとは知らなかったな)

「はあ？　何言ってるんだ？」

「それは、コッチの台詞なんだけど」

「！」

背後から聞こえた声に振り返ると、そこに眉間にシワを寄せた雪国さんが立っていた。何やらご立腹の様で、殺気だっで見えるのは気のせいだろうか？

(いや。気のせいじゃないだろ)

と、問いに親切に答えてくれるキルゲル。ありがとう。キミは本当に親切だよ。

(そりゃ、呼びかけたのに無視して逃げれば、誰だって怒るだろうな)

分かっているさ。そんな事。分かっている逃げ出したんだから。

そんな怒りの見え隠れする雪国さんを尻目に、現実から逃げる様にキルゲルに問いかける。

(それで、ここに何かあるのか？　ただの生物室だけど……)

(ただの……か。貴様は、無意識でここに来たのか?)

(そうだね。ただフラフラって……)

(そうか……。どうやら、貴様は嗅覚に優れているようだ)

犬じゃないんだから。そう言うおうとしたが、止めた。異様な空
気と嫌な匂いが漂ってきたからだ。何と無く嫌な予感が脳裏を過り、
それと同時に雪国が生物室の戸を開いた。

第七話 昼休み（後書き）

どうも。 崎浜秀です。

更新が遅れてしまった事を、まず謝りたいと思います。
すいませんでした。

どれだけの方が楽しみにしてるかは、分かりませんが、これから
更新頑張っていきたいと思えます。

よろしく願います。

第八話 砲閃火

明かりの消えた生物室。その闇の中から漂う香りに、思わず鼻を摘んだ。

異臭 その言葉が似合う程の悪臭に表情を歪めると、闇の中に何かが一瞬光った。それが何か分からないが、目を凝らすと生物室でウネウネと動くものが僅かに見える。

気色悪い動きをするそれを見据えていると、戸を開いた雪国さんが生物室に右足を踏み込む。この異臭の中表情も変えずに。

「臭くないの？」

「臭いわよ」

「だよね」

苦笑して見せるが、相変わらず雪国さんの表情は変わらない。流石、封術師、

「うーっ。クサッ！」

そう思った矢先に飛び出した言葉は、いつの間にか横にいた水守先生だった。神出鬼没とは、まさにこの事だろう。驚いていると、水守先生が無邪気な笑みを浮かべ、

「凄いやね。愛ちゃんて。あれぞ、封術師の鏡だよね」

「……あの、師匠……なんだよね？」

「うん。師匠だよ。どうして？」

不思議そうに首を傾げる。言いたい事は色々あったが、何を言っても無駄そうだったので、何も言わず雪国さんの背中を見据えた。

真顔の雪国さんは、生物室の中につごめく何かを見据えたまま動かない。この悪臭の中微動だにしないのは凄いが、本当に水守先生が師匠なのかと疑いたくなる。

そんな疑いを向けられているとは知らず、ニコニコと笑みを浮かべる水守先生。本当に子供の様に無邪気だ。そんな無邪気な水守先生に、雪国さんが静かに告げる。

「砲閃火。ほうせんか植物系の鬼獣で属性は火。名前は『鳳仙花』から来てると思われます」

「大変良く出来ました……て、言いたい所だけど、その名の意味と能力まで答えてほしいかな？」

ダメ出しをする水守先生に対し、「すみません」と素直に頭を下げる雪国さん。その雪国さんに代わり、何やら楽しげにクルツと一回転した水守先生が、こちらに目を向け、丁寧に説明する。

「愛ちゃんに説明して貰ったけど、もう一度説明するね？ 今、生物室にいる鬼獣は砲閃火って、言う火属性の低級植物系の鬼獣だね。低級と言っても、それなりの力はあるから、油断は出来ないけど。エへへ」

照れた様な笑いを一旦入れ、説明を中断する。その行動に何の意味があつたかわからないが、もう一度「エへへ」と笑ってから説明を続行した。

「その名は鳳仙花から来ていて、名前の意味は砲撃する閃光。言い直せば、火の閃光を砲撃する。遠距離型って所かな。こう言う植物系の能力は増殖。だから、早い内に手を打たないと大変な事になっちゃうわけだよ」

胸を張り自信満々に説明を終えた水守先生に、一つの疑問をぶつける。

「それで、手は打ったんですか？」

「ふへえ？ どうして、そんな事聞くのかな？」

「今、説明したでしょ。早い内に手を打たないと大変な事になるって」

その言葉に水守先生が僅かに首を傾げ、ゆっくりと雪国さんの方へと目を向ける。二人が視線を合わせると、雪国さんの方が首を左右に振った。二人の間に起こったアイコンタクトは容易に想像出来た。

『手は打ったよね？』

『いえ、私は何も』

多分、こんな短いやり取りだろう。一瞬だけ水守先生の表情が引き攣ったのを見た気がする。

僅かな沈黙の後、「こほん」と咳払いをして見せた水守先生は、いつもの様に無邪気な笑顔を見せ、

「うん。大丈夫。大丈夫だよ」

「……手は打ってなかったんですね」

「でも、大丈夫。愛ちゃん優秀だから」

笑顔でそう言う水守先生が、雪国さんの方へと目を向ける。それと同時に、校庭で悲鳴が上がった。

「キヤアアアアッ」

「な、何だこれ！」

「に、逃げる！」

生徒達の声に、水守先生の笑顔が引き攣る。どうやら手遅れだった様だ。窓の外に目をやれば、増殖したと思われる奇妙な花が二・三つごめく。逃げ纏う生徒達の悲鳴が、更に人を集める。

啞然としていると、その横で水守先生も呆れた様に小さなため息を零した。これが、水守先生の言っていた大変な事なのだろう。

しかし、なんなのだろう、この植物は。成長が速過ぎるし、大きい。これが、鬼獣。見るのは多分初めてだと思う。こんな化物の存在を今まで知らなかったなんて　そう考えるとゾツとする。

(恐いのか？)

キルゲルの問い掛けに、素直に答える。

「当然だろ」

それが当然の答えだ。あんな化物を見て恐怖を覚えない、と言う方がおかしい。鼓動が激しくなる中、キルゲルが静かに言う。

(我に代われ。さすれば、被害を最小に抑えてやる)

「……本当に、最小限に抑えられるのか？」

(約束しよう。最小限に抑える)

「……分かった」

頷くと同時に体から力が抜け、右手に刀の様な剣が現れる。僅かに感じる感覚。それは、以前は感じなかったモノだった。

(感覚が)

「今回は無理矢理出てきたわけじゃないからな」

「あーっ！ 私の晃から出てけ！」

突然そう叫んだ水守先生を無視して、キルゲルは体の感覚を確かめる様に屈伸運動をする。キルゲルに無視された水守先生は、雪国さんに泣きついたのか、くぐもった声が聞こえた。

「うーっ！ 私の晃が〜」

「し、師匠……」

（キルゲル…… フォローしていけよ）

「断る。我は敵を倒すのみ」

そう告げると、キルゲルは窓枠に足を掛け、不敵な笑みを浮かべる。静かに剣を肩に掛け、ゆっくりと砲閃火の位置を確認する。その視線の先は確りと僕も確認できた。僅かに二度頷き、キルゲルが静かに右足に体重をかける。

（おいおい…… 落ちるなよ）

「馬鹿を言え。ここから、飛び降りないでどうやって下に行くつもりだ」

（階段使えよ）

そう反論した瞬間、キルゲルが窓枠を蹴り、体を宙へと投げ出した。

（うおい！ ちょ、チョット待て！ ここ、三階）

「その程度の高さから落ちて死ぬか」

（いや、死ぬ！ 死ぬよおおおっ！）

叫び声を無視して、キルゲルが地上へと降りた。着地と同時に両足の衝撃が走り、強烈な痺れが全身を伝う。

(うっっ！)
「いちいちうるさい奴だ」

言葉にならない声を上げる僕に、キルゲルが落ち着いた口調でそう述べた。

両足に残る痺れを気にせず、キルゲルは走り出す。校庭に咲く鮮やかな赤い鳳仙花。大きさは二メートル前後と言った所だろう。不気味にツルを動かす以外は特に変わった様子は無い。

(本当に、あれが有害なのか?)

「さあな。それは、自分の目で確かめろ」

(自分の目って……それすら、自由に使えないんだけど……)
「なら、黙ってみてろ」

何とも自分勝手な意見だが、渋々黙る事にした。逃げ惑う生徒の合間を素早く逆走するが、全くぶつかる気配は無い。と、言うか生徒達は、僕の存在に気付いていないのだろうか？ まあ、今は細かい事は気にしないで置こう。

視線の先に一体目の砲閃火。こちらの接近には気付いていないのか、全く動こうとしない。本当に危険なモノなのだろうか？

そんな考えと裏腹に、口元に笑みを浮かべたキルゲルは、右手に握った刃を一閃する。

「まずは、一体目だ！」

手応えは軽いが刃は砲閃火の茎を裂き、緑の樹液を吹き上げさせる。あまりの手応えの無さに、足を止め「クククッ」と小さく笑う。だが、その瞬間、鳳仙花の実が赤く光り、破裂音を轟かせ爆ぜた。

第八話 砲閃火（後書き）

今年の更新は多分最後になると思います。

現在、引越しをしたため、インターネットが使えない状況にある為、執筆が出来ない状態にあります。

来年にはインターネットも使える様になると思いますので、来年もよろしく願います

第九話 風の道

真つ赤な光りが視界を遮り、激しい衝撃が何度も全身を襲う。

焼ける様な熱さを肌と感じ、激痛が体に走る。幾重にも重なる様に衝撃が続き、自分の体が地面に減り込んでいくのが分かった。耳に残るのは、地面が割れる音と破裂音だけ。真つ赤な光りが収まる頃には、僕の体は地面に仰向けに埋まっていた。

漂う焦げ臭い。全身に伴うズキズキと疼くような激痛。皮膚が焼けた様に黒焦げ、体を動かす事が出来ない。キルゲルの声も聞こえず、意識が遠退く……。このまま、死んでしまおう。そう思った時、右手が僅かに動く。もちろん、僕の意味が行ったモノではなく、拳を握り締めるとゆっくりと体が起き上がる。

「クツクツクツ……面白いじゃねえか……砲閃火……」

（お、面白くないよ……。全身痛いし……）

「傷は時期癒える。テメエは黙って見てろ」

キルゲルの言う通り、体の傷は徐々に癒え始める。焼け焦げた皮膚が元の正常な肌へと戻り、体の痛みが抜けていく。何が起っているか分からないが、その再生速度が異常だと分かる。激痛が引き、キルゲルが体の感覚を確かめる様に右手を何度か握り、ゆっくりと地面に転がる細い剣を蹴り上げ、右手で掴む。その視線は確りと砲閃火の花を見据え。

「我を傷つけた報いは受けてもらう」

（あゝあ。どつちかって言うと、攻撃しかけて反撃くらった）

「黙れ。奴が我を傷つけた事に変わりはない」

（いや。傷付いたのは、僕の体なんだけど）

僕の言葉を見無視し、キルゲルが笑みと共に揺れる砲閃火の赤い花に切りかかる。が、花は刃を避ける様に揺れ、実を破裂音と共に爆発させる。同時に赤い閃光が無数に飛び散った。

今なら見える。閃光の正体が。

(た、タネ！)

「チツ！ 鬱陶しい！」

高熱を放つ種を一刀両断し、後方へと飛び退くと、赤い閃光が先程までいた場所を抉る。僅かな白煙を上げ、地面は黒く焦げ、熱気が肌に伝わる。これが自分の体を直撃していたと思うとゾツとするが、それと同時にあれが直撃して立っている自分を不思議に思う。

地面に刃を突き立て、土煙を巻き上げると、揺れる砲閃火を見据える。こちらを挑発する様な動きをする砲閃火は、実を赤く点滅させていた。

(鳳仙花って、実に衝撃を受けると種を飛ばす習性がある)

「それがどうした。まさか、攻撃するなど、言うわけじゃないだろうな」

(そうは言わないけど、このままじゃ……)

「考えはある。我とて、何度も同じ手はくわん」

自信満々のキルゲル。考えがあるとは知らなかった。まるで考えなしに突っ込んでいっている様に見えるのは、僕だけだったらしい。右足がゆっくりと一歩前に踏み込まれ、右手に握った刃を構える。確りとした視線が砲閃火の真っ赤な花を見据え、不適な笑みが浮かぶ。

突如として吹き荒れる風が、頬と髪を撫でる。風を起こすのは、右手に握られた剣。風が高音を奏で、切っ先が地面に触れる直前で、地面が裂ける。砂塵が舞い、視界が僅かに乱れた。

(何をするつもりだ?)

「任せろ。一撃で消し去る」

(本当に、一撃で?)

「フツ」

僕の言葉を鼻で笑うと、刃を耳の高さで水平に構え、ゆっくりと息を吐く。集中力が上がっていきのが分かる程、視野がはつきりしていく。舞う微量の塵も、はつきりと見える程だった。風の流れすら薄らと見えるのは、キルゲルの能力のお陰なのだろう。

ゆっくりと動く砲閃火の花。それを見据え、キルゲルが右足に体重を移動する。キルゲルが地を蹴る瞬間、それを脳が感じ取り、風の流れが一齐に変わった。まるで、キルゲルを 正確には僕の体を 砲閃火へと導く様に風が螺旋を描き、一本の道を生み出す。

(な……んだ……これ?)

「お前にも見えるだろ。これが、風の ！」

キルゲルの声を遮る様に破裂音が聞こえ、真っ赤な閃光が風の道を伝いこちらに一直線に向ってくる。そのスピードは今までとは桁違いで、集中力の増したこの眼ですら一瞬に感じる程だった。キルゲルもそのスピードに反応出来なかったのか、全身を衝撃が襲い地面が背中を抉り、焼ける様な熱さが両腕を呑み込んだ。

焦げ臭いが僅かながら鼻を刺激し、瞼を開くと真っ青の空を見上げていた。両腕の感覚が無く、背中に激痛が伴う。体を動かす事も出来ず、呼吸をする度に胸の奥が苦しい。

『しくじった……』

遠くの方で、キルゲルの声が聞こえた気がした。頭に聞こえたわ

けでも、僕の声でも無い。キルゲル本人の声。耳がおかしくなったのか、頭がおかしくなったのか、それとも朦朧としているからそう言う錯覚を感じているのか、分からないが、キルゲル本人の声が更に言葉を続ける。

「オイ……死んでないだろうな」

「……………」

耳に届いたキルゲルの声に、返答しようとしたが声が出なかった。喉がやられたのだろう。無理に声を出そうとすれば、喉に痛みが走り乾いた咳だけが漏れた。

（今度こそ、死ぬんだろうか？）

（皆無事だろうか？）

（今日の空はこんなにも青かったんだ）

（美空、晩御飯何を作るんだろう？）

（優海の奴、授業中に寝たりしてないだろうな……）

くだらない事ばかりが、頭の中に巡る。思考ははつきりしているのに、徐々に視界が薄れていく。瞼がゆっくりと下り、視界が完全に塞がる。闇に包まれた視界の中で、薄らと聞こえるキルゲルの声。僕に呼びかけてくれている様だ。その声も、やがて聞こえなくなり、静寂が周囲を支配した。

闇の中でどれ位の時が過ぎたのか分からないが、突如頭の中で悲鳴がこだました。

「きゃああああっ！」

悲鳴の瞬間、体内で何かが弾けた。体が突然軽くなり、あれ程重かった瞼が自然と開き、目の前に鮮明な光景が映る。いつ立ち上が

ったのか、いつそれを構えたのか、いつ砲閃火に立ち向かったのか。まるで分からないが、右手に握られた刃は地面を向き、後方で爆音が響き、突風が吹きぬけた。後ろでは、一人の女子生徒が腰を抜かしている。

僕は何をした。その疑問が脳内に浮かぶと、砲閃火の花がゆつくりとこつちに向く。先程まで感覚すらなかった両腕に、感覚が戻っている。これも、キルゲルの能力なのだろう。再生速度が異常だ。それに、感覚がさつきよりもより鋭く、肌を撫でる風すら手にとつて分かる。

「これも……キルゲルの力？」

『残念だが、それは我の力ではない』

キルゲルの声が、右手に握る剣から聞こえた。と、言う事は、今この体は僕自身が動かしている事になる。感じた事の無い感覚に、僅かな戸惑いを感じていると、キルゲルの怒声が響いた。

『来るぞ！ 今のお前に避けると言う答えはねえ。正面から立ち向かえ』
「分かつてる」

握った事も無い刀に近い剣の柄を握り締め、ゆつくりと息を吸う。体内に入り込む風の感覚すら、感じる今の状況。それが、ふと懐かしく思えるのは、何故だろう。不思議な感覚だが心は落ち着き、体が自然と刃を構える。顔の横で水平に構えられた刃が、視界の端で煌くのが分かった。

背後で蹲る女子生徒の安全を一度確認し、右足に力が入る。避けると言う答えが無い。それは、避ければ、彼女が傷付く。そう言う意味だ。もとから、逃げるつもりなど無かったかの様に、体は自然と前傾姿勢をとり、左足が地面から離れ、右足のつま先に全体重を

乗せ、一気に地を蹴る。それと、ほぼ同時に、砲閃火の実が光り、破裂音と共に赤い閃光を広げた。

第九話 風の道（後書き）

遅くなりました。

これから、頑張ります。今年もよろしくお願ひします

第十話 想い、願い

頬を伝う風。

視線の先で揺らぐ髪。

迫り来る紅蓮の閃光。

全てがスローに見える。

研ぎ澄まされた感覚。

握り締めた刃。

怯える女子生徒。

静かに漏れる吐息。

ゆっくりと右足を踏み込み、重心がつま先へと傾き、上半身が流れる様な動きで前へと倒れる。遅れて、力を込め右足で大地を蹴った。体が軽い。そんな感覚を感じ、閃光へと迫る。剣など一度も扱った事が無いはずなのに、腕は自然と刃を振るった。

鋭く綺麗な刃が紅蓮の閃光に触れる瞬間、僅かに腕に衝撃が走る。腕ごと持っていていかれるんじゃないかと、思うほどの凄まじい衝撃だった。だが、衝撃はその一瞬で、後はまるで紙を切る様な、そんな軽い手応えだけを残し、種を二つに裂いた。

一連の動作が一瞬の後に行われ、時が正常に流れ出すとき、二つに裂かれた種が女子生徒を避ける様に左右に散り、遙か後方で爆音を轟かせていた。

「な、何が……」

自分の身に起こった事に驚き、手に握る剣キルゲルに視線を落とす。刀の様に細く薄い刀身に鏢は無く、容易く砕けそうなその身だが、軽く持ちやすくその切れ味は 恐ろしい程鋭い。それは、生物を切る為に作られた、そんな剣に思えた。

手に握られたキルゲルに恐怖を抱き、体が震える。剣を扱った事

の無い僕でも思う。こんな剣がこの世にあつていいのか、と。体を震わせていると、手の中でキルゲルが静かに問いかける。

『我が……怖いか?』

「……と、当然……だ。こ、こんな鋭い刃……人を切る為にある様なモノじゃないか!」

『おかしな事を言う。剣とは元より、人を殺める道具。刃が鋭いのは当たり前前の道理……そうじゃないのか?』

キルゲルの問い掛けに、言葉が出ない。

キルゲルの言う通り、元々剣は人を殺める道具。刃が鋭くて何の不思議も無い。それ所か、刃が鋭いと言うのは、より優れている事を示す。

何の反論も出来ず俯くと、キルゲルはもう一度問いかける。

『貴様は今、何の為に剣を振るう?』

「何の為って……僕は殆ど巻き込まれたただけだから……」

『フン……ツマラン答えだな』

「ツマラン……て、あのな……」

『黙れ! 来るぞ!』

乱暴な口調のキルゲルに少しイラツと来たが、状況が状況の為、堪える事にした。

正面にユラリと揺れる砲閃火。また実が赤く点滅している。その間隔はまだ長く、力を蓄えている様だ。だが、忘れていた。砲閃火が、一体だけではないと言う事を。

甲高い破裂音と視界の端に僅かに見えた眩い光りに振り向けば、紅蓮の閃光が目の前に迫っていた。咄嗟にキルゲルで身を庇ったが、直接伝わる衝撃は体を軽々と吹き飛ばし、何度も地面を転げた。

高熱と激痛に、その場で動けなくなる。

「くっ……」

『どうした？ 立ち上がらんのか？』

「か、体が……痛くて……立てないんだよ……」

苦痛に表情が歪み、無理に体を起そうとするが、すぐに体勢が崩れ地面に平伏す。

そんな無様な格好に、キルゲルが馬鹿にした様に鼻で笑う。

『フツ……所詮、貴様はこの程度か……今回は随分と短命なパートナーを選んだようだ……』

短命……ふざけるな。元々、こんな状況にならなきゃ、もっと長生きできた。お前が居なければ そう思った時、ふと記憶が蘇る。あの日 初めてキルゲルが現れたであろうあの日の記憶が フラッシュバックする。

何の為 自分の為？ 違う。あの日、僕がキルゲルを出したのは 彼女を守る為だ。化物に立ち向かう勇敢で美しく、それでいて繊細で優しい。そんな彼女を 僕は 。

幾重にも積み重なる記憶の断片。どうして、忘れていたのだろう。どうして ……。

地面にうつ伏せに倒れたまま蘇った記憶を、何度も何度も思い返す。だが、どうしても彼女の名前、容姿が思い出せない。ただ、美しい人だった事は覚えている。そして、その日が今から三年前である事も、ハッキリと思い出した。断片的だが、その日の状況も少しずつ思い出されていく。

「うぐっ！ 頭が……」

だが、彼女に対する核心、あの日の重大な事を思い出そうとする

と、頭が割れる様に痛んだ。

「くっ……な、何で！」

声を荒げ、地面を叩く。すると、キルゲルも異変に気付く。

『遂に、頭でもいかれたか？』

「黙れ……」

『我が黙れば、貴様がこの状況をどうにかしてくれるのか？』

「うるさい……今、大切なことを」

もう一度記憶を辿る。だが、同じ所で頭に激痛が走り、思考を止める。

「くっ……なんで……」

もう一度地面を叩く。地面が砕け碎石が飛び、破片が頬を裂く。鮮血が滲み、静かに赤い雫を落とした。考えれば考える程、苛立ち怒りが込み上げる。どうして思い出せない。自分の記憶なのに……。何で忘れていた……。こんな大切な事を……。

『そんな事を、考えてどうする』

突然、キルゲルがそう述べた。

忘れていた。こいつには、僕の思考は筒抜けだった事を。だから、今も。

『悪く思つな。我とて、聞きたくて聞いているわけじゃない』

「お前は……知ってるのか、あの日の事を……」

『あの日……か。我も薄らとしか覚えていない。だが、我を具象化』

したのは、他でもない貴様の想いだ。そして、我が今、この様な武器の形をしているのも、貴様の想い、願いが具象化したものだ。貴様が、何を想い、何を願ったかは知らんが、この刃の鋭さも、この剣の形も、貴様が生み出したものだ。受け入れろ』

静かに告げるキルゲル。

僕の想い……僕の願い……。あの時、何を願い、何を想ったのか、それすら思い出せない……。それで、僕は何故戦うんだろう。

体から力が抜ける。瞼が重く、意識が遠退いていくのが 何と無く分かった。

深い深い闇の中。

僕は一人で歩いてきた。

何も無く、何処までも続く闇。

立っているのか、寝ているのかも分からない。

ただ、足を前へと進める。

時折聞こえる沢山の人の声。

懐かしい声があれば、聞きなれた声もある。

その声のする方に足を進めれば、薄らと光りが差し込んできた。

そして、走り出す。光りの方へ、導かれる様に

第十一話 記憶

眩い光の中を歩み進むと、徐々に視界が開けてきた。
懐かしい香りに誘われ、歩みは少しずつゆっくりになる。
声 が、聞こえた気がした。懐かしい人の声……。

「ねえ……キミ？」
「んっ？」

目を開くと……そこは、公園だった。あの日、僕があの人と出会った。

「こーら！ こんな所で寝ると風邪引くぞ！」

ボーツとしていると、頭を叩かれた。
激痛。一体、何で頭を叩いたんだ……。表情を歪めると、目の前に真っ白な顔が現れる。輪郭も目も鼻も何も無いただの真っ白な顔。そこで気付く。ここが、自分の記憶の中だと。だから、彼女の顔は。

「この所、毎日ここに来てるね。私は 。あなたの名前は？」
「僕は ……桜嵐……晃……」

彼女の名前すら出てこない……でも、その澄んだ綺麗な声は分かった。

「桜嵐君か……その制服って事は、私の後輩になるのかな？」
「……？」

「卒業生なんだよ。その学校の。エへへ……」

照れた様な笑い声。だが、顔は分からない。どんな表情で笑ったのかも思い出せない。

でも、この時僕はその笑顔に元気を貰った気がする。

「それで、こんな所で何してるのかな？」

「少し一人になりたくて……」

確か、この頃の僕は人に頼られるのを疎ましく思っていた……。いろんな人に頼られて、正直疲れていたのだらう。特に中学に上がった当初は、無理矢理学級委員長にされたり、色々仕事を押し付けられていた。

そんな事もあり、この日僕は学校をサボったのを覚えている。

「おやおや……サボりとは、キミはアレかな？ 不良とか言う奴かな？」

「……かも……知れませんか」

ボソリと呟くと、彼女の真つ白な顔が僕の顔を覗き込む。どんな顔をしていただろうと、思い出そうとするが、全く思い出す事は出来ない。

それから、色んな話をした。学校の事、今の自分の状況、何故そんな話をしたのか分からないが、ただ彼女に話すと心が楽になった。彼女も何も文句を言わずただ相槌を打ってくれる。だからだらう。安心して何でも話せた。

結局彼女は最後まで相槌を打っただけで、話が終わると優しく微笑み その顔も思い出せないが 頭を撫でてくれた。その手がとても暖かで、僕は自然と彼女に心を引かれていた気がする……。今となつては記憶が曖昧で、自分がどう思っていたかも定かではない。

「キミは、随分周りから頼られてるんだね」

「頼って欲しいとは、一度も思った事は無いですけど……」

「ふうん。じゃあ、キミは私を頼ってみない？ 私は色んな人に頼って欲しいからさ」

彼女はそう言いもう一度僕の頭を撫でた。

その彼女の優しさに惹かれたのかその日から、何度か彼女と会う様になった。学校での出来事や、自分の愚痴を沢山話したのは覚えている。そんな僕の話に彼女はいつも相槌を打って聞いていた。何の文句も言わず。だからだろう。僕は彼女に会うのが楽しみになっていた。

そして、あの日。いつもの時間。あの公園で。それは起きた。

激しい衝撃。

突風。

周囲を焼き払う業火。

燃え盛る家々。

その中心に佇む二つの影。

一つは見覚えのあるあの人の後姿。もう一つは。

「クククツ……光明の女神と呼ばれたお前が、こんな所で……」

ふてぶてしい声でその影が言う。鮮血に染まった真つ赤な手に握られた剣の先から滴れる血液。誰の血だ……。そう考えた時、ふと彼女の制服が赤く染まっているのに気付いた。

驚き不意に悲鳴を上げそうになったが、それより先に彼女が叫ぶ。

「逃げなさい！ これは、あなたが踏み込む世界じゃない……」

「クククツ……必死だな……光明の女神……。さては……あれが……」

「……」
「くっ！ 貴様！」

彼女が地を駆ける。自らの腹部から血を飛び散らせながら。一体、何が起こっているのか、全く分からない。非現実的な事が目の前で起こっているのだから。

走る閃光。

響く金属音。

散る火花。

フラッシュバックする戦慄。

飛び散る血飛沫。

地に落ちた腕。

全てが一瞬。

体が震え、悲鳴を上げ様にも声が上手く出せない。膝が笑いその場から逃げる事も出来ない……。動悸が激しくなり、何故か涙が零れる。そして、腰が自然と落ちた。胸を刺す様な圧迫感。圧倒的な恐怖の中で、呻き声が聞こえた。

「うぐう……ぐああつ……」

彼女の声。苦痛に蹲る彼女の背中。そこで気付く。地に転がる腕が 彼女の右腕だと。

「クククツ……無様だな……光明の女神もこうなってしまえば……」
「ふっ……ふふっ……」

おぞましい声に、彼女が静かに笑い出す。

「……アハハハハッ！」

気でも狂った様に大きな声で。

「ハハハハハ……笑わせるな！」

突然の怒声。

「貴様如きが、私と対等だと思っな！」

変貌。彼女の言葉遣い、声質。全てが変わり、彼女の髪が逆立つ。眩い光りを纏い。これが、光明の女神？　そ、そんな分けない。これじゃあ、女神と言うよりも　狂気に狂った……鬼。

その後姿に体が震える。思考が恐怖で回らず、何も考えられなかった。ただし、それも一瞬。彼女が僅かにこちらに顔を向け、

大丈夫。キミは私が守るから。

そう言い微笑んだ。いつものあの笑み……その忘れかけていた微笑みが僅かに脳内にフラッシュバックする。目の形……鼻の高さ……唇の色……輪郭……全てが幾度となく脳を駆け巡り、一つの顔を形成する。

二重で大きな目の奥に宝石の様に透き通る蒼い瞳。その目がいつも僕を見ていた。

顔立ちは綺麗で、三つ四つ違うだけなのに大人っぽく見える顔。その顔がいつも僕に微笑みかけてくれた。

なぜ、こんなにも綺麗な顔を今まで忘れていたのか……何故思い出せなかったのか……自分でも不思議に思う。そして、気付く。彼女が光明の女神と呼ばれる理由を。

「おー……怖い怖い……。光明の女神がお怒りだ……」

まるで怖がつていない口振り。何処か余裕が窺えた。それでも、彼女は尚も強気な姿勢、強気な言葉を発する。

「貴様には……この程度のハンデで十分だろ」

「オイオイ。冗談はよせ。もう、お前に戦う力は無い」

「それは……どうかな？」

彼女がそう言葉を発し地を蹴った。腰を抜かし、膝を震わす僕はただ彼女の背中を真っ直ぐに見据えていた。何も出来ず無力な自分を戒めながら。

その時だった。初めて声を聞いたのは。胸の奥で何か弾け、頭の中に何か聞こえた。低音の声。そして、その声は告げた。

『望め。汝が求める力を。さすれば我が 授けよう。汝の求める力を 』

この声に願った。彼女を守る為に 力が欲しいと。今、この状況を切り抜ける為に 力が欲しいと。

そう願うと、頭の中でもう一度声が聞こえる。

『創造する。汝の求める力を。その手の中に 』

声が途切れ、胸が熱くなる。苦しくて右手で胸倉を掴むと、その手の平に光りが溢れた。

「この光りは……ま、まさか！ 桜嵐君！ だ、ダメ！」

彼女の声が聞こえた。だが、もう止める事など出来ず、僕の手の中に一本の剣が創造された。

「くっ！ 目覚めたか！」

「桜嵐君！ 今すぐ、それを」

「ハア…ハア…全てを…斬る！」

薄れる意識の中でそう呟いたのは覚えていた。僕が口にした言葉だったのか、キルゲルが口にした言葉なのか、今ではハッキリしない。でも、この後の事は覚えている。僕はこの手で 彼女を斬った。何故、そう言う経緯に至ったのかは定かではないが、僕のこの手が彼女を殺めたのは確かだった。それでも、彼女は最後に微笑み、

「ごめん…守れなくて…」

と、薄ら涙を流し、僕の頭を優しく撫で息を引き取った。両手は彼女の血で真っ赤に染まり、真っ白だったワイシャツも返り血で赤く染まっていた。

悲しかったが、涙は出なかった。ただ呆然とまだ暖かい彼女の体を抱きかかえていた。そして、空からはいつしか、大粒の雨が僕の代わりに涙を流す様に降り注いでいた。

第十二話 理由

目を覚ますと、そこは見覚えのある部屋だった。

柔らかなベッド。棚やタンスの上に置かれた無数の可愛らしいぬいぐるみ。

一瞬デジャヴと思いながら、ゆっくりと上半身を起こすと、そこに雪国さんが居た。相変わらずラフな格好で、ガラス張りのテーブルに顔を伏せ寝息をたてている。

どれ位の時間が過ぎたんだろう。部屋を見回し時計を探すが、見当たらない。一体どうやって時間を把握しているのだろう。

疑問に思っていると、部屋の戸が静かに開かれ可愛いパジャマ姿の水守先生が入ってきた。風呂上りなのだろう。首にタオルを掛け、髪の中から雫が落ちる。学校で見るその印象と違い、何処か色っぽく見えた。

うつかり見惚れていると、視線に水守先生が気付いた。視線が交わり数秒。水守先生が頬を赤く染め視線を外した。

「何々？ 今頃私の魅力に釘付け？」

「いや、違うから」

即座にそう返答する。無表情で。

だが、水守先生は遠慮したと思ったのか、僕の横に腰を下ろし、

「遠慮しなくて良いよ。今日はあなたと私、二人きりだから……」

おかしい。おかしいぞ。僕の中には今、テーブルに伏せて眠る雪国さんの姿が見えるんだけど……それは幻覚？ 否。そんなはずはない。間違いなく雪国さんはそこに居る。故に二人きりではない。

その内考えるのも馬鹿馬鹿しくなり、考えるのをやめた。ため息を吐くと、心配そうな表情を水守先生がこちらに向けていた。その潤んだ瞳が妙に可愛く見えた。相当、疲れているみたいだ。もう一度ため息を吐くと、ギュッと水守先生が袖を掴んだ。

「エツ！ あ、あの、な、何デスカ！」

突然の行動に慌てて言葉を返すと、水守先生は真剣な表情でこちらを見ていた。まだ湿った髪から雫が零れ、シャンプーの甘い匂いが僅かに香る。ほのかに頬が赤いのは、風呂上りだから。そう思いたいが、水守先生はゆっくりと顔を近づける。

「晃……くちゅん！」

雰囲気をぶち壊す様に水守先生が可愛らしいクシャミを一つ。ホツとする自分と、残念な気持ちの自分が居る事が、少し恥ずかしくなり、それを誤魔化す為に水守先生が首に掛けていたタオルを取り、頭に被せた。

「うわっ！ な、な何何？ 晃君本気で襲っちゃうの！」

突然の事に慌てる水守先生。それを無視して、乱暴にタオルで髪を拭いた。

「あた！ 痛いって！ ちょ、晃君！」

「ジツとして。暖かくなってきたからって油断してると、すぐ風邪引きますよ」

「うっつ。私は子供じゃないんだよ。自分で拭けるよ！」

「そう言っただうせちゃんと拭かないでしょ。ジツとしてください。ドライヤーまでかけてあげますから」

「むうっ」

押し殺した様な声を発する水守先生だが、諦めたのか暴れるのをやめる。こうして後ろから水守先生の髪を拭いていると、幼い頃の記憶が蘇る。確か、美空や優海もこうやって髪を拭いてあげたな、と。

こうして見れば、水守先生も一人の女性なのだと分かる。こんなに小さな体で何倍もある化物と戦っていると思うと、胸が苦しくなった。

そして、自然と口が水守先生へと質問していた。

「先生は……何故、戦うんですか？」

「んっ？ なんだいなんだい？ 私に興味湧いちゃったのかな？」

相変わらず人を茶化す様な口振りの水守先生は、「エへへ」と軽く笑つと僕の方へと顔を向けた。タオルが僕の手から離れ、水守先生の髪から落ちる。まだ微かに濡れた髪が揺れ、雫が飛ぶ。二人の間に僅かな沈黙。ベッドに座る僕と、目の前に立つ水守先生の視線が同じ高さでぶつかる。

水守先生の綺麗な黒い瞳が、真っ直ぐにこちらを見つめる。僕もその目を真っ直ぐに見つめた。数秒の時間が過ぎ、ようやく水守先生が視線を逸らし「エへへ」ともう一度笑う。

「ごめん……ね。あんまり、そう言う事聞かれなかったからさ」

落ちたタオルを拾う水守先生は、顔を隠す様にすぐにタオルを頭から被り黙ってしまった。

また沈黙が続く。聞いてはいけない事だったのかと思い、申し訳なく思っていると、タオル越しに静かに水守先生が言葉を続けた。

「私はさ……幼い頃から、封術師やガーディアンになる為に育てられてきたから……戦う理由なんて……考えた事無かったんだ……。それに、戦う理由があるとしても……それはもう失くしてしまったから」

声が僅かにくぐもった。一瞬泣いているのではと思ったが、すぐにタオルの下から小さな笑い声が聞こえ、水守先生の可愛らしい笑顔が飛び出す。

「エへへ。ビックリした？ ドキッと来た？ 今、私にときめいた？」

「まあ、ちょっとだけ」

「エツ！ ほ、本当に、私にクラッて来た？」

「嘘に決まってるでしょ」

冗談のつもりで言った言葉にうろたえる水守先生に即座にそう言うのと、子供の様に「もーっ」と頬を膨らし怒る。その顔が可愛く見えておかしくなり、「プツ」とつい笑いを噴出してしまった。その笑いに対し、両手を振り上げる水守先生は、

「何で笑うんだよ！ 私は怒ってるんだぞ！」

「い、いや……ぷっ、今の水守先生、フツ……子供みたいですよ」

「コラー！ 子供って言うな！ 晁君よりも十歳も年上なんだよ！

もう少し、敬え！」

叫ぶ水守先生の声に、寝ていた雪国さんが顔を上げ、眠そうな目で僕の顔を見ていた。鋭く不機嫌そうなその目付きが、僕に訴えかける。ウルサイ、黙れと。本当にそう思ったかは定かじやないが、間違いないそんな風に言っている様な目だった。

あまりの迫力に黙り込むと、不意に水守先生が振り返り雪国さん

と目が合った。暫し二人が見詰め合ったまま動かない。何とも静かな時が過ぎ、根負けしたのか雪国さんが小さなため息を漏らし、スツと立ち上がる。

「ご飯作りますね」

「エへへ。ごめんね。寝起きなのに」

「お前も食うのか？」

雪国さんが鋭い目で僕を見る。まさか、そんな事を聞かれると思っていなかった為、反応に困っていると水守先生が笑顔をこちらに見せた。

「もちろん、晁君も食べるよね？」

「え、エエ……それじゃあ、いただきます」

「そう……」

静かに部屋を後にする雪国さん。妙に怒っている様に見えたのは、やはり眠りを妨げたからだろう。不機嫌そうな雪国さんの顔で、ふと学校での出来事を思い出した。結局、僕は砲閃火を相手に何もする事が出来なかったが、あの後あの鬼獣はどうなったのだろう。誰も怪我はしなかっただろうか。色々思い悩み、結局水守先生にあの時の事を聞くことにした。

「あの、水守先生。昼間の化物はどうなりましたか？」

「んんっ？ 化物と言うと、砲閃火の事かな？ あれなら、私と愛ちゃんデシユパパパツと、退治しちゃったよ？ 一体は一応、手持ちに封じちゃったけど、あー言う植物系統の鬼獣は、呼び出しても扱いに困るから、術の発動に使うことになっちゃっかな」

可愛らしくそう説明してくれた水守先生が、タンスの横からドラ

イヤーを取り出し僕の手に渡した。これは、髪を乾かしてくれと言っているのだろう。

聞いていない事まで色々と教えてくれた水守先生を前に座らせ、渋々とドライヤーの電源をONにすると、熱風が吹き出す。ファンが大きな音を立て回転し、水守先生の少しだけ湿った髪が熱風で靡く。静かな時がゆっくりと過ぎていく。

僕らはまだ知らない。この時が二度と戻らないと言つ事を。

第十三話 襲撃

あれから数日が過ぎ、森楼学園は何事も無かった様に平和な時間を刻む。

砲閃火によつて荒らされたグラウンドも、破壊されたはずの校舎の窓ガラスも。襲われた生徒達も、何も無かった様に普通に登校していた。

自分だけがおかしな夢を見ていた気分だ。これも、全て雪国さんの属する組織が裏工作を行ったモノだと、水守先生は言っていた。どれだけ凄惨な組織なのか気になったが、「キミはこの組織に深入りしないほうがいい」と、水守先生はそれ以上話そうとしなかった。その時の表情が、あの時のあの人の表情とダブリ、僕はそれ以上話を聞く事はしなかった。

「ふう……」

思わず出たため息に真後ろの席の信二がすぐさま反応する。

「何か悩みでもあるのか？」

やや冷たい印象の口調だが、これでも信二は心配している方だ。中学からの付き合いで、分かった事が二つある。彼が話し掛ける時は、決まって相手を心配している時。そして、もう一つ。彼は凄く友達想いだと言う事だ。

中学時代も信二は幾度と無く友人を助けて回っていた。その所為か、不良からは鬼の小野山と恐れられていた。

「俺でよければ、話を聞くが？」

振り返ると、相変わらずの表情で僕の見据える。眼鏡の向うに見える鋭い眼差しに、男とは思えぬほどの綺麗に整った顔立ち。女子がキヤーキヤー言う理由がよく分かる。

そんな彼と向かい合い、話すべきかを迷っていると、

「桜嵐。あんまり、思いつめるもんじゃない。何かあるなら、いつでも頼っていい。それが、友と言うモノだ」

少し驚いた。信二はこんな熱い事を言う奴じゃない。そう思っていたからだ。思わず、目頭が熱くなったが、涙は流さず笑顔を返すと、信二も僅かに口元に笑みを浮かべた。

「ありがとう。何かあれば、話すよ。でも、今はまだ……」

「そうか。なら、俺はこれ以上聞かない。お前が何を悩み、何を迷っているか分からんが、話したくなったら、いつでも話してくれ」
「ああ。分かったよ」

そう言うと、信二は恥ずかしそうに席を立った。ああ言う熱い台詞は言い慣れてなかったのだろう。そのまま信二は「頭を冷やしてくる」と、言って教室を後にした。

体を机へと向きなおし、頬杖を付き廊下の向うへと目を向ける。平和な時を刻む様に秒針が動き、全てを壊す様に一つの足音が廊下を静かに進む。

僅かに耳に聞こえる廊下を叩く踵の音。学園の生徒とは違う妙な威圧感に、体中の毛が逆立つ。ザワメキ声が廊下を伝い耳へ届く。そして、体内で眠るキルゲルもその異様な異変に過剰に反応を示した。

（逃げる！　ここから、今すぐ逃げる！）

「エッ？　キルゲルどうし　」

キルゲルに返答しようとした刹那だった。ガラスの割れる音が真横で聞こえたかと思うと、突如視界が揺らぎ首を太い何かに締め付けられた。

「ぐがつ……」

「コイツが……獲物か？」

「そうみたいね……白髪混じりの赤黒い髪。赤みを帯びた瞳。間違いないね」

何が起こったのかイマイチ理解出来ないが、一つ分かる事がある。今、僕は首を絞められていると言う事だ。太い腕の様な指が頸動脈を押さえ、息が苦しい。酸素が頭に回らず、意識だけが遠退く。薄れる視界の向うに僅かに見えた大きな男と小柄な女。対照的な二人組みだが、どうやら女の方が主導権を握っている様だった。

「さあて、残りは二匹か……確か、一人は教師、もう一人は女だつて話だ」

女の方のハスキーな声がそう告げる。おおよそ見当は付いた。教師と言うのは水守先生、もう一人の女は雪国さんの事だと。狙いはガーディアンと封術師。だとすると、彼等は 鬼獣。でも、その見た目はまるで人間そのものだった。

（オイ！ 我と変われ！ 死にたくないだろ！）

突如脳内に響くキルゲルの声に、僅かに頷くと 意識が吸い込まれる様に真つ暗になった。そして、気が付くと、僕の体は男の太い手から解放され、二人組みと対峙する形になっていた。

(くっ、キルゲル……こいつ等は?)

「詳しい話は後だ。今は、被害を最小に抑えてやる。お前も、こんな大勢の中で戦って欲しくないだろ?」

小声でキルゲルがそう言い、視線を動かす。教室内にはまだたくさん生徒が残っていた。散乱するガラス片に、横転する机とイス。教室の隅に追いやられた多くの生徒。キルゲルの言う通り、ここで戦闘するわけには行かない。キルゲルも色々と考えているのだろう。今回は剣すら具現化せずにいた。

(でも、どうやってあの二人から逃げるんだよ?)

「流石に窓からじゃ目立つか……なら、扉から抜け出すしかあるまい……」

「相談は終わったかしら?」

不意に女の方がそう口を開いた。まるで、僕とキルゲルが話しているのが分かっている様な口振りだ。

「こいつ等……」

(な、何で僕らの事……)

「さあ。ただ、厄介な相手だ」

キルゲルの視線が女性の方へと向く。長い黒髪に真っ赤な露出度の高い服装。小柄な体には不釣り合いの服装だが、堂々と仁王立ちする女は、冷やかな切れ長の目でこちらを真っ直ぐに見据える。

「さて、お前に問う。苦しんで死にたいか? それとも、楽に死にたいか?」

「残念だが、我は死ぬ気はねえ!」

地を駆ける。素早く音も無く。だが、それよりも早く目の前に立ちはだかる巨漢。隆々とした肉体に、黒の短髪。サングラスを掛け、目付きは分からないが、そのサングラスの奥で煌く赤い瞳だけは薄らと見えた。

「逃げられると思ってるのか？」

濁った男の声に、キルゲルが心の中で小さく舌打ちした。この巨大な体の何処から、あの動きを生み出しているのか分からないが、間違いない今の僕らよりも強い事だけは分かった。殺気、放つ雰囲気、全てが異常だ。砲閃火とは比にならない。

逃げ道を絶たれ、半歩下がるキルゲル。どうする事も出来ず、時計が刻む秒針の音だけが教室内に響く。

(どうする?)

「戦うしかねえか？」

(でも、他の生徒が……)

「分かっている。だが、何もしないで死ぬつもりか？」

キルゲルが険しい表情を浮かべそう問う。確かに何もしないで死ぬのは嫌だった。だが、自分のせいで誰かが傷付くのはもっと嫌だった。自分が犠牲となって他の皆が助かるなら、そう考えた時、体は動いていた。鋭い刃を右手に握り。

キルゲルが動かしているのか、自分の意思で動かしているのかも分からなくなり、いつの間にかその刃で巨漢の男に斬りかかっていた。周囲に広がるザワメキと悲鳴。そんな声さえ、気にならず深く右足を踏み込み、更に巨漢の男に刃を振るう。

「うおっ！ な、なんだ？ 急に動きが変わったぞ。どうするんだ？ 火渦子^{かかし}」

「案ずるな。所詮は人間だ。私らが負ける訳ないだろ。土漢^{どかん}」
「ククククツ……そうだな。人間如きに遅れをとるわけがない」

不適に笑う土漢と呼ばれた男がゆっくりと拳を振り上げる。動きは遅い。そう判断したが、次の瞬間、視界は真っ暗になった。何が起こったのかわからない程凄まじい衝撃が全身を襲い、気付けば窓ガラスを突き破り外へと投げ出されていた。

「うつ……くつ……」

地面に激しく背中から落ちた。息が一瞬止まり、意識が飛ぶ。だが、すぐにその意識も戻り、激痛だけが体に残った。

第十三話 襲撃（後書き）

遅くなりました。

本当に申し訳ありません。

第十四話 火渦子と土漢

視界が揺らぐ。

想像以上の怪力だった。骨が砕けたのか体のあちこちが痛い。

それでも、キルゲルの再生能力のお陰で、砕けた骨も徐々に回復しつつあった。

「くくくくつ。見た目で判断すると、痛い目を見るぜ」

窓から降り立つ土漢と呼ばれた男。着地の瞬間に衝撃が広がり地響きが起きた。まだ意識が朦朧とする。それでも、キルゲルは真っ直ぐに土漢を見据えていた。

(キルゲル……大丈夫か?)

「案ずるな。それより、貴様は大丈夫か？」

(僕は……平気だ。それより、アイツ……)

「土漢と、言っていたな。鬼獣あがりか……」

ボソリと呟くキルゲルの『鬼獣あがり』と、言う言葉が少しだけ気になった。だが、今それを聞いている余裕など無く、もう一人の火渦子と呼ばれた少女もゆっくりとした足取りでそこに現れる。

最悪の状況なのかもしれない。土漢一人にもこんなにも追い込まれているんだから、火渦子も加わったらと思うと、怖くなった。

それでもキルゲルは真っ直ぐに土漢を見据え、不適な笑みを浮かべる。

「土漢とか……言ったか？ 貴様では我に勝てん」

「……火渦子。コイツおかしくなっちゃったぞ」

「気にするな。とつと破壊しろ。私らの任務は人影とかげが来る前に、

ここに居るガーディアンと封術師を皆殺しにする事だからな」
「分かった。まずは　一人目だぜ！」

一瞬で土漢が間合いを詰める。あの体でどうしてこんな素早いのが不思議だが、キルゲルは目の前に現れた土漢の顔を見上げ、不適に笑うと、右手の剣を振り抜く。音も無く手応えも無く刃が一閃さ
れ、土漢の体が僅かに後方へと傾く。

「ぐっ！」

「フッ」

苦痛に表情を歪める土漢に対し、相変わらず不敵な笑みを浮かべたままのキルゲル。何が起こったのか分からないが、次の瞬間、土漢の胸板に真つ赤な筋が走り血が流れ出す。先程の一閃で、切つ先が僅かに触れていたのだろう。全くその手応えすら感じないその切れ味に、少なからず僕は恐怖を感じた。

「後、半歩踏み込んでたら真つ二つだったな」

挑発的な言葉を吐くキルゲルに対し、怒りをあらわにする土漢は、右拳を振り上げる。

「俺の体を傷付けるとは、人間にしちゃ上出来だ」

「おい。土漢！　下がれ！」

「うるせえ！　コイツは俺の獲物だ！」

火渦子の制止を振り切り、土漢が拳を振り下ろす。それを待ち望んだ様にキルゲルが右足を踏み込み、振り抜いた刃を逆手に持ち替え、下から上へと一直線に切り上げた。

一瞬重々しい手応えが腕に伝わるが、すぐにそれも消え、血飛沫

と悲鳴が周囲に響き渡る。

「うがあああつ！　う、腕があああつ！」

醜い土漢の悲鳴。自らが振り下ろしたその勢いも重なり、腕は肘の辺りまで真つ二つに裂けていた。なんとも痛々しいその光景に、キルゲルは不適な笑みを浮かべ、

「相性を知らねえとは、とんだ下級鬼獣だな」

「き、きさ　ッ！」

刹那、僕らの目の前で紅蓮の炎が閃き、一瞬にして土漢の体が炎に包まれた。咄嗟に後ろに飛び退くキルゲルが、その視線を火渦子の方へと向ける。

「何？　その目。言っておくけど、仲間とか私には関係ないから。

命令に背く奴は、ジャマなだけ」

「フツ……同感だ。我も、命令に背く奴は邪魔だと思う。しかし、自らの力を見せ付ける為だけに、同胞に手を掛けるクズにそれを言われる筋合いは無い！」

（き、キルゲル！　お、落ち着け！）

珍しく怒りをあらわにするキルゲルが制止も聞かずに地を駆ける。疾風の如く早く間合いを詰め、暴風の如く荒々しく、その刃を振るう。風を取り込み更に鋭さを増したその一撃が、音も無く火渦子を捉えた。が、刃はそこで重い手応えだけを残しピタリと動かない。

「くっ！　な、なんだコイツ……」

指先だけで刃を受け止める火渦子に驚くキルゲルに対し、

(キルゲル！ 下がれ！)

咄嗟にそう指示を出す。その指示にキルゲルは反抗せず、すぐに後方へと飛び退く。遅れて、先程まで僕らの居た位置で紅蓮の炎が火柱を上げた。

ほんの一瞬だが、火渦子が不適に笑い、指先から炎を出したのが見えた。もし、それを見ていなければ、僕らは今頃土漢の様に焼かれていただろう。

「コイツ……普通の連中と違う」

(どういう事だ?)

「分からん。だが、我も武器として集中する。後は、貴様で戦え」

(ちよ、ちよと待て、僕に戦いなんて!)

「貴様、いつまでも我の力に頼るな。我とてこの状態は体力を消耗する」

当然と言わんばかりのキルゲルだが、元々はキルゲル自身がこうして僕の体を勝つてに使っているわけで、僕には戦う意思など全く無かった。

それでも、半ば無理矢理に体を返され、キルゲルは武器である剣へと意識を戻す。

『良いか。我はこれより、貴様のサポートに回る』

「さ、サポートって、ちよっと」

『来るぞ!』

キルゲルの言葉に視線を前に向けると、激しい炎を纏った火渦子の拳が顔へと迫る。反射的に体をそらせそれをかわし、間合いを取る為はその場を下がった。

「くっ……キルゲル。やっぱり僕には……」
『安心しろ。貴様と我は一身だ。何があっても貴様を殺させはしない』

その言葉の意味に僅かな違和感を感じた。何にそう感じたか分からないが、何か胸騒ぎがした。

ボンヤリしていると、キルゲルの怒声が耳に届く。そして、我に返り咄嗟にキルゲルを顔の前に移動する。強い衝撃がキルゲルを伝い腕を突き抜け、体が後方へと引つ張られる様な感覚に襲われ、気付けば地面を何度も転がっていた。

「イツ……な、何が……」

『戦闘中に気を抜くな。幾ら我でも、やる気の無い奴のサポートは出来ぬぞ』

「わ、分かってるけど、あんなのにどうやって勝つて言うんだ？それに、さっき相性がどうか言ってたけど、キルゲルって火の属性と相性悪いだろ」

その言葉にキルゲルは小さく舌打ちした。

『貴様、いつから気付いていた？』

「砲閃火と戦った時」

あの砲閃火との戦いで、僕が気付いた事。それは、キルゲルは風属性だと言う事と、火は風を呑み込み更に強力になると言う事。どんなに強力な力を秘めていても、風属性であるキルゲルでは、火属性である火渦子と対等にやり合う事は無理なのだ。

穏やかな風が頬を撫でる。目の前にたたずむ火渦子を見据え、静かに息を吐いた。何故だか心は穏やかで、いつも以上に冷静に全て

を見る事が出来た。火渦子の口元が緩み、右手にもう一度炎が灯る。

「私との相性は最悪だな。お前の風は私の炎を強くするだけだよ」

余裕の笑み。ただでさえ、戦闘慣れしている相手の上、相性は最悪。しかも、コッチは戦闘初心者。まるで勝てる気がしない。それでも、キルゲルの強気な態度は変わらず、

『これ位のハンデがあつた方が面白いだろ？』

などと相手を挑発するが、火渦子はそんな挑発には乗らず、相変わらずの態度で返答する。

「安っぽい挑発だ事。残念だけど、土漢の様な無能な奴と一緒にするなよ」

「キルゲル。言われてるぞ」

『我は挑発したつもりは無い。それより、時間を稼ぐぞ』

「時間を稼ぐ？」

小声のキルゲルにそう聞き返すと、キルゲルも折り返しで答える。

『ああ。時間を稼ぐ。貴様の言う通り、我と奴では相性が悪い。だが、奴はミスを犯した』

「ミス？」

『土漢を始末した事だ。火の弱点は水。幸いここには水属性を持つ者が二人居る』

「そうか。雪国さんと水守先生か！」

その答えにキルゲルが静かに『そうだ』と答える。確かにあの二人なら、この火渦子との相性もいいし、何より僕よりも戦闘経験が

豊富だ。間違いなくあの二人なら。

第十五話 囚われ

「それじゃあ、彼を見殺しにしると言うのか！」

突如響いた師匠の声。その声に、僅かに濁りのある男の声が返答する。

「そうだ。それが、貴様等に与えられた上からの命だ」

「ちよつと待ちなさい！ 私はもう組織とは縁を切ったはずだ！
何故、お前達に命令されなきゃいけない！」

いつに無く感情的な師匠の声に、私はゆっくりと体を起した。

寝ていたのだろう。妙に体がダルイ。頭がモヤモヤするが、とりあえず周囲を見回した。

コンクリートの壁に囲われた部屋。小さな鉄格子のついた窓。そして、重々しく佇む鉄の扉。

私の部屋でない事はすぐに分かり、どうしてここにいるかを考える事にした。だが、その時突如として爆音が響き、コンクリートの壁に亀裂が走る。部屋に僅かに差し込む光りに、目を細めると、もう一度爆音が響き、遂に壁が崩壊した。

コンクリート片が飛び散り、同時に一つの影が部屋に転がり込んだ。目を凝らすと薄らその影を確認できた。真っ黒な衣服に身を包んだ三十代程の男だった。漆黒の髪に細かなコンクリート片を被り、額からは鮮血が流れ顔の右半分を赤く染めている。歳相応に老け込んだ顔立ちを顰める男が、体を起し壁に出来た穴を真っ直ぐに見据え叫ぶ。

「き、貴様！ 何をしてるのか分かってるのか！」

その声にコツ…コツ…と、踵が床を叩く静かな音が響き、長い黒髪を揺らし見慣れた顔立ちの女性が部屋へと入ってきた。額に刻まれた傷に美しく整った顔立ち。そして、凜々しく力強い眼がスツとこちらへと向いた。

「愛！ 体は動く？」

「エツ、あつ！ はい！」

突然の師匠の声に咄嗟にそう叫ぶと、師匠はゆっくりと頷き、

「それじゃあ、あなたはすぐに晁の所へ行きなさい！」

「エツ？ あ、晁の所へ？ な、何で」

「いいから！ 行けえ！」

いつも冷静な師匠の怒声に体がビクツとする。あまりの迫力に体が痺れる感覚に襲われた。

呆然とする私の脳に幼い声が流れる。

『姫！ しつかり！ 今は師匠の言う通りに！』

「わ、分かってる！」

「くっ！ 行かせると思ってるのか！」

男が叫ぶと、師匠の背後に二人の男が現れた。皆、同じ様な真っ黒な衣服に身を包み、手にはサポートアームズであるだろう武器を握り締めている。片方が大剣、片方は双剣。そして、部屋の中にいる男は刀。名も属性も分からない見た事の無いサポートアームズに、師匠は失笑し自らのサポートアームズの名を叫ぶ。

「フルースフェイレ！ 戦闘タイプ！」

『了解しましたマスター！』

叫び声に反応する様に、師匠の靴が変化する。漆黒の硬質物に覆われたブーツへと。これが、師匠のサポートアームズ、フルースフエイレの具現化された姿だった。見た目は普通のブーツの様だが、それは移動速度を極限まで上げ、その足から放たれる蹴りの威力も最大限まで引き上げる最も扱い難い武器であると、以前に聞かされた事があった。

それを具現化した師匠は、ゆっくりと三人の男を見回し、静かに息を吐き、

「愛！ ここは私が何とかする。あなたは、晃の所に！」

「わ、分かりました。で、でも、無理は」

「大丈夫よ。私の事は心配しなくても。あなたには全てを教えたりもりだから……」

その言葉に不意に胸がざわめいた。それでも、私は「はい」と答えるしかなかった。師匠がそれを望んでいたから……。

その返事にいつもの様に笑みを浮かべた師匠は、

「うおりゃあああっ！」

叫び声を上げると同時に右足を振り抜く。鋭い音が一瞬間こえ、突如として衝撃が爆音と共にコンクリート壁を突き破った。砕けたコンクリート片が外へと飛び出し、日差しが室内へと差し込む。外の空気が入り込み、湿った室内に僅かな熱気を漂わせた。

「こほっ…こほっ……」

衝撃で舞い上がった埃に咳き込んでいると、耳元で大人びた女性の声 もとい私のサポートアームズであるセイラの声が聞こえた。

『愛ちゃん！ 後ろ！』

その声に振り向くと、刀を振り上げた男がすぐ傍まで来ていた。

寝起きである事と現在の状況を把握できていない為、気配の察知に完全に遅れをとってしまった。具現化は 間に合わない。ならば

と、親指と人差し指を立て手で銃を作り、男へ向ける。

「ヴァンツ！」

腹の底から吐き出した声と共に、立てた人差し指の先に青白い光りが収縮され、男に向って勢いよく放たれる。閃光が閃き、男はそれが危険と察知したのか、身を振りギリギリでそれを避けた。

「くっ！ 寄生型か！」

「違うわよ。彼女は、移植されたのよ！」

男の声に師匠が蹴りを見舞うと同時にそう答える。スピードに乗った鋭い蹴りを腹部に受けた男は、後方へと吹き飛び、壁に背中を打ち付けた。

「ぐふっ……き、貴様！」

「ふ、副隊長！」

大剣を持った男が副隊長と呼んだ刀を持った男へと駆け寄る。そして、双剣を持った男の方が舞い上がった土煙の中から飛び出す。師匠の死角から飛び出した完全な不意打ちに、私が声を上げようとしたが、それよりも先に師匠の体が反転し強烈な後ろ回し蹴りが双剣の男の米神に決まった。男の体は側転する様に吹き飛び、壁に左肩からぶつかる。

圧倒的な力の差を見せる師匠に、何と無く安心し息を吐く。さっきの胸騒ぎはきつと気のせいだ。そう言い聞かせ、私は師匠が壊した壁の方へと足を進める。師匠に言われた通り、昇の所に行く為に

「セイラ！」

『分かったわ。愛ちゃん』

私の声で右耳にしていたイヤリングが輝き、大人びた女性の声と共に白翼を背中へと具現化した。翼の一枚一枚が風を受け揺れ、日差しを浴び輝く。これがセイラの具現化。セイラは戦闘タイプのサポートアームズではなく、飛行能力の備わった補助タイプのサポートアームズ。

白翼は静かに広げられる。風を大きくかく為、空へと羽ばたく為、大きく優雅に広げられた白翼が、日差しを遮り、室内を闇が包み込む。

「くっ！ 行かせるな！ なんとかしても ぐっ！」

僅かに濁った男の声が途切れ呻き声へと変わる。師匠の蹴りを受けたのだろう。遅れて壁が崩れる音が聞こえた。

「愛！」

「はい！ セイラ！」

師匠の声に私は返事を返し、広げた翼を力一杯に羽ばたかせた。突風が巻き上がり、私の踵が浮き上がり、最後につま先が地上から離れる。

『目的地は森楼学園ね』

「ええ。行くわよ」

私の声に翼がもう一度大きく空をかく。壁に出来た穴から外へと抜け出すと、部屋からもう一度濁った声が響いた。

「行かせないと、言っただろ！」

赤い光りが壁穴から眩く発せられる。だが、遅れて聞こえた爆音がその光りを一瞬で消し去り、男の呻き声がもう一度聞こえた。激しい打撃音だけが部屋の中から聞こえる。容赦の無い師匠の蹴りが炸裂しているのだろう。

更に加速するように大きく両翼がはばたき、勢いよく空高くまで舞い上がる。

「ここって何処よ？」

『僕の見立てだと、ここは森楼学園の南西の方角だよ』

脳内に幼い声が響く。私のもう一つのサポートアームズ、ヴェイリの声だ。その声に僅かに頷くと、続けてセイラの声が背中から聞こえる。

『愛ちゃん！ あれ見て！』

セイラの声に促されその方角へ目を向けると、黒煙が見えた。

「あれって……」

『森楼学園の方よ！』

「なっ！ じゃあ、鬼獣！ 急ぎましよう！」

私の声に両翼を羽ばたかせ、森楼学園へと急いだ。

第十六話 加勢

どれ位の時間が過ぎただろう。

幾度と無く続く火渦子の攻撃。立ち上る火柱をギリギリでかわしながら、一定の距離を保つだけで、神経を削られていく。

ギリギリでかわしていると、言ってもそれは火渦子が本気で当てようとしていないからであって、本来なら、一撃で焼き殺されているだろう。

「はあ…んぐつ…はあ…はあ…」

呼吸をするのが辛く、足が思う様に動かない。地面には幾つモノ黒焦げた痕が残され、黒煙が僅かに漂う。

額から溢れる汗を左手の甲で拭い、制服の襟元を掴み、第二ボタンまで外す。呼吸が苦しく、どうにかして呼吸を楽にする為にそうしたが、全く効果は無い。

顎先から汗が雫となって零れ、襟元を掴む手に落ちる。体中の水分が搾り取られている様だった。

霞む視界の先に映る火渦子。不適な笑みを浮かべ、未だに余裕が窺えた。神経を研ぎ澄まし、火渦子の動きを見逃さない様にジツと見据える。

「ふふふつ……。中々、洞察力があるみたいだな。けど、そろそろ遊びも終わりにしよう」

火渦子の発言に、胸の奥で何かが弾ける感覚が襲う。何かが来る、そう感じ、身構えると、キルゲルも何かを感じたのか、不意に叫ぶ。

『晃！ 後方に飛べ！ 次のは 』

「もう遅い……」

火渦子が指をパチンと鳴らす。その刹那、地面が砕ける音が聞こえ、地面から今までとは比べ物にならない程の火柱を吹き上げる。逃げ遅れ、完全に周囲を炎に包まれた。逃げ場所など無く、吹き荒れる炎の熱で、意識が朦朧とし始めた。

「さて、その中で、どれ位持つかな？」

炎の向こう側で火渦子の声が僅かに聞こえた。

「しかし、この町に派遣された封術師とガーディアンは最弱だな……。今まで行った町では、もっと骨のある連中だったが……」

独り言の様にそう呟く火渦子に、キルゲルが小さく舌打ちしたのが聞こえた。最弱と言われたのが屈辱的だったんだろう。だが、火渦子は言葉をやめる事無い。

「前の町では、危うく命を落とす所だったが、ここなら傷の回復も容易だな。こんな最弱のガーディアンがいる場所だか　ぐっ！」

突如、火渦子の声が途切れ、呻き声が聞こえた。何が起こったのか分からず、耳を澄ませていると、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「誰が最弱だった？　言っておくけど、弱いのはそいつだけよ」

雪国さんの声だ。そして、何気に傷付く一言をコツチに向ける。

雪国さんも悪気があるわけじゃない。ああ言う性格なんだと、自分に言い聞かせるが、

「まったく、あなたの所為で、私まで最弱だつて思われるでしょ！
しっかりやりなさいよ！」

グサグサつと、胸を刺す雪国さんの言葉に膝を落とす。安心した
と言つのもあつたが、一番は心を折られたと言つのが原因だつた。
この辛い状況で、あの傷口を抉る様な毒舌。心が折れない方がおか
しい。

膝を落とし静かに呼吸を続けていると、右手に握つたキルゲルが
頭の中に直接語り掛ける。

（おい。まだ動けるか）

「はぁ…はぁ……」

返事をするのが辛く、荒い呼吸をしながら静かに頭を縦に振つた。
その返答にキルゲルが小さく笑い、もう一度頭の中で声が聞こえる。

（よし。なら、意識を集中しろ。苦しいだろうが、このピンチを最
大限に利用する）

呼吸が苦しく質問する気力も無かつた。その為、キルゲルに言わ
れた通り自らの意識を一点に集中する。その一点とは、もちろん右
手に握るキルゲル本体だ。その最中、頭の中でキルゲルの声が何度
も聞こえた。

（イメージしろ。鋭い刃を。全てを切り裂く。鋭い刃
を）

その言葉通りに頭の中でイメージする。鋭く全てを切り裂く刃を
想像する。頭で思い描くイメージが徐々に鮮明になり、同時にキル

ゲルの声が響く。

（振り抜け！ イメージをそのままに！）

「ッ！」

奥歯を噛み締めキルゲルを一息で振り抜く。刹那、疾風が駆ける。鋭い刃と化して。

目の前の炎の壁を裂き、その向うに仁王立ちする火渦子の姿が僅かに見えた。だが、すぐに地面から噴出す炎が視界を塞ぐ。それに遅れ、僅かに火渦子の呻き声が聞こえた。

「うぐう！ くっ……あの死に損ない！」

「なんだ、やれば出来るじゃない」

火渦子の声に遅れて聞こえた雪国さんの皮肉に、小さく息を吐きながら笑うと、冷気が周囲を包んだ。燃え盛る炎の音が消え、寒気が全身を襲う。突然の事に体が過剰な反応を起こし、体の節々がズキキと痛む。

『あの小娘！ おい！ 晃！ しっかりしろ！ くっ！ 今すぐ体を変われ！』

キルゲルの声に無意識に頷くと、意識が一瞬途切れ、キルゲルが体を支配する。しかし、その瞬間、体が重くなり、キルゲルが膝をつき苦痛に表情を歪めた。

「くっ……な、何だ……」

（ど、どうしたんだ？）

「体が……重い……」

キルゲルがそう言うと、凍り付いた炎が音を起て崩れ、火渦子と空を舞う雪国さんの姿が視界に映った。右手に蒼い銃を握る雪国さんは、膝をつく僕を見て怪訝そうな表情を浮かべる。

「なに…してるわけ？」

「見て…分かるだろ……」

奥歯を噛み締め、ゆっくりと立ち上がるようにするが、すぐに膝を落とす。

「くっ…ダメだ……。晃…変われ……」

キルゲルが苦しそうな声でそう言うと、もう一度意識が飛び、キルゲルの意識が体から抜け、意識が戻った。体がダルイ。これも、キルゲルと体を共有しているからだろう。それでも、何とか体を起き上がらせ、肩で息をしながら立ち上がる。

顔を上げれば、火渦子の姿が視界に映った。右脇腹に左手を沿え、服の下から滲み出る真っ赤な鮮血。先程放った刃が掠めたのだろう。致命傷では無い様だが、少しでも傷を負わせる事が出来たのは幸이었다。

「くっ…くっ…。やってくれる……。やはり、とつと…トドメを刺しておくべきだったな」

眉間にシワを寄せ、こちらを睨む火渦子だが、突如視線を逸らすと、その場を飛び退く。

遅れて聞こえたのは乾いた破裂音。そして、衝撃と共に冷気が周囲に広がり、地面が凍り付いた。その後も何発も破裂音が轟くが、火渦子は表情を歪めながらも、軽やかなステップで全ての弾丸をかわす。

「チツ！ ちょこまかしてんじゃないわよ！」
「くくくつ……それでもちゃんと狙っているのか？ 悔しければ当
ててみる」

「へえ……いい度胸ね。ヴィリー。全力で行くわよ」

白翼を羽ばたかせ空を舞う雪国さんの声に、『出力全開！』と子供
の音が蒼い銃から聞こえ、銃口の奥で蒼白い光りが収縮される。
その光りが徐々に強まり、火焔子も危険を感じたのか「くつ」と、
単音の声を発したのが聞こえた。だが、その声もすぐに掻き消す程
の轟々しい風音が周囲に響く。

その音を発するのは雪国さんが持つ蒼い銃。銃口の奥の蒼白い光
りが更に眩く輝き、周囲の空気を冷やし白煙が薄らと漂い始めてい
た。その銃のグリップを両手で握り締め、右手の人差し指が引き金
に掛かる。その手が僅かに震えて見えた。雪国さんの体も、その銃
から発せられる冷気に耐え切れないのだろう。

雪国さんの口から漏れる白い息。何かを話している様に見えるが、
僕には聞こえない。それから程なくして、僅かに表情を歪め、「い
けっ！」と言う叫び声と同時に引き金が引かれた。

第十七話 やるべき事

口から漏れる息が真っ白に凍り付く。

手に握ったサポートアームズである銃、ヴィリーのグリップが冷たく手の体温を奪い、漂う冷気が全身の筋肉を締め付けていく。引き金に掛けた人差し指が震えるが、それでも、真っ直ぐに火渦子を見据える。名前から分かる様に奴の属性は火。水属性を持つ私にとっては相性の良い相手だ。

だが、どうしてだろう。胸騒ぎがする。それが勘違いであって欲しいと願いながら、静かに息を吐き引き金に掛かった指に力を込める。

「いけっ！」

声を発すると同時に、引き金を引く。衝撃が両肩を突き抜け、蒼白い光りが冷気を纏いながら地上にいる火渦子へと迫る。速度は上々。威力は最大級。これなら、奴も一撃で　そう思った時だ。突如晃の声が耳に届いた。

「避ける！」

その声で私は気付く。自分に迫る赤く細い棒の様なモノに。それが何かを考えるより先に、体が自然と回避運動を開始する。だが、大きな翼はそれを避ける事が出来ず、左翼に直撃し『くっ！』と、セイラの呻き声が耳に届く。

左翼が燃え上がり、体を支える事が出来ず地上へと落下する。

「くっ！　セイラ！」

『ごめん！　愛ちゃん！』

愛の声にそう返答したセイラは具現化を解き、もう一度白翼を具現化し、地上へとゆっくりと降り立つ。再生が間に合わず多少黒焦げた左翼。これじゃあ、暫く飛ぶ事は不可能だろう。渋々と、具現化を解き、右耳にしていたイヤリングを取る。

「ごめんね。セイラ。私の不注意で……」

「気にしないで。一日休めば回復するから。それよりも、気をつけて。今までの鬼獣とは違うみたいだから……」

「分かっている。私も何と無く危険だと言う事は分かるわ」

静かに火渦子の方へと目を向ける。全力を込めた一撃を浴びて、全く無傷の火渦子。相性はいいはずなのに、何故……。そんな疑問を抱いた刹那、火渦子と視線が交わる。すると、僅かに口元が緩み、意味深な笑みをこちらへと向けた。思わず銃を発砲しそうになったが、それをセイラが制止する。

「愛ちゃん。落ち着いて。相手の挑発に乗っちゃダメよ。水守さんから教わった事を忘れたの？」

「……分かってる。まず、相手を観察し、情報を集め、相手の事を知った上で戦闘する」

「そう。それじゃあ、まずは、相手を観察しましょう」

セイラが優しくそう囁き、私はジッと火渦子を観察する。

名前は火渦子。その意味は案山子から来ているのだろう。いわゆる、畑に居る人形。そして、その名の意味は、火の渦をあつかう子供と言う事だろう。その証拠に、火渦子の姿は幼い子供そのモノ。先程の攻撃も、炎を渦状にして吹き上がらせたモノだと、私は推測している。弱点は間違はなく水属性である事は間違いないが、果たして中途半端な水属性の私で勝ち目があるのだろうか……。

不安に思わず喉の奥から「くっ」と声を発した。誰にも聞こえない程の小さな声だったが、火渦子にはその声が届いたのか、不適な笑みを浮かべると、

「考察は済んだのか？ 私を倒す策は浮かんだか？ 中途半端な貴様の能力で、私と対等に戦えると思うか？」

火渦子のこの言葉で、確信する。コイツが、既に私達の情報を知り得ていると。どう言う経緯でその情報を知り得たのかは分からないが、こちらの正確な情報をおっちは持っていると見て間違いないだろう。

「どうして、お前が私達の情報を知ってるの？」

「さあ？ どうしてかな？ 貴様等が私達の情報を知ってる様に、鬼獣達が貴様等の情報を知っても不思議じゃないだろう？」

その言い分は確かだ。だが、幾らなんでも知り過ぎている。私が中途半端な能力と言うのは、組織の中でも限られた人しか知らない情報。しかも、あの攻撃もまるで分かっていた様に対応してきた。こう言う事は考えたく無いが、組織から情報が漏れてるとしか……。でも、一体誰が、そんな事を……。

色んな情報が頭の中でゴチャゴチャと回る。そんな私に、ヴィリ―が叫ぶ。

『姫！ 来るよ！』

「チッ！ 考えをまとめる時間を与えないつもりか！」

「そんな必要は無いさ。貴様等は、ここで死ぬんだから！」

叫び声と同時に火渦子が迫る。が、その横っ腹に晁の蹴りが見事に決まった。

「ぐうつ！ 死に底無い！」

「はぁ……はぁ……死に底無いで結構……。死に底無いは死に底無いなりに、必死に生きてるんだよ……」

苦しそうな呼吸。立っているのも辛いはずなのに、どうしてそんな行動をとったのか理解に苦しむ。そして、苛立つ。ボロボロの体で立ち向かうその姿が。だから、私は怒鳴る。苛立ちをぶつける様に。

「あ、あんた、何してるのよ！ 大人しく寝てなさいよ！ バカじゃないの！ そんなボロボロの体で！」

怒鳴り声に晃が僅かに横顔を見せる。

真剣な眼差しが緩み、穏やかな笑みをこちらへと向け、

「毎回……守られてばかりじゃ……男として情けないだろ？ 少し位……良いカッコ……したいもんだよ……男つてのは……」

静かにそう述べ、顔を正面へと向け直す。その後姿は何処か懐かしく思えた。

だが、すぐにその懐かしさも消え、私はもう一度怒鳴る。

「バカ！ あんた、戦闘経験浅いんだから、こんな奴相手に何前に出て行ってんのよ！」

『黙れ！ 今、すべき事を考えろ！』

「分かってるわよ！ あんたに言われなくても！ でも、だからって、何であんたが前に出んのよ！」

私の言い分は最もだ。戦闘経験の少ない晃が火焔子と対等に戦え

るはずが無い。向うは何人も人間を殺し、何度も私達封術師やガーディアンを相手にして生き延びてきた戦闘のスペシャリスト。しかも、相手はコツチの情報を知り尽くしている。

……知り尽くしている？ いや。違う。もしかすると。

「分かった！ 暫くあなたに任せる！」

「エッ？ きゅ、急にどうし」

「いいから！ 暫く任せるから！ ちゃんと、持ち堪えなさいよ！」
『晃！ 意地でも、あの女を守れ』

キルゲルと呼ばれる晃のサポートアームズが僅かに濁った声でそう言つと、晃も小さく頷き「わ、分かったよ」と了承する。

私は、静かに一枚のカードを取り出す。そのカードに描かれる蒼き獅子。階級はCランクで、私が一番最初に封じた最も長い付き合いの鬼獣。名は水獅。『水死』と言う意味を持ち、水害が起きた場合の原因が、この鬼獣の所為だと言われている。

「頼むわよ……あなたの力を貸してちょうだい……」

静かに目を閉じ、右手に握る蒼い銃ヴィリーへと力を込める。心を静かにし、意識をヴィリーへと集中した。そして、左手に取った水獅のカードを静かにヴィリーへと添える。カードは溶け込む様にヴィリーの中へと消えていく。

一般的に封術師は高度な術を使う時に、こつやつて封じた鬼獣の力を借りる場合がある。例外もあるらしいが、それはほんの一握りの選ばれた人間だけだ。師匠ですら、鬼獣の力を借りなければ術を使う事が出来ない。どんなに頑張っても埋める事の出来ない天性の才能だと、師匠は教えてくれた。実際、そんな奴を見た事は無いが、師匠の妹はその才能を持っていたらしい。

意識を集中する間、耳に届く激しい爆音。時折、晃の呻き声の様

なモノが聞こえ、火焔子の高笑いが響く。何があっても心を静かにし、意識を集中する。晃を信じて。

第十八話 流れを変える 風

幾重にも続く火渦子の攻撃。

ギリギリの所で火柱を避け、あわよくば反撃出来ればと、右手に握った剣キルゲルを構える。だが、反撃する間を与えず、火渦子が指を鳴らす。すると、足元を抉り火柱が目の前に広がる。

「くっ！」

奥歯を噛み締め後方へと身を投げ出しそれを避けた。軽く受身を取り、後転する。口の中が乾き、喉が痛かった。それでも、すぐに体勢と整えキルゲルを構えなおす。呼吸をするのすら辛い、すぐに足を止めて横になりたい、そんな願望さえ覚えた。膝も震え、体が鉛の様に重い。だが、意識ははっきりしている。時折、生徒の声が聞こえた。

「何で立つんだよ」

「あんな体で何してるの」

口々にそんな声が。皆の言う事も最もだと思う。だが、足を止めるわけにはいかない。後ろには雪国さんが居る。それに、他にも守るべきものが。だから、息を整え重い体をゆつくりと動かす。まだ足も腕も動く。動くうちは、まだ立ち止まるわけには行かない。そう思った矢先だった。火柱が消え、目の前に火渦子の顔が見えた。不適な笑みを浮かべた顔が。

「この声は……気が散るな……。消し去るか？ 今すぐに」

そう言って火渦子が手の平に火の玉を作り出す。すぐに叫ぼうと

したが、声すら出ない。そんな僕に代わって、キルゲルが叫ぶ。

『そんな事させると思つか？』

「ふっ……出来るさ。私を誰だと思ってるんだ？ 火を司る鬼獣だぞ？ その程度造作も無いよ」

不適に笑う火渦子。奴の力ならば、本気でそれをしかねない。それを知ってか、キルゲルも言葉を呑む。静寂に包まれ、炎が燃える音だけが聞こえる。

しかし、静寂を破る様に一つの声が響く。

「桜嵐！ あんた、何やってるのよ！」

吉井さんの声に振り返ろうとした時、顔の横を赤い閃光が通り過ぎ、「キャッ！」と悲鳴が聞こえた。嫌な予感が脳裏を過り、次の瞬間目の当たりにする。炎に包まれた吉井さんの姿を。

教室から様子を窺っていた生徒達の悲鳴がこだまし、幾重にも重なる足音が聞こえてきた。だが、それもすぐに聞こえなくなる。膝が力なく地面に落ちた。今までのダメージも重なり、意識が遠退きそうになる。

そんな中で背後から火渦子の高笑いが見えた。その瞬間、心の奥にしまっていた黒い何か体が浸食する。キルゲルとも違う別の意思の様なモノが流れ込み、声が聞こえる。

（我を 望め！ 我を 欲せ！ さすれば与えん。汝の求めんとする力を！）

頭の中で聞こえる声に、思わず答えそうになるが、その前にキルゲルの声が響く。

『オイ！ 確りしろ！ あの女なら大丈夫だ！』

その声に振り返ると、雪国さんが静かに手を上げる。

「癒せ！ 蓮の葉の雫！」

声が響くと、吉井さんの体に巨大な水滴が落ちる。それは水滴と言うよりも水の玉、そう表現する方が正しいだろう。一瞬、湯気が立ち、姿が見えなくなるが、すぐに水の玉に包まれた吉井さんの姿が見えた。炎は完全に消化され、気泡が吉井さんの体から溢れる。何が行われてるのか、僕にはサッパリ分からないが、火渦子は小さく舌打ちしたのが聞こえた。

遅れて、息を切らせる雪国さんが、静かに口を開く。

「はあ……はあ……。後は、任せるからね……」

『晃。今ので暫く愛ちゃんは、力使えないから！』

「だ、大丈夫よ……。すぐ、回復……するから……」

乱れた息でそう告げる雪国さんだが、明らかに消耗が激しく膝が僅かに震えているのが分かった。それほどまで消耗しているのに、どこまでも強気な態度の雪国さん。それが、封術師としての彼女の意地なのだろう。

苦しそくに呼吸を繰り返す雪国さんを見ると、背後で不適な笑い声が聞こえた。

「ふふふっ……これで、楽に戦える」

その言葉にキルゲルが小さく舌打ちした。

「どうか……したのか？」

息を切らせながらもそう尋ねる。何と無く、気に掛かったからだ。その安易な問いに、キルゲルが小さく鼻で笑い答えた。

『ふっ……。どうやら、あの娘の言う通り、コツチの情報は筒抜けの様だ』

「それって……。さっき、雪国さんが言ってた奴か？」

『ああ。それだけじゃない。我と晁、お前の事も既に筒抜けみたいだな』

「エッ？ 僕とキルゲルの事も？」

『まあ、こう言う事は考えたくなかったが、あの娘の組織に裏切り者、または鬼獣上がりの奴がスパイとして入り込んでるかのどちらかだろうな』

キルゲルの言葉に火渦子は静かな笑いを吐き出し、

「まあ、知る必要は無いよ。どうせ、ここで死ぬんだから。もう、お前等に戦う力は無い。だろ？ 中途半端な能力の封術師と素人ガ―ディアン」

両腕を広げ天を仰ぐ火渦子は、両方の手の平に炎を灯すと、それを更に大きく膨張させる。炎が膨れ、火渦子の顔を赤く照らす。

「ふふふ……。ふははははっ！ これで、最後だ！」

「キルゲル！」

『オイ！ 貴様、何を』

無意識 と、言うよりヤケクソだった。自然と右足を踏み込み、力一杯に地を蹴りそのまま火渦子へと迫る。

僕らの事などもう相手にしていない様子の火渦子は、両手に灯し

た炎を空へとかざす。

「燃え上がるは炎。全てを喰らうは劫火。人を捌くは業火。全てを喰らえ。」

何やら呪文の様にそう呟く火渦子。脳が危険だと感知するが、足は止めない。今、足を止めれば全てが終わると、直感したからだ。疲労で足が重い。速度は上がらないが、それでも必死に足を動かし、遂に間合いへと入った。

「くっ！ イケッ！」

右足を深く踏み込み、全体重を乗せる。刹那、何処からとも無く暴風が吹き荒れる。荒々しく全てを裂く様な甲高い音を響かせ、激しく大気を振るわせる。全てが静止したそんな感覚に包まれ、一瞬だが火渦子と視線が交わった。

何もかもを一瞬にして変えてしまう、そんな一陣の突風を乗せ、両手に握ったキルゲルを素早く振り抜く。

「グッ！ キサ。」

火渦子の言葉が途切れ、刃が左脇腹へと入る。だが、火渦子が咄嗟に身を引いたのか、手応えが浅くそのまま僅かに切っ先が腹部を裂き、そのまま左へと流れた。

全てが終わった。と頭の中が真っ白になる。これが最後の一撃、全ての流れを、全てを裂くハズの一撃。それが無駄に終わった。そして、絶望が今、まさに周囲を包む。

『晃！』

キルゲルが叫んだのが分かった。だが、体が急激に傾く。全てを出し尽し、もう体を支える力すら残ってなかった。うつ伏せに倒れこむと同時に、頭部を踏み付けられる。

「ぐっ！」

「雑魚が！ 私に傷付けてんじゃねえよ！」

激しい罵声を浴びせ、僕の頭を何度も踏みつける。地面に右頬が擦り付けられ、ヒリヒリと痛みが走る。

「まずは、テメエから消してやるよ！」

一層声が大きくなり、炎が更に大きな音をたて燃え始める。何とか横目で上を見ると、両手に集まっていた炎が一つに纏められ、更に大きく膨らんでいるのが分かった。そして、怒り狂った火渦子の顔が一瞬映り、ゆっくりと目を伏せた。意識が遠退いて行く。

その中で、僅かに声が聞こえた気がする。男の声。何と言ったのか分からないが、その声が聞こえ雪国さんが叫び、火渦子の悲鳴の様な声が聞こえた。そんな気がした。

第十九話 謎の男

それは一瞬の事だった。

火渦子が頭上へとかざした巨大な火の玉。それが、音も無く消滅し、ソイツは現れた。黒のフードを被り、ロングコートを着た男。背丈は私や晃よりも幾分高い。顔はよく見えないが、フードの合間に赤っぽい髪が見えた。

ソイツは、火渦子の前へと降り立つと、右手の中指に蒼い水晶の付いたリングを填め、そのまま拳で火渦子の顎を突き上げた。

「ぐっ！」

火渦子の体は軽々と吹き飛び、追い討ちを掛ける様に男が右足を振り抜く。それを防ごうと火渦子は腕を交差させた。だが、それがかわし、火渦子の左側頭部へと蹴りが決まり、そのまま地面へと叩きつけられる。

圧倒的な力を見せつける男は、横たわる晃を左腕に抱え、私の所まで跳んで来た。

「彼の治療を頼む」

「エッ！ あ、はい……」

いきなりの事で、思わずそう返答すると、男が私の方へと僅かに顔を向け微笑み、

「いい返事だ」

そう呟き、火渦子の方へと視線を向ける。

「くっ……貴様！ 誰だ！ この地区にお前の様な奴が居るなんて聞いてないぞ！」

「残念ながら、俺はあの組織に属してないんでな。お前の所に情報はいかないだろうな。それよりも、その情報をどうやって手に入れたのかって所が気になる所だけだな」

静かにそう述べ、男がもう一度拳を握る。その行動に火渦子は拳に火を灯し、鼻筋にシワを寄せる。表情を見てるだけで分かる、火渦子が怒っている事が。

そんな火渦子を見てみると、正面へと歩む男が静かに、

「君が見ていなきゃいけないのは、彼のはずだよ。パートナーは大切にするんだよ」

優しい口調でそう言い、ゆっくりと前進する。その拳は僅かに水の膜を纏う。

両者が睨み合う中、私は僅かに回復した力を使い、傷を負った晃を治療する。治療を始めて初めて晃の傷の酷さを改めて知った。

まともな訓練など受けていないはずなのに、どうしてこんなになるまで戦い続けたのか。

なんでこんなにもボロボロになっても、何度も立ち上がり続けたのか。

自分なりに考えてみたが、どう考えてもコイツはおかしいとしか思えなかった。

いきなり、こんな危険な事に巻き込まれて、どうしてコイツは…

…。
考えていると、爆音が響き、突風が土煙を舞い上げた。目を伏せ、そちらへ目を向けると、火渦子と男の拳が激しくぶつかり合っていた。

轟々と燃える火渦子の拳と、水を纏った男の拳。二人の拳が同時

に離れ、互いに逆の拳を突き出す。タイミングを合わせた様に綺麗に二人の拳がぶつかり、衝撃が周囲に広がった。土煙がもう一度周囲に勢いよく広がり、窓ガラスが音を立て碎けた。

互いに力を比べる様に何度も拳をぶつけ合う二人。その度に衝撃で土煙が舞う。

「くっ！ これならどうだ！」

火渦子が突如距離を取り、右手を男の方へと伸ばす。その手の平に即座に炎の球が形成された。それが空気を取り込み徐々に大きく膨れ上がる。だが、男は何もせず、懐から出した赤い水晶の付いたリングを右手の薬指に填めた。

何を考えているのか、全くつかめない男。その男が私の視線に気付いたのか、コツチに顔を向け微笑む。

「安心しな。これ以上、ここに被害は及ぼさないから」

「図に乗るな！」

火渦子が叫ぶと、手の平に集まった炎の球が放たれた。男に向かいながらも空気を取り込み大きく膨れ上がる炎の球に、男もゆっくりと右手を差し出す。

「喰らえ。ゴノーレフォスト！」

男の声と同時に炎の球が男の右手に触れる。刹那、薬指に填めたリングの水晶が眩く輝き、炎の球を相殺した。いや、相殺と言うよりも吸収したと、表現する方が正しいのかもしれない。

その光景に驚いていたのは私だけではなく、それを放った火渦子の笑みが凍り付いていた。自らの放った最大級の攻撃を、いとも簡単に防がれたのだ。そうなってしまふのも分かる気がする。

呆然と立ち尽くす火渦子に、男の薬指に填めたリングの水晶が輝き、静かな男の声が聞こえてきた。

『マスター……。無茶をするのはやめろ。俺が炎を吸収出来るからって、こう何度も炎ばかりを吸収させられては……。』
「悪いな。でも、もう安心しろ。これで最後だからな」

男が笑みを見せると、続けて中指に填めたリングの水晶が輝き、綺麗な女性の声が聞こえた。

『マスター。私の準備は出来ています』

「そうか。それじゃあ、早速終わらせようか」

「くっ！ ふざけるな！ 貴様などにやられる。！」

男に対し、火渦子がそこまで叫んで言葉を呑んだ。男が特別何かしたと言うわけでは無さそうだが、火渦子は数歩後退し、僅かにだか怯えた様な表情が窺えた。何をそんなに怯えているのか分からないが、男が静かに右手を握った。

その瞬間、辺りの空気が変わったのを一瞬だけ感じる事が出来た。だが、すぐにその感覚が無くなり、静かに緩やかな風が足元を吹き抜け、訪れる静寂。

数秒、数十秒、時が進む中で、男がゆっくりと歩みを進める。しかし、火渦子は逃げようとせず、その場に佇んだまま動かない。その火渦子の傍まで歩み寄った男は、右手を火渦子の額へと置いた。

「ごめんよ……。君達の存在が悪いんじゃないんだ……。今は、静かに眠りについてくれ……」

男がそう言ったのが僅かに耳に届き、突如男と火渦子の周囲を覆う様に水柱が噴出す。やがて、その水柱は二人を完全に覆い隠した。

水音だけが周囲に響き、後は遠くから聞こえる生徒達の悲鳴のみ。あの中で何をしているのか分からないが、数分が過ぎ水柱が静かにひき、静かに男が姿を見せた。そこに、火渦子の姿は無く、男の手には一枚のカードが握られていた。見慣れた茶色の背表紙に白線で描かれた星印。その中心には“封”の一字。正しく、封術師が鬼獣を封じるカードだった。

「はぁ……今回は大分消耗したな……」
『そうですね……。しかし、まだやる事が……』

男が右手の中指に填めたリングから綺麗な女性の声が聞こえ、男が周囲を見回す。それに吊られ、私もゆっくりと周囲を見回す。

黒焦げた地面。

割れた窓ガラス。

校舎にも細かい亀裂が走っていた。

校内で派手にやりすぎた。それに、他の生徒にも顔を見られ、鬼獣の存在も知られてしまった。封術師としてこれほどの失態は無い。本来、封術師・ガーディアンは人に知られる事無く迅速に鬼獣を封印・討伐しなければならぬ。それが、この有様だ。奇襲だったなどと言うのは単なる言い訳にしかない。

自分が情けない。私を信じてくれた師匠にも、合わせる顔が無い。ゆっくりと晁の傷を癒しながら両肩を落としていると、男が私の前で足を止めた。

「雪国愛……であってるよな？」

「それが何。今はそつとして置いて」

「なら、琴音は何処かだけでも教えて欲しいんだが？」

突如男が口にした師匠の名に、驚き顔を見据える。すると、男も私の目を真っ直ぐに見据え、

「俺は彼女とはちょっとした知り合いでね。それで、今日は彼女に話があつただけど……」

男が腕を組み空を見上げる。意味深なセリフにふと、先刻の事を思い出す。

「そ、そうだ！ し、師匠！」

叫び勢いよく立ち上がるが、すぐに目眩と脱力感に襲われ前方へと倒れた。だが、私の体は男の右手で確りと抱え込まれ、

「大丈夫か？ 君は体力の消耗が激しい。あんまり無理をするのは良くないぞ？」

「でも、師匠が！」

「その様子だと、君と琴音にも何かあつただね？」

落ち着いた口調でそう言う男に、私は先刻の出来事を全て話した。組織に監禁された事、師匠が組織のメンバーと戦つてる事を。

第二十話 雷天

血塗れの足を引き摺り、ゆっくりとコンクリートの柱の裏へと身を隠した。

薄暗い室内に割れた窓や崩れた壁から光が差し込む。埃っぽくかび臭い室内で、僅かに肩を揺らしながら、ゆっくりと腰を下ろした。油断していたわけじゃないが、まさか奴自らがここに来ているとは思わなかった。

震える右膝を右手で押さえ、壊れかけたブーツへと声を掛けた。

「大丈夫……フルースフェイレ」

「ガ…ガガ……だ、だいじょ……ガガ……」

ひび割れた声が僅かに聞こえた。これ程大きなダメージを受けて大丈夫なわけが無い。私の右足も手痛くやられた。傷は深く力も入れるのも辛い。

静かに天井を見上げ、弱々しく息を吐く。

愛は大丈夫だろうか、晃は大丈夫だろうか、自然と自分の事よりも愛と晃の事を考えてしまう。特に、晃の事を。彼は、私にとって

「さて……そろそろ、鬼ごっこもやめにしませんか？ 水守先輩」

若い男の声が室内へと反射し、ゆっくりとした足音が近づく。

柱を背にし、その様子を窺う。漆黒のスーツを身に纏った若い男が、床に残った血の痕を辿り、こちらへと近付いてくるのが見えた。

「随分、偉くなったもんだね。関」

強がり、そう言葉を告げた。

奴は関 雷斗。以前、私のいた組織の後輩。正直、奴には才能の一つも感じなかったが、そんな奴がいまや一つの部隊を率いる隊長。私が組織を抜けてから、組織内で何かが起こったとしか思えない。不適な笑みを浮かべる関は、ネクタイを緩め、

「その名で呼ぶのは、やめて欲しいですね。その名はもう捨てたんで」

「名を……捨てた？」

「ええ。今は雷天。そう、組織では呼ばれてますよ」

一層不適に笑う。

雷天、その名は代々組織内の雷属性のガーディアンもしくは封術師で最上級の地位の者に受け継がれる名だ。私も以前はそれなりの地位にいたが、最上級者の名を受ける事は出来なかった。それは、私の力が足りなかったと言うのもあるが、一番の理由は妹の存在があまりにも大きかったと言う事だ。

だからこそ、思う。何故、奴が雷天の名を名乗る事が出来るのかと。

奥歯を噛み締め、壊れかけたフルースフェイレに触れる。ずっと一緒に戦って来た、私の大切な友。だからこそ、私は覚悟を決め立ち上がった。

「行くよ。フルースフェイレ。私は、最後まであなたと一緒にだから」
「ガ……ガガ……」

返事はなく。雑音だけが耳に届いた。もうフルースフェイレの声は聞けない。それでも、私にはフルースフェイレが何と言ったのかわかった。だから、私は微笑み頷いてから、柱から出た。

「やっと……覚悟を決めましたか？ 水撃の舞姫」

彼が私をそう呼ぶ。それは私が組織にいた時の通り名だった。そう呼ばれる様になったのは、私の戦闘スタイルが理由だ。サポートアームズのフルースフェイレが、ブーツ型で蹴りを主体の戦い型しか出来なかった為至った戦い方だったが、その姿がまるで舞を舞っている様だからだそう。私はそんな事を考えた事すらなかったのだが。

「懐かしいけど、その名で呼ばないで貰いたいわね」

「昔の通り名はお嫌いですか？」

「さあ？ どうかしら？」

正直、私はその通り名が嫌いだった。舞姫？ 私はただ生き残る為に必死だっただけ。それなのに、何故、そう呼ばれなきゃいけないのか、そう思っていたからだ。

妹も、自分の通り名が嫌いだと話していた。周囲の過度な期待を、感じるからだと言っていたのを覚えている。

昔を思い出し静かに笑い、真っ直ぐに雷天を見据える。相変わらず不適な笑みを浮かべて、何処か余裕が窺えた。それほどまで自分の力に自信があるのだろうか。

「どうしました？ 急に笑い出して？ 気でも狂ったんですか？」

余裕を見せたまま、不思議そうにそう尋ねる雷天。その顔を見据えると、彼は静かに手を差し出した。

「何のマネかしら？」

「戻る気は無いですか？ 先輩程の才能の持ち主を失うのは、組織としても不本意でしょうし」

「随分と評価してもらってるみたいだけど、残念ながら戻る気は無いわ」

はつきりと拒否し、ゆっくりと息を吐く。

心を落ち着かせ、ジツと相手の顔を見据える。いまだサポートアイテムズを具現化しない雷天。余裕があるのか、私を見下しているのか、どちらにしても今しかチャンスはない。そう判断し、全身の体重を右足へと乗せる。

傷付いた足にズキツと痛みが走る。だが、奥歯を噛み締めそれを堪え、全力で床を蹴った。埃が舞い、風が頬を撫でる。間合いが一気に詰まり、射程内に雷天をとらえ、左足を踏み込み右足を側頭部に向け振り抜く。

重々しい打撃音に、重い手応え。全体重を乗せた全力の蹴りだったが、雷天はそれを左腕で受け止め不適に微笑む。

「先輩。奇襲ですか？ 奇襲は力の無い者がする弱者の戦略だって言ったのは先輩ですよね？」

「あら。私が言ったのは力の無い者が力のある者と戦う時に使う策だって、教えたはずだけど！」

素早く右足を下ろし、腰を回転させそのままの勢いで左足で回し蹴りを見舞う。全体重を支える右足に凄まじい痛みが走るが、それを気にせず全力で放った回し蹴り。重い手応えだが、やはりこの蹴りも雷天の腕で防がれていた。

「くっ！」

「先輩。いい加減止めましょうよ。力の差は明白ですよ」

不適に笑う雷天が、私の左足を掴む。

「戻る気が無いなら、この足も要りませんよね？」
「なっ！」

突如、雷天の右手に一本の剣が現れる。サポートアームズを具現化された。

そう思つや否や、彼の持つ剣が下から一気に振り上げられ

「っ！」

声にならない程の激痛が体を襲い、血飛沫が吹く。体勢は崩れ、体が地面へと叩きつけられ、切断された足が宙へと放られ、不適な笑みを浮かべた雷天が血の付いた剣を眺める。

「弱くなりましたね。先輩。それに、これで、あなたは舞えない」
「くっ……うぐっ、あっ……」

激痛で、言葉すら返す事が出来ない。血が流れ出ていくのが分かる。そして、徐々に意識がもうろうとし始めてきた。それでも、奥歯を噛み締め、ジツと雷天を見据える。

「懐かしいですよ……あの日、あなたの妹を切った時以来の感触ですよ」

「……あの日？　ぐっ、そう……。それじゃあ、あんたが……」

コイツが私の妹を殺した……。そう思うと自然と拳を強く握っていた。痛みも忘れ、ただ奴を睨む。

その視線に気付き、苦笑し、

「いやいや。残念ながら私は一太刀入れただけで、彼女を殺したのは　桜嵐晃。彼ですよ」

「ッ！」

「おや？ 知らなかったんですか？ 彼が最後にあなたの妹さんの胸に剣を突き立てたのを？」

唇を噛み締める。私もその事実は知っていた。どうして、そう言う経緯に至ったのかも、分かっている。でも、誰が妹を襲ったのか、ずっと気になっていた。そして、今日この時、私はその答えを知った。まさか、目の前に居るこんな奴に、私も妹も。そう思うと、自然と笑いが込み上げてきた。

「当等、壊れましたか？ まあ、組織に戻らない時点で、既に壊す事は決まっていたが」

彼がそう言い、静かに剣を振り上げた。

「さよなら 先輩」

彼が静かに鋭く刃を下ろした。

第二十話 雷天（後書き）

更新、遅くなりました。

申し訳ないです。

もう少し更新が早く出来る様、頑張つて行きたいと思つてます。
これからも、よろしくお願いします。

第二十一話 静かな夜道

遠くに聞こえる噺り泣く声に、意識がゆっくりと戻る。真つ暗な視界が開け、見慣れた天井が映し出された。

これで、何度目になるだろう。この天井を見上げるのは。全身の痛みに、また戦闘中に意識を失ったのだと知る。

苦痛に耐え、体をゆっくりと起すと、テーブルに顔を伏せる雪国さんの姿が見えた。さっき聞こえた噺り泣きは、雪国さんのモノらしい。

何故、泣いているのか分からない。それに、水守先生は何処だろう。辺りを見回していると、雪国さんが静かに頭を上げ、右手の甲で涙を拭う。

「うっ……はぁ……」

声を掛けようと思ったが、そんな彼女の後姿を見ると、どんな言葉を掛ければいいのか分からなかった。戸惑っていると、突然視界が真つ暗になり、体をキルゲルに支配された。

「おい……。お前の師匠はどうした」

「……っせー」

小声で雪国さんが何かを呟いた。よく聞き取れず、キルゲルは眉間にシワを寄せ、

「何だ？ もっとはっきり言え」

「うっさいって、言ってるのよ！ 気が付いたなら、とっとと帰れ！」

怒鳴り散らした雪国さんが、僕の方へと振り返る。その目には涙が滲み、赤く充血していた。一体、どれだけ泣いていたのだろう。不意にそんな事を思うと、意識がもう一度飛び、キルゲルに支配された体が戻る。キルゲルも、状況を悟ったのだろう。

ベッドから立ち上がり、雪国さんに軽く頭を下げた。

「悪かった……キルゲルが……。落ち着いたらさ……話、聞かせてくれ」

それだけ告げ、部屋を後にした。玄関を出ると、部屋の中から泣き声が聞こえた。一応、僕の手前、泣くのを堪えていたんだろう。何があったのか分からないが、雪国さんがこれ程声を上げて泣くなんて、よっぽどの事があったに違いない。

玄関の前から立ち去ろうとした時、もう一度意識が飛び、キルゲルが体を支配する。そして、右手に剣を創造する。

(おい！ きゅ、急に何してんだ！)

キルゲルに対しそう怒鳴る。だが、キルゲルは鋭い視線で周囲を確認すると、

「隠れてないで出て来たらどうだ」

と、低い声で言い放つと、一本の柱の影から男が一人姿を見せた。漆黒のロングコートとフードを被った男。フードから赤髪混じりの黒髪が見える。暗がりの所為で顔は良く見えない。だが、なんだろう。凄く懐かしく感じる。それはキルゲルも同じだったのか、僅かに顔をしかめた。

「どつ言う事だ……お前！」

「話がある」

キルゲルの言葉を遮る様に男がそう告げる。その声にキルゲルは言葉を呑み、小さく舌打ちすると、体を僕へ返し、自らの意識を剣へと移す。

「キルゲル……やたら、体を借りるの止めてくれないか……」

『悪かったな。貴様が一人で戦えるならこんな事しなくて済むんだけどな……』

「悪かったな……戦えなくて……。現代っ子が、剣なんて持って戦うわけないだろ……」

自分の気持ちを中心に押し出す、キルゲルは全く気にせず、

『さて、話があるそうだが、我も聞かせてもらおう』

「ああ。そのつもりだし、晃君と君は一心同体だろ？」

男が当たり前の様にそう述べる。何故、僕の名を知ってるのか分からないが、もしかすると雪国さんの組織の関係なのかもしれない、
と思い、

「み、水守先生がどうなったか、教えてくれませんか！」

そう口にした。

その瞬間に男は小さく頷き、

「場所を変えよう。ここじゃ目立つだろ」

「はい。それじゃあ……」

『私が、水壁を張ってその中で話すと言っつのは？』

突然、綺麗な女性の声が聞こえ、男がゆっくりと右手を懐へと入ると、蒼い水晶の付いたリングを取り出した。あれが、この人のサポートアームズなのだろう。基本的にサポートアームズには持ち運びしやすい様に出来ているらしく、具現化していない時は主にアークセサリー等になってる事が多い、と以前水守先生に聞いた事を思い出した。僕や水守先生のサポートアームズのような例外もあるが、基本はそうなっているらしい。

見るからに綺麗なそのリングを見てみると、男はため息混じりの声で、

「フィリーラン……今日は力を使い過ぎた。これ以上、お前達に負荷は掛けられない」

『そうですか……。マスターがそう言うのであれば……。』
「悪いな。お前に無理させて」

男はそれだけ伝えると、静かにリングをしまう。これだけで、この人がどれだけあのサポートアームズを大切にしているのかわかった。そんな男が静かに僕の方へと目を向けなおすと、

「それじゃあ、ちょっと付いて来てくれるか？」

「はい……」

「それから、キルゲルはしまった方がいい。流石にそんなモノを持ちながら夜道を歩いていると、通報されかねないからね」

「わ、分かりました。キルゲル」

キルゲルにそう言うと、小さく舌打ちをしてその姿を消した。

キルゲルが消えたのを確認した男はゆっくりと歩き出し、僕もその後に続いて歩き出す。街灯に照らされた薄暗い夜道。今夜は月も出ていて明るい、静けさが何やら不気味だった。深夜と言うわけじゃないと思うが、この静けさは異様だった。

「君も、感じるか？ この異様な空気を？」
「エッ？ は、はい……」

不意に告げられた男の言葉に焦りながら返答すると、男はゆっくりと足を止め振り返る。

「今、この町は監視されている。特にキルゲルに寄生されている君を」

「エッ！ ば、僕が？ な、何で？」

あまりの驚きに声を上げると、夜道にその声が反射する。男は口の前に人差し指をかざすと、

「君は意外とリアクションが大きいね。聞いてた話と違うけど、君は随分変わったと見る。いい人間関係が築けてるって事かな？」

男が僅かに笑ったのが分かった。誰から僕の事を聞いていたのか分からないが、とりあえずこの人は僕の事を知っているらしい。怪訝そうな表情をしていると、男は距離を取り、

「そんな顔で、見ないで欲しいな。確かに怪しいかも知れないけど、君の敵ではないよ」

「……」
「あれ？ 説得力なかったかな？」

苦笑する男を怪しみながらも、とりあえず今は彼を信じる事にした。その考えにキルゲルも黙認していた為、男に僅かに笑い、

「とりあえず、今はあなたを信じます」

「そうか。それじゃあ、その公園に行こう。話はそこで」

男の言葉に不意に疑問が生まれた。男の話から自分が監視される身なのは分かった。その状況下で目立つ公園で話をするって言うのはどうなんだろうか。そう思っていると、男は歩き出しゆっくりと語る。

「監視されてるって言うのが気になるのかな？ でも、安心していいよ。監視と言っても彼等は君に直接危害を加える事が出来ない」

「……と、言う事は、やっぱり……」

「まあ、組織と言っても幾つかの支部から成り立ってる。君……いや。キルゲルを狙ってるのはその中の一部だけだよ」

明るくそう話す男の背中を見据え、後に続き歩き出す。組織について詳しい様だったので、つい聞きたい事を口にした。

「あの……その組織には僕と同じ歳の子が多いんですか？」

「……それは、適合性と才能によるだろうね」

「適合性と才能？」

「ああ。組織には学校の様なモノがある。そこでは、属性能力値の高い者と、サポートチームズへの適合性を持った者を選び入学させ、戦闘技術と封印術を教え込ませるらしい」

「らしい？」

「俺の時代ではそんなモノは無かったし、俺も組織の人間じゃないから詳しくは分からない」

「そうですか……」

静かにそう言うと、男は「すまなかつたな」と小さな声で言うと、その背中が少し小さくなった様に見えた。

それから暫く黙ったまま歩き続け、公園に辿り着いた。小さな公

園で園内に唯一取り付けられた街灯がベンチを明るく照らしている。そのベンチにゆっくりと腰掛けた男は、その殺風景な公園を見回し、「ここで、君は彼女と出会ったんだよな」

と、投げ掛ける。確かにこの公園は僕があの人に会い、僕があの人を殺めた場所。あの日以来ここへは来ていなかった。無意識の内に避けていたのかも知れない。

久しぶりに来てみたが、随分と風変わりしていた。と、言うより遊具が殆ど撤去され、公園と言うよりも広場になっている様に思えた。

「ここも……随分変わったんですね」

思わずそう漏らすと、男は静かに笑う。

「そうだね。時は短い時間でも色々なモノを変えていくからね」

意味深な彼の言葉に聞き入っていると、一陣の風が吹き荒れ、土埃と木の葉が舞い上がる。

突然の事に目を伏せると、何かが前方へと降りる音が聞こえた。風が収まり、ゆっくりと瞼を開くと、そこに片手に銃を持った女性が銃口をこちらに向けていた。暗がりではよく見えないが、彼女の額にもう一つ不気味な眼光が輝き、引き金にゆっくりと人差し指が掛かった。

第二十二話 闇

深夜に響く一発の銃声。

けたたましいその音に草木がザワメク。だが、それを爆音が一瞬で掻き消す。

吹き荒れる暴風。

周囲を包む土煙。

爆音に周辺の家々の明かりが灯り、人々のザワメキ声が聞こえ始めた。

「ゲホツ…ゲホツ……一体……」

「すまない。話はまた今度にしよう」

土煙の中で、男がそう言う。理由はすぐに分かった。遠くの方から聞こえたサイレンの音で。

誰かが通報したのだろう。流石にこんな爆発音を起てたら通報されても仕方がない。だが、幾らなんでも早過ぎる。そう考えた時、突如土煙が風で乱れ、目の前に先程の女性が現れ、額の目がこちらを向く。遅れて、銃口がこちらに向き、

「危ない！」

男の声に遅れ、女性の指が引き金を引くと、同時に体が真後ろへと引かれた。

「ぐっ！」

思わず声を漏らすほどの衝撃が目の前を通り過ぎ、前髪が激しく揺れる。バランスを崩した後方へと倒れると、女が小さく舌打ちした

のが聞こえた。それにやや遅れ、風を切る音が耳に届き、赤い光が周囲を包んだ。

「さあ、ここを離れるぞ！」

男がそう叫び、腕を引いた。すぐに立ち上がり、走り出す。

「くそがつ！ 逃がすか！」

女性の怒声が響き、間髪居れず銃声が轟く。衝撃が土煙を巻き上げる。だが、男は冷静に僕の背中を押すと、

「先に行け」

「エッ？」

「俺は後処理をしてくる。あのまま暴れられても困る」

男がそう言うと反転して、土煙の中へと飛び込む。暫く走り足を止めると、辺りが随分と静まり返っているのに気付いた。先程まで鳴り響いていたサイレンはどうしたのか、と振り返ると、突然風が吹き抜ける。頬を撫で、髪を撫で、服をはためかせた。やがて風は収まり、人の気配が一つ残された。

ゆっくりと瞼を開くと、そこに若い男が立っていた。黒のスーツに身を纏い、穏やかな表情でこちらを見ている。一見、何処にでもいるサラリーマンの様に見えるが、肌に感じる異様な感覚に、コイツが並の人間ではない事に気付いた。

すぐにキルゲルを具現化しようとしたが、自分でキルゲルを具現化した事が無い事を思い出した。こう言う状況なら、真っ先に出てくるはずのキルゲルも、何故だか大人しい。

コツツと、革靴が地面を叩き、男が一步近付いた。街灯で僅かに照らされた顔は、何処にでもいる様は平凡な顔立ち。髪は金髪混じ

りの黒髪で、染めたのが落ちてきた様な感じだった。
静寂の中で数十秒時が過ぎ、男がニコツと笑みをこちらへと見せた。

「君は、桜嵐晃君だよな？」

「……誰、ですか？ 僕は、あなたの事を知りませんが？」

警戒すると、男は頭を僅かに右に傾け、

「あれ？ 警戒してる？ 安心していいよ？ 俺は組織の人間だから、君の敵じゃない」

「……………」

押し黙る。

そして、考え、静かに口を開く。

「組織の所属は何処か教えてくださいか？」

所属など全く知らないが、組織のメンバーを疑っていると悟られない様にそう質問した。

その質問に対し、男は疑う事無くもう一度笑みを浮かべ、

「俺の所属は中央支部第一班特殊討伐部隊……って言っても、君には分からないかな？ 一応、その隊長で、名は……雷天」

（ ……！？ この感じ！ ）

突如、胸の奥でキルゲルがざわめき、同時に雷天の体から異様な程の重圧が放たれる。思わずすくんでしまう程のその迫力に、キルゲルが胸の奥で声を荒げる。

(逃げる！ コイツはヤバイ。兎に角逃げろ！ 今の我等でどうにか出来る奴じゃない！)

キルゲルにしては弱気の発言だが、僕もその考えには賛成だったが、足が動かない。地面に固定された様に全くその場から動く事が出来なかった。

その様子を見て、微笑み歩き出した雷天は街灯が照らす中心で足を止めると、

「期待はずれだよ。まさか、この程度で逃げ出そうとするなんて？ 先輩は傷を負っても尚戦い続けたって言うのに……。本当に先輩に鍛えられてるの？ てつきりもつと凄いかと思ってたけど……。こんな腰抜けだったなんて？」

奴が何を言ってるのか、理解出来なかった。先輩とは誰の事なのか、鍛えられてるとはどういう事なのか、色々と疑問が生まれた中で、何故か水守先生の顔が脳裏に浮かび消えた。

ドクツと、胸の奥で何かが脈打ち、不意にあの時の光景がフラッシュバックされる。そう、あの日、あの女性をこの手で。そして、その時、あの場所に、

「キサマアアアアアッ！ あの人に何をしたアアアッ！」

気付けば喉の奥から吐き出された怒声。

思い返される雪国さんの鳴き声。そして、妙な胸騒ぎの予感。全ては繋がる。この男の出現と、言動により。

それでも、尚、雷天は笑みを絶やさず、その手に一本の剣を具現化する。

「ふふふつ……見覚えあるだろ？ この剣。お前とやりあったんだ

からさ。あと、この血……誰の血だと思う？ お前の師匠の
「キルゲエエエル！」

雷天の言葉を遮る様に叫ぶ。

信じたくなかった。知りたくなかった。まだ、聞いてない事も沢
山あった。

なのに、あの人が、こんな奴に。
ゆっくりと柄から形成されるキルゲル。そのキルゲルは言った。

『我が今、この様な武器の形をしているのも、貴様の想い、願いが
具象化したものだ』

と。

そして、今、僕の想いを受けて、キルゲルは形を変えた。漆黒の
闇を纏う大きく鋭い刃へと。重量は無く、極限まで薄く研ぎ澄まさ
れた刃が、暗闇へと姿を隠す。

何を想い、何を願ったのか覚えていない。ただ、奴が憎かった。
奴を殺したかった。そう願ったのかもわからない。

奥歯を噛み締め、奴を見据える。キルゲルを握った右手が震え、
冷たい風が頬を撫でた。刹那、体が自然と動き出す。何かに導かれ
る様に、脚が軽く大地を蹴った。動き出しの瞬間、僅かに驚いた表
情を見せる。

視野がやけに広く感じ、周りの全てが止まっている様に見えた。
奴の驚いた表情が変わり行く様もよく分かり、奴の間合いに入らず
勢いを殺し飛び退く。遅れて雷天が剣を振り抜き、飛び退いた僕の
顔を驚いた表情で見ている。

戦い慣れておらず、ましてや頭に血の昇った状態の僕が、こんな
行動をするなんて予期していなかったのだろう。

剣を振り抜き無防備になった奴の間合いへとすぐさま飛び込む。
しかし、雷天も反撃に移ろうと体の重心を僅かに動かしたのが分か

った。だが、この距離ならこちらの方が早いと、握っていた剣で下から一気に切り上げる。

風を切る様な柔らかな手応え、遅れて切っ先を伝う鮮血。苦痛に歪んだ男の顔をしっかりと見届け、その場を離れた。

「くっ！ 貴様……」

距離を取ると、雷天がそう漏らす。

黒のスーツは右肩を裂かれ、血に滲む人肌があらわとなった。苦痛に表情を歪め、右手に握った剣を左手へと持ち替える。

その光景を眺めながら、一步步を進め、

「あなたは奪った。大切な人を だから、僕は、あなたを殺す」
「大切な人？ ふふっ……フハハハツ！ 貴様も同じだろ？ あの日、あの女を刺したのは、お前だ。人の命を奪ったのはお互い様だ」

「……………」

雷天の言葉に黙り込む。確かに僕はあの人を刺した。忘れていたが、今はその感触を思い出した。だからこそ、僕は。

「お前を殺せる。この手が既に血で染まっているなら、もう迷う必要も無い」

右手の剣を構え、更に一步步進む。奴の顔が恐怖に怯える。だが、すぐにそれが芝居だと分かった。背後に迫る複数の影に気付いたからだ。

感覚が研ぎ澄まされると、こんな事まで分かっってしまうのかと、感心してしまう。

雷天は相変わらず見え透いた芝居を続けており、僕もその芝居に

乗っかり、ゆっくりともう一步足を踏み込むと同時に、素早く体を反転した。だが、そこには何も存在しておらず、背後で不適な笑いと何か弾ける音が聞こえ、目の前が真っ暗になった。

第二十三話 日常

眩しい光が瞼の合間から差し込む。

体を包み込む、暖かな感触。

嗅ぎ慣れた朝の香りが漂い、ゆっくりと瞼を開いた。

「あ、晃！」

「お、お兄様！」

聞きなれた二つの声が重なって聞こえ、見慣れた二つの顔が視界へと映った。

「美空……優海……って事は、家か……」

ボンヤリとする頭で考え、そう口にするると、美空が腕を組み、

「当たり前だろ！ 二日前に、道路で倒れてんのを、近所のおっちゃんが届けてくれたんだぞ！」

「そうか……。後で、お礼言わなきゃな……」

何があつたのかを少しづつ思い出しながら、ただ漠然と返事をする。それでも、笑顔は絶やさず、優しく二人の妹の頭を撫でた。美空の黒髪が、優海の茶色がかった黒髪が、指の合間をすり抜ける。

恥ずかしそうに赤面する優海に、全く嬉しくないと言わんばかりの美空。二人の対照的な態度に、ついいつもの日常だと、安心してしまったが、すぐ脳裏にあの時の光景が蘇った。あの夜の光景が。

「……大丈夫か？ 晃？」
「まだ、何処か、痛むんですか？」

つい、その感情を表情に出してしまったのだろう、美空と優海が心配そうな表情で顔を覗き込んでいた。

咄嗟にニコツと笑みを浮かべると、美空は小さくため息を吐く。

「本調子じゃないなら、今日まで休んでた方がいいよ？」

「そうだな……それじゃあ、今日まで休むよ……」

「あんまり、無理はなさないでくださいね？」

優海が右手をギュツと握り締め、潤んだ瞳でこちらを見据える。

その目を見据え、「大丈夫だよ」と呟き、微笑む。しかし、優海は心配そうな表情をしたままだった。

「優海。そろそろ、行かないと遅刻するよ。それに、晃ももう少し寝かせておいてやれよ。まだ、色々整理したいだろうし……」

いつも元気な美空が、静かな口調でそう言った。色々知ってしまったのだろう。あの日、学校で起こった事を。だから、優海もこんなに心配そうな表情をしているのだろう。

「ほら。行くぞ」

「わ、分かってるけど……」

「いいから！ 行くよー！」

強引に優海の手を引き、部屋を出て行った。美空も色々知って、気を使ってくれたのだろう。ああ言う所を見ると、やっぱり優海よりもお姉さんなんだと、感じてしまう。

一人部屋に残された。静けさだけが漂い、窓から差し込む日差し

がベッドを照らす。

一人になって、改めて思う。失ったモノの大きさを　自分の無力さを　。

気付けば涙が頬を伝っていた。ようやく実感した。もう水守先生が居なくなつたと言う事に　。

泣くだけ泣き、僕はまた眠りに就いた。相当、疲労が溜まっていたのだろう。目が覚めた時にはお昼を過ぎていた。

「ふああああ……お腹空いた……」

顔を洗い、食べ物を探しにキッチンへと移動した。父も母もこの時間は仕事に出ている為、家の中は静かだった。冷蔵庫に手を掛け、ふと張り紙がしてあるのに気付いた。黒のペンで殴り書きされた様に『お昼はレンジで温める事!』と美空の字で書かれていた。

相変わらずの美空の字に、思わず笑ってしまった。

冷蔵庫に入っていた美空の手作りの野菜炒めをとりあえずレンジで温め、その合間にテレビを点けた。

あれから二日　流石に、もうニュースである事件は取り上げられていない様だった。また、組織の力で隠ぺいしたのだろう。

静かにテレビを眺めていると、突然呼び鈴が鳴らされた。

「ソツ?　こんな時間に……セールスかな?」

時計を見て、ボソツと呟く。平日のこんな時間に尋ねてくるなんて、セールスマン以外の何者でも無いだろう。そう思い、居留守を使う事にしたが、呼び鈴が連打された。

「だーっ!　セールスはお断りです!」

玄関を開けると同時にそう叫ぶ。だが、その視界に一人の女の子

の姿が移り、

「出んのが遅い！」

女の子が持ってたカバンを顔面へとぶつけた。

「うおっ！ な、何し」

「あんた、思いつきり、居留守使おうとしたでしょ！ 人が、見舞いに来て上げたのに！」

聞き覚えのある声に、鼻を押さえてよくその女の子の顔を見据え、

「よ、吉井さん！ な、な、何で家に？ って、学校は、どうした？ それに、その髪」

そこまで言った所で言葉を呑んだ。その瞬間、もう一度カバンが顔を殴打した。

「イダッ！ ちょ、な、何するんだ！ 痛いだろ！」

「うっさい！ 何深刻そうな顔してんの！ これは、あれよ、そう。気分転換で切ったのよ！ 悪い！」

怒鳴る吉井さん。流石にそれは強引過ぎるんじゃない、と思っただが口にはしなかった。

吉井さんも僕の事を心配していると、思ったからだ。暫く沈黙が続く、吉井さんが俯く。流石に気まづくなり、

「あっ、よかつたら、お昼食べてく？」

「……晃が、どうしてもって言うなら」

頬を僅かに赤く染める吉井さんを、家の中へと招き入れた。

それから、美空が用意してくれていた昼食をレンジで温める。ダイニングで立ち尽くす吉井さん。今思えば、吉井さんが家に入るの久しぶりの気がする。幼い頃は、家も近所だったし、よく家に遊びに来ていたが、いつからかそれすらなくなり、今では苗字で呼び合う様に。

と、そこで不意に吉井さんの言葉を思い出し、居間に移動した吉井さんの方へ目を向けた。すると、吉井さんと視線がぶつかり、

「な、何よ！ ひ、人の顔ジロジロ見ないですよ！」

「あつ、いや……ごめん。ちょっと、吉井さんが僕の事を名前で呼んでたから、ちょっとビックリして……」

そう聞くと、吉井さんは僅かに頬を赤く染め、

「い、いいじゃない！ お、幼馴染なんだから」

「いや、そうだけど……なんでまた、急に？」

そう尋ねると、吉井さんは口籠り、俯いた。その様子を窺ってる、と、ピーツとレンジの音が響いた。

何と無く助かった気がする。別に理由なんてどうでも良かった。

また、吉井さんが名前と呼んでくれた事が嬉しかったからだ。あれだけの事があつたから、今まで以上に距離を置かれるんじゃないかと、少しだけ怖かった。

居間へと移動し、吉井さんと静かに昼食を食べ始める。

そんな時、不意に考える。いつ頃から、彼女を苗字で呼ぶようになったのかと。ボンヤリと考えていると、吉井さんが顔を覗き込み、

「大丈夫？ あなた、まだ本調子じゃないの？」

と、心配そうに声を掛けてきた。苦笑すると、やや呆れた様にため息を吐き、

「はあ……調子悪いなら、もう少し寝てたら？」

「と、言われてもだな……。吉井さんの方が家に来たんだけど……」

「何？ 文句があるの？ と、言うか……美空ちゃんまた腕上がった？」

野菜炒めを口に運びながら、吉井さんがそう呟いた。

僕もその野菜炒めを口に運び、

「んぐ、そうか？ いつもと変わらないと思うけど？」

「毎日、食べてるから分からないのよ。あんたさ、美空ちゃんの料理褒めた事無いでしょ？」

「うーん……。そう言えば、そうかな？ でも、美味しいのは分かってるから……」

そう言うと、吉井さんはより一層深いため息を漏らし、

「だから、ダメなのよ。美空ちゃんも可哀想ね」

「可哀想って言われてもだな……」

「それで、優海ちゃんは？ 相変わらず？」

「まあ、優海も、美空と変わらずって所かな？」

多少考えながらも、そう返事をする。吉井さんは野菜炒めをもう一度口に運ぶ。僕もそれに続き、野菜炒めを口へと運んだ。すると、吉井さんは箸を啜えたまま、

「そう言えば、水守先生。辞めたらしいわよ」

その言葉で手が止まった。だが、吉井さんはその事に気付かず言葉が続ける。

「水守先生、面白い先生だったのに……。結局物理の熊谷先生が、ウチのクラスの担任だよ」

「そ、そう……」

動揺を悟られない様に、怒りを、悲しみを押し殺し、そう返事を返す。手が震え、噛み締めた奥歯がギツと音をたてる。蘇るあの夜の光景。何故か、あの男の笑みが浮かぶ。

「クッ！」

「ちょ、晃？ 大丈夫？」

吉井さんの心配そうな声で、ようやく我に返る。が、心が乱され、自然に笑う事も出来なかった。だが、吉井さんはいつもの様に微笑み、

「あんまり、本調子じゃなさそうね？ 今日、もう帰るね。明日、学校で」

「い、ごめん」

「いって。私も、急に来てごめん」

吉井さんがそう言って立ち上がり、僕は何も言わずただ俯いていた。

第二十四話 噂

「テメエ！」

怒声と共に博人が左頬を殴った。机やイスを巻き込み派手に倒れると、周囲の生徒達が悲鳴の様な声を上げた。

突然だった。博人が教室に入るなり、僕の顔を見て目の色を変え、飛びかかってきたのは。

口の中が切れ、血の味が口に広がり、頬がズキズキと痛んだ。

倒れた机から散乱した教科書を踏み、こちらに歩み寄る博人だが、それを信二が制止する。

「止める！ 加賀！」

「うるせえ！ 手を離せ！」

博人を後ろから抑える信二だが、博人も両肩を揺らし暴れていた。幾ら信二でも力で博人に勝てるわけなく、腕を振りほどかれ、後ろに並ぶ机を巻き込んで倒れた。鈍い音が聞こえ、その直後に女子生徒の悲鳴が上がった。

それから遅れて、他の生徒達も騒ぎ出し、廊下には他のクラスの生徒が集まっているのが見えた。その騒動に、先生達も気付いたのか、廊下の方から声が聞こえる。

「ちょ、ちょっと！ 退いて退いて！ ってか、退きなさい！」

聞き覚えの無い女性の声。多分、上級生の担当の先生なのだろう。その声に、扉の傍に居た女子生徒が慌てた様に右手を上げながら廊下へ身乗り出すと、

「せ、先生！ こ、コッチです！ お、小野山君が」
「お、小野山君がどうかしたの！」

廊下から聞こえる声に、不意に信二の方へと目を向ける。倒れた机の前で蹲る信二は右手で頭を押さえていた。そして、その指の間から赤い液体が流れているのが、分かった。

と、そこへ、野次馬を掻き分け、見慣れない女性が慌ただしく教室に入ると、

「小野山君！ だ、大丈夫？ て、言うか、この騒ぎはなんなの！
一体、何が」

「加賀君が、突然、桜嵐君に殴りかかって」

一人の生徒がそう述べると、他の生徒達も次々と言葉を発する。
生徒一人一人の声に頷きながら、先生はゆっくりと博人の方へと足を進めると、平手で博人の顔を叩いた。一瞬にして教室中が静まり返った。

沈黙が数秒続き、先生が静かに口を開く。

「加賀君。今の痛み、分かるよね？ でも、この数倍、私は心が痛い。暴力は、何も生まないよ。ただ、お互いに痛いだけだよ」

先生の言葉に唇を噛み締める博人。その博人の顔を真っ直ぐに見つめる先生。

静まり返った教室。相変わらず野次馬は増えるが、それでも沈黙は守られていた。その沈黙を破ったのは、廊下から聞こえてきた野太い男性教師の声だった。

「お前等！ 自分の教室に戻れ！」

その野太い声で、廊下に集まっていた生徒達は逃げる様にその場を立ち去っていく。

野次馬が去り静けさの漂う教室に、ジャージ姿の男性教師が入ってきた。彼は、頭から血を流す信二を見た後に、博人の方へと目を向け、

「加賀！ やつぱり、お前か！ お前の様な不良は、いつかこう言う事件を起こすと、思ってたんだ！」

その言葉に、女性教師が振り返り、

「篠崎先生！ 何て言い方するんですか！ 人は過ちを犯しますが、それを許す事が出来るのも、また人だけなんですよ！」

「あんたは、教育実習生だろ！ 引ッ込んでろ！」

「な、きよ、教育実習生でも、今はここの教師です！」

教育実習生の女性が、篠崎先生に食ってかかる。

「大体、教師が生徒をそんな風に見るって言うのは、どうかと思っ
んですが！」

「うるさい！ そもそも、コイツは」

「コイツ、コイツと、言いますが、彼には、加賀博人と言う名前が
あるんですよ！」

更にヒートアップする二人を見てみると、博人が無言で歩き出す。それに気付いた篠崎先生は、博人の肩を掴んだ。その瞬間、博人が篠崎先生の顔を睨み、その手を右手で払う。

「触るな。殺すぞ」

「なっ！ 加賀！ 貴様！ それが、教師に対する口の聞き方か！」

篠崎先生が、拳を握ると、

「殴るのか？ お前から手を出すなら、俺も正当防衛で、お前を殴れる」

「な、なんだと！ 貴様！」

篠崎先生が、博人の胸倉を掴むと、拳を振り下ろす。だが、その拳は受け止められた。教育実習生の女性の手によって。

「もういいでしょ？ こう言う事をして、何の意味も無いですよ。加賀君も！ 拳を下ろしなさい！」

教育実習生の女性がそう言うと、博人は篠崎先生の鼻先で寸止めた右拳を下ろし、胸倉を掴む手を払い除け、

「残念。あと少しで、あなたの顔を殴れたのに」

と言い教室を出て行った。

すれ違う瞬間に見た博人の目は、中学時の荒れてた時の目だった。博人が教室を出て行くと、静まり返っていた生徒達が突然にざわめく。その光景に篠崎先生が怒鳴る。

「静かにしろ！ もうホームルームが始まるだ！ 火野、お前も職員室に戻れ」

「いえ！ 私は、彼と小野山君に話があるので、生徒指導室に行かせて貰います！」

火野と呼ばれた教育実習生が、僕の手首を掴み信二の方へと目を向け、

「それじゃあ、小野山君は、保健室によってから、ちゃんと生徒指導室に来るように!」

「ちょ、火野! お前、勝手に」

「分かりました。じゃあ」

信二が周囲を見回し、不意に廊下の方へと目を向けると、

「吉井さん。保健室まで付き添ってくれないか?」

「えっ? わ、私……」

「それじゃあ、小野山君の事は、吉井さんに任せるわね? さあ、君は私と生徒指導室に」

長い黒髪を揺らし、腕を引く火野先生に、篠崎先生がもう一度怒鳴る。

「待て! オイ! 火野!」

だが、火野先生はその言葉を無視して、強引に腕を引き教室を出た。その後も、教室から篠崎先生の怒声が響いたが、それもやがて聞こえなくなった。

それから程なくして、生徒指導室へと押し込められ、まるで取り調べの様にライトだけが置かれた机の前に座らされていた。

色んな資料の並んだ棚に囲まれたこの部屋に入るのは、初めてだった為何だか新鮮な気分だ。静かに流れる時間の中、向かいに座った火野先生は、腕を組み綺麗な顔の眉間にシワを寄せ、

「えっと……君、名前は?」

「桜嵐晃……です」

「桜嵐くんね。何だか、珍しい苗字ね?」

静かにそう言う。それから、机に両肘を着き手を組むと、優しく微笑む。

「私は、火野恵。君が休んでる間に教育実習生として、この学校に来たの。一応、卒業生だから、あなたの先輩になるかな？」

笑顔で淡々と話す火野先生は、腕を組み背凭れにもたれると、天井を見上げた。

何かを考えているのか、暫し沈黙が続き、ゆっくりとこちらへと顔を向ける。眉間にシワを寄せ、ジツと顔を見つめる。僕の顔に何か付いてるのかと、右手で顔を触ると、火野先生は静かに笑い、

「大丈夫。君の顔には何も付いてないよ」

なら、どうして顔を見つめるのかと、問おうとしたが、彼女は真っ直ぐに僕の目を見据え、

「君の噂は色々聞いてたんだけど……」

「噂……ですか？」

「そう。でも、想像してたのと印象が違ってビックリしたよ」

噂の事は大体察しが着いた。先日起きた、あの事件の事だろう。しかし、この人は一体どんな想像をしていたんだろう。そんな事を考えていると、火野先生が嬉しそうに笑い、

「でも、安心したよ。君が、いい子そうで……それでなんだけど……」

不意に表情が曇り、視線を右斜め下へと逸らし、

「あ、あの、その……雪国さんって言う人は、その……怖い人なのかな？」

「はい？」

「えっとね、その……桜嵐君と同じ日から学校に来てないんだけど、彼女の噂も聞いているから、どんな人なのかなあ、って……」

不安そうにキョロキョロと黒目を動かす火野先生に、優しく微笑む。

「大丈夫だと思いますよ。彼女は」

「そっか。噂じゃ、拳銃をバンバン発砲するって聞いてたから、どんな娘だろうって、思ってたんだあ。君についても、刃物を振り回すって聞いてたから、本当、ビツクリしたんだから」

正しいと言えば正しいが、何かゴツソリと抜け落ちた噂話。

確かに剣を振り回した。確かに銃を撃ってた。だが、その理由がちゃんと説明されていない。噂話ではありがちだが、ちゃんと説明はして欲しいものだ。

「あははは」と、暫し和やかに笑い、後、困った表情を見せた火野先生は、静かに告げる。

「今日の放課後、一緒に雪国さんの家に行ってくれないかな？」
と。

第二十五話 愛(まな)の部屋

放課後。

火野先生に連れられ、雪国さんの部屋の前まで来ていた。深呼吸し、呼び鈴を押す。ドアの向うからチャイムの音が聞こえるが、それっきりだった。数十秒の時が過ぎ、

「あれ？ 留守？」

「違うと思いますよ」

火野先生の言葉にすぐ返答すると、「あはは、そうだよ」と静かに述べ、もう一度呼び鈴を鳴らす。またチャイムの音だけが中から響く。

数十秒待ち、火野先生がコツチを振り向く。

「また明日にしようか？」

苦笑する火野先生の顔に、笑みを返すと、ドアの向うで鍵の開く音が聞こえた。視線をドアの方へと向けると、静かにドアが開く。

「誰……」

掠れた雪国さんの声がドアの隙間から聞こえた。あれから、大分泣いたんだと思う。喉がかれるまで。師弟の間柄とは言え、雪国さんにとっては大切な人が亡くなったのだから、当然と言えば当然だろう。僕には分からない程のショックを受け、僕には分からない程の悲しさを感じたと思う。だから、ここには来たくなかった。

少しだけ開かれたドアの隙間を覗き込む火野先生は、ドアノブを掴むとニコツと笑みを浮かべる。

「雪国愛ちゃんだよな？ 私、教育実習生で、今、君のクラスの担任代理をしてる火野恵って言うんだけど、話したいんだけど？」

「話し？ すいません。私に話は」

「雪国さん。僕も少し話したいんだけど？」

「……………分かった。ちょっと待ってて」

暫く間が空いて、ドアがゆっくりと閉まった。

部屋の中から全く音はせず、数分が過ぎた。着替えにしては時間が掛かり、部屋を片付けてるにしては静まり返っている。

「……………遅いね？ もしかして、忘れられたのかな？」

不意に火野先生が呟く。確かに遅い。急に不安になる。もしかしたら、倒れているのかもしれない、などと思うと、思わずドアノブを握った。

「うわっ！ ちょ、晃君！」

「緊急事態だから」

ドアノブを捻り、ドアを開くと、その向うにタオルで髪を拭く、下着姿の雪国さんが立っていた。どうやら、雪国さんはシャワーを浴びていたようだ。

上下共に真っ白のフリルの付いた可愛らしい下着。鬼獣と戦っている時の荒々しい雪国さんから想像できない下着姿だった。

この状況に思わず、「へっ」と、声をあげる。後ろでは火野先生の「あちゃー」と言う声が聞こえ、目の前では雪国さんが握り締めた拳を震わせる。

「晃……………どう言っつもりなのかしら？」

「い、いや……お、遅いから、何かあったのかと」「殺す！ 今すぐ、この場で！」

叫ぶと同時に右手に現れた蒼い銃。そして、幼い子供の様な声が、『何？ 鬼獣？』と眠そうに言ったのが聞こえたが、その直後に鳴り響いた銃声で、その声は掻き消され、同時に腹部に衝撃が走った。

「うぐっ！」

「わわっ！ ゆ、雪国さん！ も、モデルガンでも、そんな人に向けて撃つちゃダメだよ！」

慌てて火野先生がそう叫ぶが、雪国さんは冷酷な目で僕を見据え、構わず銃を連射する。銃声が重なり、衝撃が全身を襲う。凍る様に冷たい衝撃を全身に浴びせ、雪国さんはドアを乱暴に閉めた。おまけに鍵まで掛けられた。

そのまま仰向けに倒れていると、火野先生が心配そうに顔を覗き込む。

「だ、大丈夫？」

「はい……大丈夫です」

苦笑しながらそう答えると、火野先生も苦笑した。

それから数分後、ドアの鍵が開けられ、再びドアの向うから雪国さんが顔を出した。僅かに頬が赤く見えるが、ジッと顔を見ていると、冷やかな目で睨まれた。

「で、何の用？ まさか、さっきのアレが、あんたの用？」

冷やかで怒りのこもった声。まださっきの事を怒っている様だ。流石に下着姿を見たわけだから、怒るのも分かるが、シャワーを浴

びるなら、浴びるで一言言っておいて欲しい。心配したコッチが恥ずかしくなる。

言葉につまっていると、その間に火野先生が入り、

「ご、ごめんね。私が遅いつて言ったから、晃君が心配して」
「……そうですか。……それじゃあ、とりあえず中に入って」

火野先生を部屋へと招き入れると、僕の方をジト目で見据える。

「あんたは？ 入るの？ 入らないの？」

「は、入るよ。話があるつて言っただろ」

「そう。じゃあ、早く入つて」

やや刺々しい言葉遣いで、部屋へと招く。

意外と元気そうに見えるが、きっと空元気なのだろう。僕と火野先生の手前、無理矢理そう見せているんだと思う。やっぱり、雪国さんは強い人なんだと、実感した。

部屋は相変わらず綺麗に整っているが、何故だかここ数日食器を使った形跡が無い。食事は全くとってないんだろう。よくよく見れば、少しふら付いている。

玄関に立ち尽くし部屋を見回していると、居間から火野先生が顔を出す。

「何してるの？ 早く上がっておいでよ？ って、言うか、女の子の部屋をジロジロ見回さない！ 変態さんか、あんたは！」

「いや、あの……すいません」

確かに、女の子の部屋を見回すのは良くないと思い謝ると、火野先生は笑みを浮かべ手招きする。小さくため息を漏らし、靴を脱ぎ部屋に上がると、冷蔵庫の中を見据えていた雪国さんがコッチに視

線を向けた。

眉間に寄ったシワから察するに、冷蔵庫の中には何も無いのだろう。視線が数秒の間合つと、雪国さんは苦笑し、静かに冷蔵庫を閉めた。

「すみません。今、飲み物切らしてるんで、ちよつと買つてきます」
「えっ！ い、いいよ！ 別に、そんな気を使わないで？ すぐ帰るから」

慌てた様子でキッチンへと現れた火野先生が、雪国さんの前に立つ。火野先生に立ちほだかれ、困った様な表情を見せる雪国さんがコツチへと助けを求める様な目を向けた。暫く様子を見たかったが、雪国さんがコツチを睨んでいたのので、渋々火野先生を止めに入る事にした。

「あーあ。火野先生。雪国さんもああ言ってるんだし、お言葉に甘え」

「それなら、晃君が行きなさい！」

「えっ！」

「そうよ。うんうん。最初っから晃君に行かせればよかつたんだ」

「で、でも、そんな、桜嵐くんに悪いんで、私が」

火野先生の提案に、雪国さんが焦り反論するが、有無を言わず僕は外へと追い出された。暫しドアの前で呆然としてみると、中から雪国さんの慌てた様な声と、火野先生の明るい笑い声が聞こえた。お金を貰っていない時点で、僕の自腹は確定し、ポケットから財布を取り出し有り金を確認する。

「はあ……ギリギリかな……」

ガツクリと肩を落とし、渋々と買出しに行く事にした。

しかし、今考えてみれば、あの状態の雪国さんを買出しに行かせるのは、確かにまずい。火野先生もその事に気付いていて、僕に買出しを命じたのだろう。

もう一度深いため息を漏らし、歩き出す。確か、この近くにコンビニがあったはずだ。とりあえず、そのコンビニを目指す事にした。暫く歩くと、ガラの悪い三人組が、眼鏡を掛けた内気そうな学生に絡んでいるのが視界に入った。この辺では見かけない制服を着た学生に、長髪の男が掴みかかる。

「おい！ 金、出せって言ってるんだろ！」

「えっ、いや、お金は持ってなくて……」

「はあ？ じゃあ、財布だせよ！」

そう言われ、財布を出すと、それを鼻にピアスを付けた男にもぎ取られ、

「んだよ！ マジで、金持ってねえんじゃねえかよ！」

「ふざけんじゃねえよ！」

金髪の男が学生を殴った。学生はヨロケ堀に背中をぶつけ、その場に座り込む。三人組はそんな学生を更に罵倒し奪った財布を叩き付けその場を去っていく。

今時、あんなのがいるんだなと、思いながら学生の方へと足を進め、

「大丈夫？ キミ」

手を差し出すと、学生は僕の顔を見ると、

「あつ、だ、大丈夫です。どうも……」

と、差し出した手を取り立ち上がる。その時、手首に輝くブレスレットが見えたが、学生はそれをすぐに隠し財布を拾い上げた。

「それじゃあ、僕、他に用があるんで」

丁寧にお辞儀をし、学生は何事も無かった様にその場を去って行った。そんな彼の後姿を見ると、不意に背後に冷たい視線を感じ振り返る。だが、そこには誰も居らず、静かに風だけが流れた。

第二十六話 大地と優花

雪国さんの家を出て数十分。

ようやくコンビニで、飲み物を購入し帰路へついた。

特に急ぐ必要も無いだろうと、いつもよりスローペースで歩みを進めていると、見慣れた後姿が視界に入った。

「おーい。吉井さん！」

声を掛けると、吉井さんは両肩をビクツとさせ、ゆっくりと振り向いた。

「や、やあ。晁。き、奇遇だね？」

「……何？ 凄く不自然だけど？」

あまりの不自然さに、思わずそう口にする、吉井さんは顔を僅かに赤く染め、

「う、うるさい！ べ、べ、別にあんたを待ってたわけじゃないのよ！ た、たまたま、この辺を通り掛かったから」

赤面しながらそう言う吉井さん。たまたまこの辺を通り掛かったと、言うが、吉井さんの家はこの道とは全く逆のはずだ。あえて、その事には触れず、笑みを返すと、吉井さんは視線を逸らした。

「そ、そんな事より、雪国さんの所に行ってたんじゃないの？」

「ちよつと、買出しを頼まれて」

「買出し？」

不思議そうに首を傾げる。

そんな吉井さんに、持っていたビニール袋を見せ、苦笑する。

「まあ、色々あってね」

頬を搔くと、「ふーん」と軽く相槌を打つ。

「それで、今から戻るの？」

「そうだけど？」

「そ、そうなんだ……」

「吉井さん？　どうかした？」

珍しく歯切れの悪い吉井さんを心配して、そう言葉を掛けると、「何でもないよ」と僅かに引き攣った笑みを見せた。それが、余計に不安だったが、それ以上は何も聞かなかった。あんまり心配すると、かえって相手に迷惑を掛ける場合もあるからだ。

「それじゃあ、僕、そろそろ行くよ。雪国さんと火野先生だけだと心配だし……」

「そ、そうだね。そ、それじゃあ、私もそろそろ帰るね。また明日」

やや早口でそう述べる。何か焦っている様にも見えだが、何かを質問する前に、吉井さんはその場を走り去った。その後ろ姿を見据え、首を傾げると、不意に背後に気配を感じ振り返る。だが、そこには誰も折らず、たまたま通り掛かった主婦のオバサンが、不思議そうな顔をしながら足早に僕の横とを通り抜けて行った。

「おかしいなあ……。確かに、何かの気配を感じただけど……。キルゲル。お前は、何も感じなかったか？」

キルゲルにそう声を掛けた。だが、キルゲルからの返答は無く、更に通り掛かった女子高生二人組みが、怪訝そうな表情でコツチを見ているのが分かった。流石に一人でボソボソ言っていたら、あんな顔をされて当然だ。恥ずかしくなり、その場を足早に去った。

「まったく、キルゲル！ お前の所為で、変な目で見られたじゃないか！」

早足で歩きながら、キルゲルに文句を言うが、やはり返答はなかった。

考えてみれば、あの日あの男と戦って以来、キルゲルの声を聞いていない。一体、どうしたんだろう。多少心配だが、コレが普通なんだと自分に言い聞かせる事にした。

暫く歩いた後、ゆっくりと足を止める。視線の先には、一人の少年が立っていた。眼鏡を掛けた真面目そうな少年。確か、コンビニに行く際に見かけた不良に絡まれていた少年だ。まるで僕を待っていた様に、そこにいた少年は掛けていた眼鏡を外し、右手で髪をクシヤクシヤにする。その際、手首に煌くブレスレットに目が行った。直感でそれがサポートアームズであると分かった。

思わず身構えると、彼は静かに右手を下ろし、

「俺はお前と戦う気は無ねえよ。ただ、話を聞きたい」

「話？ 一体、何の？」

「この辺で、人影とかけと言う鬼獣を見なかったか」

何処からとも無く、彼とは別の声が出た。低音の男らしい声。それが、彼の持つサポートアームズの声なのだろう。視線をブレスレットの方に向ける。ブレスレットに付いたオレンジの水晶が僅かに光り、またサポートアームズの声が聞こえた。

『で、見た事無いのか？』

「えっと……何で僕にそんな事を？」

「何でって、お前、ガーディアンじゃないのか？ サポートアームズを感じるって、グラットリバーが……」

彼が怪訝そうな目を自らの右手首のブレスレットへ向けると、水晶が光り、

『い、いや。確かにサポートアームズの気配を感じるんだよ！ んな、目で見ろな！』

「じゃあ、これはどう言う事だ？」

『俺に聞くな！』

二人で揉め始める。その姿を啞然としながら見ていると、

「何してるの？ 大地」

と、女性の声が聞こえた。綺麗な澄んだ声に振り返ると、腰まで届く長い黒髪を揺らす、凛とした女性。大人びて見える綺麗な顔立ちに、ミニスカートから伸びる細い足が妙にドキツとした。思わず見惚れてしまう程、スタイルも良く、視線をすぐに逸らしてしまった。

戸惑いうろたえていると、さっきまで話していた彼が、

「今、人影について聞いてたんだ。情報収集だよ」

思わず彼の方に顔を向けると、グラットリバーと呼ばれた彼のサポートアームズが『アレはコイツのパートナーだ』と軽く説明してくれた。その説明で、彼女も封術師かガーディアンのどちらかだと理解する。

「それで、情報は？」

「今ん所なし」

「そう……その顔は？」

「あはは……不良に絡まれて……」

「また？」

僕の存在など無い様に二人が話を進める。そんな二人の間にいるのも申し訳ないので、少々後ろに下がり壁に背を預けた。表情を一切変えない女性に対し、明るく楽しそうに会話する少年。全く正反対の二人だが、何故だか見ていると良いコンビの様に思えた。

二人の会話に入る事も出来ず、座り込んでしまつと、不意に彼の右手首のグラットリバーが声を掛ける。

『すまん。もう少し待つてくれ。いつもこんな感じなんだ』

「別にいいよ。僕も少し話したいし」

とりあえず笑顔を返してみるが、ふと思う。サポートアームズに目はあるのだろうか。キルゲルの場合一心同体の為、自分が目にしたモノをキルゲルも共有している。だが、彼のサポートアームズを見る限り、目の様なモノは無い。なのに、さっき彼が怪訝そうな顔をしたのをグラットリバーは分かっていた。不思議そうな顔をしていたのか、

『お前、何か失礼な事考えてないか？』

と、呆れた様な声で言葉を投げかけられた。そんなグラットリバーに「あはは」と笑い返すと、『笑って誤魔化すな』と突っ込まれた。キルゲルとは違うタイプのサポートアームズ。他のサポートアームズとこうしてゆっくりと話した事が無かった為、こうして話を

出来て嬉しかった。

「あなさ。サポートアームズって、皆こんな感じ？」

『……………どういう事だ？』

「いや。僕、こうして他のサポートアームズと話す事無かったから……………」

思わぬ答えに、戸惑いながらそう返答すると、

「皆が皆そうじゃないわ。サポートアームズも人と一緒に、様々な性格があるのよ」

と、女性の方が答えてくれた。女性の方に顔を向けると、女性は軽く頭を下げ、

「私は風見優花。彼は黒木大地よ」

風見さんに紹介され、大地の方へと目を向けると、大地も軽く頭を下げた。僕も立ち上がり、

「僕は桜嵐晃。よろしく」

と、自己紹介をして頭を下げた。

落ち着いた様子の風見さんは、僕の顔を見据えると、

「それで、あなたは人影を知らないのね？」

「え、ええ……………。そう言う名前に聞き覚えは無いよ」

「チツ……………確かにこの辺に逃げてきたはずなんだが……………」

舌打ちした大地は、渋い表情を見せた。その人影と言う鬼獣に、

一体何があると言っのたろうか。風見さんも今まで一切変えなかつた表情を僅かながら曇らせていた。

「あの……人影って、そんなに危険な奴なのか？」

「危険よ。その危険度は特Sクラスよ。放っておけば、数十万、数百万の人の命を奪う事も出来る奴だから……」

深刻そうに俯く。それ程の力を持つ鬼獣とは、一体どんな奴なんだろう。そう思った時、大地が腕を組みながら、

「奴は、人の心の闇に寄生する。心に闇の無い人間なんて、そうそう居るもんじゃない。だから、奴は何処でも生きていける。人間が居る限り……」

『しかも、奴が寄生した人はやがて心を失い、奴の従順な僕しもべと化す。最悪の鬼獣だよ』

「そ、それじゃあ、今も犠牲者が！」

大声を上げると、大地は両手で耳を塞ぎ、風見さんは迷惑そうに視線をこちらに向ける。

「大丈夫よ……。今は、その力を半分以上も失っている」

「前回、あと少しで封印出来るって所まで追い込んだんだが、邪魔が入って逃げられたんだよ」

「でも、寄生されたら……」

「暫くは寄生出来ないわ。まあ、それがあと何日かは分からないけど……」

歯切れが悪いのは、本人たちも今の状況に焦りを感じているからだろう。

二人は僕が人影の情報を持っていないと分かると、

「悪かったな。じゃあ、また何処かでな」
「あなたも頑張って」

と、言っつてその場を去つていった。結局、僕の聞きたかつた事は聞けなかつた。少し変わった二人だったけど、知り合せてよかつた気がする。自分がガーディアンとしてどうすればいいのか、分かつた気がした。

第二十七話 晃の心の闇

大分道草を食ったが、ようやく雪国さんの住むマンションの入り口まで辿り着いた。

火野先生と二人きりにして、大丈夫だっただろうか。心配になり、足早に部屋の前まで行くと、背後でコトツと何かの落ちる音がした。振り向くが、そこには何も無く、首を傾げる。

前を向き直り、ドアをノックすると、背後で殺気と濁った雑音の様な声が発せられた。

『強大な心の闇……貴様の闇を我が糧に』

「！」

声に振り返ると、漆黒の闇が突如として視界に広がり、それが全てを包み込む。ドアの開く音に、振り向く。闇に包まれるその合間に雪国さんと視線が合う。

「あき」

雪国さんが叫ぶ声が途切れ、全てが闇に包まれた。無明無音の闇の中にとらわれ、意識が奪われた。

闇の中で、どれ位意識を失っていたのか分からないが、目を覚ますと、そこに見知らぬ少女の姿があった。闇の中だと言うのに、妙に体が光っている様に見えるのは、彼女が真っ白なワンピースを着ているからだろうか。ボンヤリの少女を見ていると、少女がこちらに手招きした。

眩しい位の笑顔を向ける少女に、ゆっくりと歩み寄ると、何も言

わずスツと右手を差し出す。彼女に右手に手を添えると、彼女がその手を握り走り出す。

わけも分からず、手を引かれ走っていると、闇の中に一筋の光りが見えた。と、そこで彼女が足を止めると、ジツと僕の顔を見上げる。

「光と闇は対極。けれど、光も闇も一つでは存在できない」

少女が静かに言葉を告げる。言いたい事は何と無く分かった。光があるから闇が存在し、闇があるから光は輝ける。そう言う事なのだろう。しかし、それが一体、なんだと言うのだろうか。彼女の顔をジツと見てみると、彼女はニコツと笑みを浮かべ、

「対極だけれど、二つの存在は互いを強める。光は闇を濃くし、闇は光を眩くする」

「光があるから闇は更に濃くなり、闇があるから光は眩く輝く……
そう言う事？」

彼女にそう尋ねると、静かに頷く。

そして、僕の胸の位置を指差すと、

「あなたの心も同じ。光があれば、必ず闇がある。知らぬ間に、その闇は広がりやがて光を覆う。今のこの状況の様に」

「今の状況？」

思わず聞き返すと、彼女は頷く。輝く光が徐々に闇に覆われ、その明るさを弱めていた。

「今のあなたの心は、闇に飲み込まれている。小さな光明を見逃さないで」

「小さな光明……」

呟くと、彼女が笑顔で頷く。やがて、彼女の姿が薄れ、一つの声が聞こえた。聞き覚えのある声。

『……私の声が……。晃……。声が……』

雑音で聞き取り難いが、間違いなくキルゲルの声だった。何処から聞こえるのか、周囲を見回す。あるのは小さな光と闇だけ。だが、そこでおかしな点に気付いた。

キルゲルとは一心同体のはず。何故、遠くの方から声が聞こえるのかと。

「おい！ キルゲル！ どう言う事だ！」

叫び周囲を見回す。その声に、雑音混じりの声が、

『晃……。聞こえ……。お前……』

「な、何だ？ 良く聞こえない！」

キルゲルの声に聞き返す。だが、返って来る言葉は雑音でよく聞き取れなかった。

「……一体、どうなってるんだ？」

周囲を見回す。光が一層弱まり、更に周囲は暗い闇に包まれていた。

「光が、弱まってる。でも、何で……」

光に手を伸ばす。光は手の平へと落ちると、弱々しく輝く。そして、その光の向うから、キルゲルの声が聞こえてきた。

『晃。聞こえるか!』

今度はハツキリとキルゲルの声が聞こえ、

「ああ。聞こえる。一体、何が起こってる!」

と、聞き返す。

『晃! お前! 今、何処にいる!』

「何処つて? 闇の中?」

『くっ! そうか。なら、お前の意思ではないと言う事が。まあ、分かった事だが……』

「何の話だ?」

ブツブツと言うキルゲルにそう聞かすが、すぐに返答は無かった。暫く待つと、

『晃。お前、闇の中にいると言ったな』

「あ、ああ……それがどうしたんだ?」

『我を具現化しろ! 今すぐだ』

突然の言葉に、戸惑う。具現化しろと言われても、自分の意思でキルゲルを具現化した事など無い。もししていたとしても、それは無意識で行ったモノ。自分ではどうにも出来ない。考えていると、キルゲルの怒声が響く。

『早くしろ! 時間が無い!』

「は、早くしろって言われても、僕は自分の意思でお前を具現化した事無いんだよ！ どうすればいいんだ？」

『念じろ！ 我の力を求めろ。そして、全ての形を創造しろ』
「念じ、力を求めろ……」

頭の中でいつものキルゲルの形を創造。手の平の上に乗った光が眩く輝く。眩い光に目を伏せ、光が弱まるのを待つ。暫く瞼を開く事が出来ないでいると、

「つたく……どう言う事だ？」

と、鮮明なキルゲルの声に瞼を開くと、そこに一人の少年が座っていた。見たことの無いその少年をジッと見ていると、

「何だ？ お前が、我をこのような姿に具現化したんじゃないか」

「えっ！ じゃ、じゃあ、お前！ キルゲルか！」

「何だ？ 問題でもあるのか？」

不満そうな表情でこちらを睨むキルゲルに、引き攣った笑みを返す。まさか、こんな形で具現化するとは思わなかった。サポートアームズと言うのは、てっきり武器の形にしか変化できないと思っていたので、少し戸惑った。

だが、キルゲルは気にしていない様子で両手を握ったり開いたりする。その姿を見ていると、本当の人間の様に見えた。ジッとキルゲルを見ていると、キルゲルがコツチに目を向け、「何だ？」と睨みを利かせる。

「い、いや。サポートアームズって、人間にもなるんだなって、思ってたさあ」

苦笑混じりでそう言つと、キルゲルが不思議そうな表情を浮かべ、

「何を言ってるんだ？ サポートアームズは武器にしか変化しないに決まってるだろ？」

「……はあ？ じゃあ、何で、お前、人……」

当然と言わんばかりのキルゲルに半ば呆れ気味にそう問うと、小さくため息を漏らし、

「お前、気付いてないのか？」

「気付いてないって何に？」

「ここは、お前の心の中だ」

キルゲルの言葉に思わず「はあ？」と言つ声が出た。その声に不満そうな表情を浮かべるキルゲルは、

「今のお前の心は闇に覆われている。そう言う事だ」

「ちょ、ちょっと待て！ じゃあ、僕はどつなってるんだ？」

「ここが僕の心なら、今、僕の体はどうなってるのか。気になりそう問うと、キルゲルが眉間にシワを寄せ、

「お前は、闇に飲み込まれた。多分、何らかの鬼獣に飲み込まれたんだろっ」

「な、何らかの鬼獣って！」

声を荒げると、キルゲルが更に不満そうな表情を浮かべ、

「これは、全部お前の責任だ。我は言ったはずだ。我の力はお前の願いと思ひ。そして、お前はあの日、具現化した。漆黒を纏った我

が刃を」

「なっ！　そ、それが、一体なんだって言うんだ！　大体、お前、あの日から声掛けても返事すらしなかつたくせに！」

「我は今まで闇の中にいた。我は何度も呼びかけたさ。だが、この分厚い闇が、それを通さなかった。闇と光は対極だ。我の力が光だとすれば、あの漆黒を纏った刃は闇。アレは使ってはいけない力」

突然、真剣な表情で語り始めるキルゲル。その表情に、今の状況がどれ程危険な状況なのか分かった。キルゲルが言いたい事も、何と無く理解出来た。全ての原因は僕自身。あの日　水守先生が殺された日、既に心は闇に飲み込まれていた。だから、鬼獣にその心の闇に付け込まれた。

自分の心の弱さを不甲斐無く思い俯くと、それをキルゲルは鼻で笑い、

「今更、落ち込んで何になる？　今、お前に出来るのは、この闇を切り裂く事だ」

「切り裂くって……闇を斬る事は出来ないだろ？」

「我を誰だと思っている」

「キルゲルだろ？」

キルゲルにそう返答すると、表情を顰め、

「バカにしてるのか？」

「い、いや、そんな事無いけど？」

笑みを浮かべると、キルゲルは小さくため息を吐き、静かに口を開く。

「我は、お前の願い、思いによってその形状を変える。お前がこの

闇を切り裂きたいと願えば、我はそれに添う武器へと変化する」

「って、事は……僕次第って事？」

「そういう事だ。我は元の姿に戻るが、もう一度具現化する。次は、願い強い想いをぶつける。そうしなければ、大変な事になるぞ？」

キルゲルが強い口調でそう言うと、その姿は消え弱々しい光が手元に戻った。

大変な事になる。その言葉の意味は、分かっている。そして、この現象を引き起こした鬼獣の正体もおおよそ見当はついていた。

静かに息を吐き、瞼を閉じ願う。

この闇を裂く力を。

どんな道をも切り開く力を。

もう誰一人失わない為の力を。

願い、強い想いを手の平に乗った弱々しい光へと込めた。

第二十八話 やるべき事

突然だった。

ドアを開けると、目の前に闇が広がっていた。そして、それは、今まさに晁を呑み込もうとしている。

「晁！」

思わず叫び、右手を伸ばす。だが、その手は空を切り、晁の姿が闇へ消えた。一瞬だった。また、目の前で、失ってしまった。

家族も 師匠も パートナーも 私は全てを失った。そう思った時、自然と涙が頬を伝う。

もう、涙がかれる位泣いたと思っていたのに
もう泣かないと決めたはずなのに

胸が苦しくなり、嗚咽を吐きながらその場に座り泣いていた。
気が付けば、部屋の隅で膝を抱えて座っていた。火野と名乗った教育実習生は、泣きじゃくる私を心配していたが、買い物に行ったきり帰って来ない晁の事を探してくると、出て行ってしまった。

抱えた膝に顔を埋め、鼻を齧る。それから、自らに問いかける。

“どうすればいいのか”

と。

答えは返って来ない。もちろん、分かっていた。答えは自分自身で出さなければならぬ事を。そして、その答えも。

顔をゆつくりと上げ、涙の痕を左手の甲で擦り、ゆつくりと立ち上がる。自分が今すべき事を実行する為に、棚に置いた翼型のアクセサリーが付いたイヤリングを手を取った。

「セイラ。お願い！ 晁の居る場所を探って！」

『分かったわ』

「出来るだけ、早くお願い」

『分かっている。ふふっ』

「な、何？ 急に笑って？」

『やっと、いつもの愛ちゃんらしくなってきたから、嬉しくて』

大人っぽく『ふふふっ』と笑う。セイラは私にとって、お姉さんの存在だ。元々、大人びた口調と態度の為、と言う訳ではなく。私が幼い時から、セイラとは一緒に居る。だから、私にとってセイラはもう姉妹の様な関係だ。

そんなセイラの言葉に赤面していると、

『見つけたわ。愛ちゃん。ここから、西へ行った所に僅かに反応があるわ』

「西？ って事は……」

（姫！ その方角って言ったたら、オフィス街だよ！）

「オフィス街？ あんな所で何を」

頭の中に響いたヴィリーの声にそう返答すると、セイラが静かに、

『オフィス街って言ったたら、沢山人がいるんじゃない？』

「多分、居ると思うけど、それと何か関係あるの？」

（姫！ あの時の事を思い出してよ！ 晁を包んだ闇は、きっと闇の属性の鬼獣だよ！）

「闇の属性？ でも、そんな属性を持つ鬼獣なんて、今時居るの？」

闇の属性とは、五大属性よりも上位の属性で、光と対なる属性。

今となってはその存在すら確認されない程の希少なモノ。まだ育成生時代、一度書物で読んだ事があるが、光と闇は五大属性を遙かに

上回る強大な力で、過去に何度も衝突しては大きな災害をもたらしていると言う。

それは、随分と昔の事で、今現在ではその属性を所有する封術師やガーディアンも殆ど存在しない。育成生達の間では、都市伝説だとされていたが、まさか存在していたなんて。

何か嫌な予感がした。だから、すぐにセイラを具現化し、窓から飛び出した。体が本調子ではなく、上手く力を使えず、フラフラとするが、セイラがそれを上手くサポートする。

「大丈夫？ もう少し、スピードを落とす方がいいんじゃない？」

「大丈夫。何か、嫌な予感がするの……。あれが、本当に、闇の属性の鬼獣の仕業なら……」

（でも、今の姫の体じゃ、到底太刀打ち出来ないよ？ 相手は五大属性を上回る力を持つ陰の力なんだから）

セイラもヴィリーも心配してくれるが、私もこれ以上失いたくないモノがある。だから、譲れない。白翼は風を効率よく捕らえ、更に加速する。頬を伝う風が冷たく、風に激しく揺れる髪。高層ビルが近付き、私は右手にヴィリーを具現化する。蒼い銃。どれ位、力が残っているか、分からないけど、全ての力を注ぐ様に力を込める。その瞬間、グラツと体が傾く。

「愛ちゃん！ ダメ。力が乱れてる。このままじゃ落ちるわよ！」

「僕の具現化を解除して、セイラの方に集中しないと！」

「はあ、はあ……大丈夫。もう少し……飛べるでしょ」

消耗が激しく、言葉が途切れる。意識がもうろつとするのは、やはりまともな食事と睡眠もとってない所為だろう。自業自得。だから、こんな時に力が出ない。師匠に言われていた。どんな時も体調管理はしっかりしろと。こんな形で、その言葉の重みを知るなんて、

思ってもなかった。

よるめきながら徐々に降下していき、民家の屋根へと降り立った。

「はあ……はあ……」

『無茶するからよ。こんな状態で、私とヴィリーを同時に具現化するなんて』

「で、でも……」

『でもじゃないよ。姫。気持ちは分かるけど、ここで姫に倒れられたら困るよ』

「わ、分かってるけど……」

焦りが、判断力を鈍らせる。考えれば考える程、嫌なほうへと答えが向い、更に焦りが募る。

やがて、右手に握った蒼い銃が消滅し、白翼だけが残る。

「ごめん……じゃあ、セイラ……お願い……」

『愛ちゃん……』

「急いで……何かあってからじゃ……」

私の言葉に『分かったわ』とセイラが返答し、白翼が大きく空を掻く。羽ばたきと同時に体がゆっくりと浮き上がる。徐々に加速するが、先ほどよりもスピードは出ない。ヴィリーを具現化した事が相当力を消費したのだ。

『大丈夫？』

「ええ。平気よ。それより、晁の気配は？」

『大丈夫。このまま行けば……！』

突然、突風が吹き鋭い風音が耳元を過ぎる。

「えっ？」

思わず声を漏らすと、右側の翼の感覚が消え、ガクツと体が傾く。落ちる。そう思った瞬間には体が急激に落下する。

『愛ちゃん！』

「くっ！ だ、ダメ、間に」

思った時、突然体が軽くなった。気付くと、私は男に抱きかかえられていた。見覚えの無い知らない男。

「大丈夫か？」

男の言葉に、頷くと「そうか」と、言葉を返された。

歳は同じ位に見えるが、何処か大人びて見える。私を抱え、ゆっくりと民家の屋根に下りた男は、私を降ろすと、

「怪我は無さそうだな？ それより、こんな時間に堂々と空を飛んで……お前、まさか、育成学校通ってないのか？」

「なっ！ バカ言わないでよ！ これでも、トップの成績で」

「トップ？ お前が？ じゃあ、アレだな。お前の年は、相当出来の悪い生徒ばかりだったんだな……」

「なっ！」

男の失礼な物の言い方に、怒鳴ろうとしたが、頭がクラツと来てその場に膝を落とす。呆れた表情を向ける男は、

「そんな状況で、トップの成績って言われても、説得力がないんだよ。全く。お前、本当に卒業したのか？」

「し、したわよ……。あ、あんたこそ、色々知ってるみたいだけど

……」
「俺も、一応ガードイアンだからな。で、お前のパートナーはどうしたんだ？ こんなフラフラの相方を置いて、何処に行ったんだよ？」

男が辺りを見回す。

「いないわよ……私は、そのパートナーを、探して……」

「探して？ って、事は……もしかして、アレが、お前のパートナーだったりするのかわ？」

「アレって？」

「今、あの高層ビルの屋上で、俺のパートナーが、戦ってるんだけど……」

齒切れの悪い男に、掴みかかる。

「どつという事！ あ、晃は！」

「晃？ やっぱり、あいつか……全く、厄介ごとばかり……とりあえず、行くぞ。俺が連れて行ってやるから」

男がそう言い、私を抱きかかえると、屋根から屋根へと飛び移る。男は、小さく「しっかり捕まってるよ」と、告げると、そのまま勢いよく走り出す。周囲の目など、気にせずじ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4366h/>

ガーディアン ~もう一人の戦士~

2011年10月30日04時17分発行